

浦添市文化財調査報告書第12集

チヂフチャー洞穴遺跡

範囲確認調査報告書

1988年 3月

沖縄県 浦添市教育委員会

あ い さ つ

チヂフチャー洞穴遺跡は、昭和54年度に実施した市内遺跡分布調査によって発見された遺跡であります。

本遺跡一帯は、昭和58年頃から企業による宅地造成計画があり、本市教育委員会との調整の結果、遺跡を公園の一部として組み入れ保存することになりました。

遺跡分布調査時の表面踏査からは、沖縄産の陶器や、沖縄貝塚時代後期の土器・貝殻等が採集され、また風葬墓も確認されたことから貴重なものであるということで昭和61年3月には、市指定文化財として史跡に指定されました。

本報告書は、同史跡の保存と活用を考える上から遺跡の範囲、時代、性格等を確認するため昭和62年2月に実施した範囲確認調査の成果をまとめたものであります。

採集された遺物は、土器をはじめ、石器・貝製品・骨製品・陶器・磁器・貝類等17,000点余にもものぼっており、中には爪形文系土器（約6,000年前）も含まれ、貴重な歴史的資料になっています。

今後は、発掘された遺物を広く市民に公開し、活用を図っていくと共に、本報告書が、チヂフチャー洞穴遺跡の今後の保存活用のための指針づくりと、歴史的、学術的な解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、報告書発刊にあたり、御指導、助言を賜りました、大城逸朗氏、金子浩昌氏、黒住耐二氏、松下孝幸氏をはじめ、県の関係者に対し感謝とお礼を申し上げます。

昭和63年3月

浦添市教育委員会
教育長 西原正次

例 言

- 1 本報告書はチヂフチャー洞穴遺跡の範囲確認調査の成果を記録したものである。
- 2 報告書の作成にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して、感謝を申し上げます。
石質の同定 大城逸朗（県立教育センター）
獣魚骨の同定 金子浩昌（早稲田大学）
貝種の同定 黒住耐二（沖縄生物学会員）
人 骨 松下孝幸（長崎大学医学部）
- 3 報告書の執筆は下記のメンバーで分担し、編集は比嘉聡の協力を得て、松川が行った。
下地安広（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章、第Ⅳ章第1節1、第2節1、第3節1・2、第4節1、第5節1、第7節、第Ⅴ章）
松川 章（第Ⅳ章第1節2 a、第2節2 a、第3節3 a、第4節2、第5節2 a、第6節）
島袋春美（第Ⅳ章第1節2 b、第2節2 b、第3節3 b・c・d、第5節2 b、第8節）
- 4 図版42～45の貝類の番号は本文の表-7の貝類出土状況表の番号と一致させている。
- 5 今回の調査で得られた資料は浦添市教育委員会文化課で保管している。

目 次

あいさつ

例 言

本文目次

第Ⅰ章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	2
第Ⅲ章	調査の経過	2
第Ⅳ章	調査の成果	5
第1節	A-グリッド	7
1	層序	7
2	出土遺物	8
a	土器	8
b	骨製品	8
第2節	B-グリッド	8
1	層序	8
2	出土遺物	9
a	土器	9
b	貝製品	12
第3節	C-グリッド	13
1	層序	13
2	出土人骨	14
3	出土遺物	14
a	土器	14
b	骨製品	16
c	貝製品	17
d	ガラス製品	20
第4節	D-グリッド	20
1	層序	20
2	出土遺物	22
a	土器	22
b	石器	23
c	骨製品	25
d	貝製品	25
第5節	E-グリッド	25
1	層序	26
2	出土遺物	27
a	土器	27
b	貝製品	27
第6節	表採資料(土器)	27
第7節	その他の人工遺物	28
第8節	自然遺物	39
1	貝類	39
2	節足・脊椎動物遺存体	44
第Ⅴ章	まとめ	53

挿図目次

第1図浦添市の位置	3	第21図B-グリッド出土の土器	23
2 遺跡の位置	4	22 B-グリッド出土の石器	24
3 グリッド設定図	6	23 B-グリッド出土の骨・貝製品	25
4 A-グリッドの層序	7	24 C-グリッドの層序	26
5 骨製品	8	25 C-グリッド出土の貝製品	27
6 イ-グリッドの層序	8	26 表採資料(土器)	28
7 イ-グリッド検出の落込み	9	27 磁器(碗)	29
8 イ-グリッド出土の土器(1)	10	28 陶磁器(碗)	30
9 イ-グリッド出土の土器(2)	11	29 磁器(蓋・碗・皿)	31
10 ミニチュア土器	12	30 磁器(皿・土瓶)	32
11 イ-グリッド出土の貝製品	12	31 陶器(壺・壺蓋・鉢)	33
12 A-グリッドの層序	13	32 陶器(甕・甕底部?)	34
13 A-グリッド出土の土器	15	33 陶器(壺・壺底部?)	35
14 A-グリッド出土の骨製品	16	34 陶器(壺・播鉢・器種不明底部・鉢)	36
15 貝刃模式図	17	35 瓦質土器	37
16 A-グリッド出土の二枚貝 有孔製品(貝錘)	19	36 陶器(底部)・円盤状製品・瓦	38
17 A-グリッド出土の貝刃	18	37 貝類棲息地別出土状況	39
18 ガラス製品	20	38 シレナシジミ大きさ殻高別構成比	43
19 A-グリッド出土の貝製小玉 ・イモガイ製品・トミガイ製品	21	39 イノシシ歯萌出・咬耗度	52
20 B-グリッドの層序	22	40 魚類地区別出土状況	52
		41 イノシシ歯牙による年齢別構成比	52

表目次

表-1 グリッド別遺物出土状況	5	表-8 甲殻類出土状況	48
-2 骨製品観察一覧	16	-9 両生類出土状況	48
-3 二枚貝有孔製品(貝錘)観察一覧	17	-10 リクガメ出土状況	49
-4 貝刃観察一覧	18	-11 ネズミ類出土状況	49
-5 貝製小玉観察一覧	20	-12 大型獣出土状況	49
-6 骨製品観察一覧	25	-13 魚類出土状況	50
-7-1 貝類出土状況	40	-14 イノシシ歯牙出土状況	50
-7-2 貝類出土状況	41	-15 イノシシ出土状況	51

図版目次

図版 1 遺跡近景	55	8 イ-グリッド発掘状況	58
2 洞穴入口	55	9 イ-グリッド層序	58
3 洞穴前庭部の遺物出土状況	56	10 イ-グリッド検出の落込み	59
4 前庭部北側の遺物出土状況	56	11 イ-グリッド出土のミニチュア土器 ・貝製品	59
5 A-グリッド発掘状況	57	12 イ-グリッド出土土器(1)	60
6 A-グリッド層序	57	13 イ-グリッド出土土器(2)	61
7 A-グリッド出土の骨製品	57		

14 A-グリッド発掘状況	62	30 磁器(蓋・碗・皿)	73
15 A-グリッド層序	62	31 陶器(壺・壺蓋・鉢)	74
16 A-グリッド出土土器	63	32 陶器(甕・甕底部)	75
17 A-グリッド出土二枚貝有孔 製品	64	33 陶器(壺・壺底部)	76
18 A-グリッド出土骨製品 ガラス製品・貝製品	65	34 陶器(壺・播鉢・器種不明 底部・鉢)	77
19 洞穴内部の状況	66	35 瓦質土器	78
20 B-グリッド発掘状況	66	36 磁器(皿・土瓶)	79
21 B-グリッド層序	67	37 陶器(底部)・円盤状製品 ・瓦	79
22 B-グリッド出土爪形文系土器 ・骨製品・貝刃	67	38 出土魚骨(1)	81
図版23 B-グリッド出土石器	68	39 出土魚骨(2)	81
24 C-グリッド発掘状況	69	40 出土イノシシ骨	83
25 C-グリッド層序	69	41 出土イノシシ骨・大型獣骨	83
26 C-グリッド出土貝製品	69	42 出土貝類(1)	84
27 表採資料(土器)	70	43 出土貝類(2)	84
28 磁器(碗)	71	44 出土貝類(3)	85
29 磁器(碗)	72	45 出土貝類(4)	85

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は昭和54年度に本市教育委員会が行った市内遺跡分布調査（註1）によって発見された埋蔵文化財の一つで、洞穴一帯に古墓があること、洞穴入口付近に土器、貝殻などが散見されることから周知の遺跡となった。

昭和56年頃から幾つかの企業が開発したいと開発調整があったものの、文化財があるという理由から開発を見合わせる状況が続き、網渡りの保存が続いていた。しかし、昭和58年には企業による団地造成が計画され、本市教育委員会に文化財の有無についての照会文書、取扱いの文書が舞い込むこととなった。

前記、開発に対して本市教育委員会は「…、一帯は自然の良さと、景観のすばらしいさに加え、埋蔵文化財チヂフチャー洞穴遺跡があり、保全に対する十分な処置が計られることを望む」との文化財調査審議会の調査報告書をもって協議にあたったところ、本洞穴遺跡を公園の一部に組み入れ保存されることとなり、昭和61年3月30日には市指定文化財の史跡となった。

その後、同史跡の保存活用を考える意味から遺跡の範囲、時代、性格などを確認するため、昭和61年度事業計画に組み入れ、昭和62年2月に範囲確認発掘調査を実施する運びとなった。

註1 『浦添の文化財-遺跡分布調査報告書-』浦添市文化財調査報告書第1集 浦添市教育委員会 昭和55年3月

第2節 調査体制

事業主体	浦添市教育委員会	教育長	西原正次
事業所属	浦添市教育委員会文化課	課長	宮里良一（昭和61年度）
	“ “	“	豊里友建（昭和62年度）
事業総括	“ 文化財係	係長	前津政廣
事業事務	“ “	主事	小浜恵子
“ “	“ “	“	下地安広
発掘調査員	“ “	“	下地安広
“ “	“ “	臨時職員	長嶺 均
発掘作業員	上原ミヨ・古堅厚徳・城間辰重・宮城ユキ子・宮城清子・永山ケイ子・宮平ヨシ子・城間昌貞		
整理作業員	島袋春美・下地 傑・津波古良子・高橋良子・平良貞子・安和千代子・中野洋子・金城京子・上里恵子・上地孝子・当間初江・与那嶺文子・儀間るみ子・渡具知征子・比嘉典子・仲地智子・住友千恵子・比嘉清美・仲宗根菊枝・又吉純子・富里順子・嘉数喜久子・大湾政人・比嘉 聡		

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

浦添市は沖縄県の沖縄本島南部に位置する。東支那海側の海岸沿いであって、東に西原町、南に那覇市、北に宜野湾市と隣接する人口約9万人の県下第3の都市である。地形はおおまかに北側を頂点として南西側と南東側に傾斜する地形を呈する。地質の大部分は小祿砂岩層と与那原粘土層を基盤として、その上に琉球石灰岩が載っており、土壌はそれらの風化土であるジャールと島尻マージが広く市域に分布していて、アルカリ性で肥沃な土地となっている。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、高温多湿である。

本遺跡は国道330号線を北向け浦添大橋を渡った左手、浦添市商工会館裏手の安川団地小公園内、標高55m前後の石灰岩丘陵ドリネ地形に形成された洞穴入口一帯に所在する。

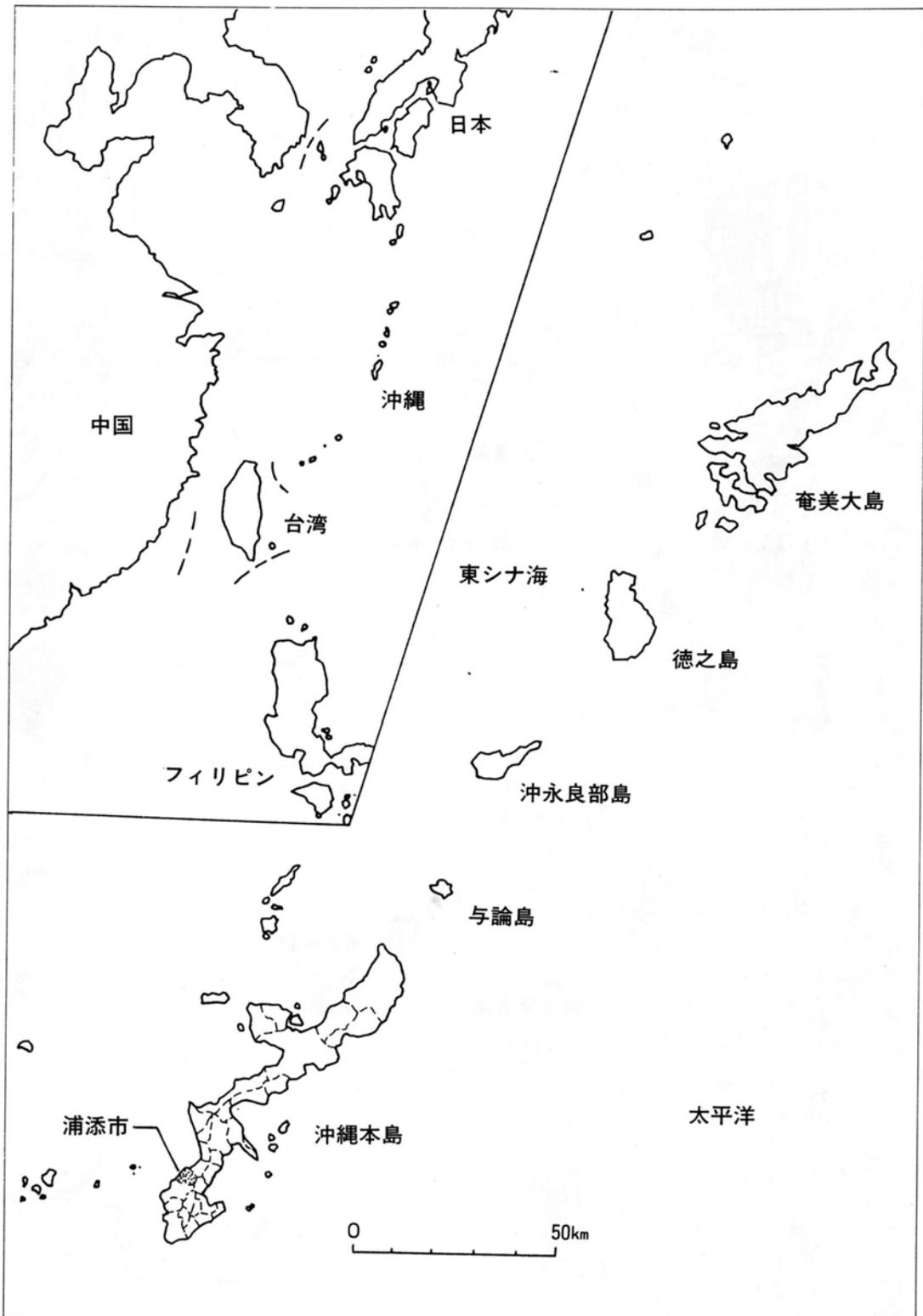
以前は付近にチヂフチャー古墓群、牧港川を渡った対岸には真久原遺跡がみられ、草木がうっそうと生い茂る名勝としての景観もあったが、今では立体道路としての建築美の風景になっている。

洞穴については大城逸朗・新垣義夫両氏の報告（註1）によると幅4～11m、高さ1.5～4.5m、全長およそ110mを測る石灰岩中に形成されているとある。さらに、二次生成物としてはストロー、ツララ石、石匂、石柱、中空鍾乳石、洞穴サンゴ、ヘリタイト、フローストーンと多彩であり発達状態はよいとある。

註1 『浦添市の洞穴調査報告書』 浦添の文化財第2集付属資料 浦添市教育委員会 昭和57年3月

第Ⅲ章 調査の経過

発掘調査は昭和62年1月19日から2月20日までの期間で実施した。調査を始める前に洞穴内を踏査し、遺物の分布範囲、広場及び水場などの確認調査を行った。踏査では洞穴入口一帯に貝殻・土器・陶磁器などの遺物が散見されたが、入口から約15mを過ぎると光も殆ど入らず、遺物が僅かに認められるのみであった。洞穴内約25m先では、高さ約4～5m、幅約17mの本洞穴で一番大きい広場に達し、広場の床には人頭大の石灰岩を1・2段全体的に敷いた様子が認められた。又、同広場の奥では約2～2.5m降りた窪み部分に最初の水溜りも確認できた。しかし、水の流れは悪いように思われた。この先の地形は険しくなり、奥に向かって左側から右側に急傾斜し、洞穴内約80～90m付近では地形はさらに険しくなり、細長い水溜りをつくる場所もある。洞穴内約100m付近では、高さ2m、幅約3～5mを測る最も奥に位置する広場があり、缶詰の缶、軍靴、現代の磁器など去る第2次大戦の遺物が認められた。



第1図 浦添市の位置



第2図 遺跡の位置

前述した踏査の状況から、古代人の住居址は奥行き約25m付近の水溜りから入口部分及び前庭部に位置すると推察されたことから洞穴内部（水溜りから入口まで）と前庭部に分けて発掘調査を実施することにした。

調査は始めに前庭部周囲の小さい岩陰に所在する近代の陶磁器片をイ・ロ・ハの群として露出、写真撮影、取り上げの順に行い、次に洞穴入口から奥行き約25mの間である程度の広さを持つ3ヶ所に入口から順にA、B、Cの3グリッドを設定し、発掘調査を行った。その次に前庭部に2グリッド（ア・イ）を設定し発掘調査を実施した。尚、発掘調査の際に包含層の土フルイを（1mmの網を使用）現地に最も近い牧港川で実施した。

以下、調査の内容については調査の成果の中で略述する。

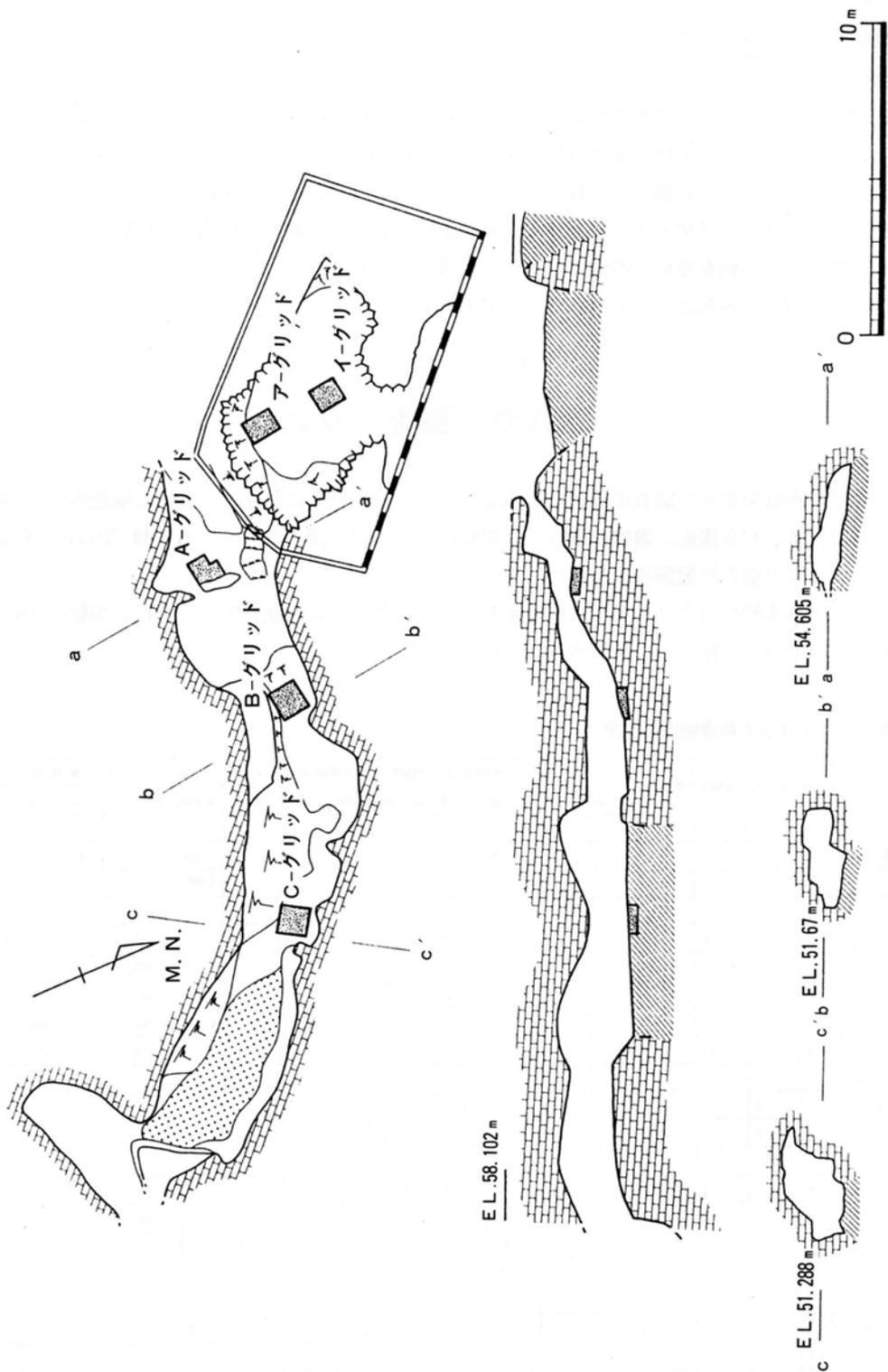
第IV章 調査の成果

発掘調査は第III章の調査の経過で略述したように、前庭部に散乱する近代の陶磁器等の遺物の露出作業、写真撮影、遺物の取り上げの順に始め、次に調査の主体である洞穴内および前庭部のグリッド別の発掘調査を行った。

以下、基本的にはグリッド別に概述するが、前庭部表面に散乱していた近代の陶磁器等の遺物については、一括して、後で扱うことにした。

表一 1 グリッド別遺物出土状況

地区	遺物	土器	石器	貝製品	骨製品	ガラス製品	陶質土器	沖繩製陶器		円盤状製品	本土製陶磁器		現代	貝類	脊椎動物遺存体			合計
								上焼	荒焼		陶磁器	七輪	遺物	遺存体	魚骨	イノシシ	その他	
ア	グリッド	7			1			1			3				17	180	23	232
イ	第I層	1,479						13	4		1			164		4	171	1,836
	II	20			2						1			1,095	1,708	9	402	3,237
	III													40	8			48
	小計	1,499	0	0	2	0	0	13	4	0	2	0	0	1,299	1,716	13	573	5,121
A	第I層	408		2			1	2	1		9		2	332	162	10	45	974
	II	3		2							1			303	187	35	2	533
	III	23		23	3	1								1,573	4,067	64	1,639	7,393
	小計	434	0	27	3	1	1	2	1	0	10	0	2	2,208	4,416	109	1,686	8,900
B	第I層		1													8		9
	II		1											114		2		117
	III	109	5					2						134	7	734	31	1,022
	IV													295				295
	小計	109	7	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	543	7	744	31	1,443
C	グリッド	1		3				2			11			145	299	9	107	577
前庭部	イ						2	19	7		29	1	3					61
	ロ							16	23	1	47	1	23					111
	ハ							2	2		18		8					30
	小計	0	0	0	0	0	2	37	32	1	94	2	34	0	0	0	0	202
表採・不明	13	1					1	3		11		1		869			514	1,413
合計	2,063	8	30	6	1	3	58	40	1	131	2	37	4,195	7,324	1,055	2,934	17,888	



第3図 グリッド設定図

第1節 アーグリッド

本グリッドは岩盤が落ち込んできたドリーネ地形部分、すなわち洞穴前庭部に設定した2グリッド中の岩陰に近い方のグリッドである。以下、層序、遺物の順に略記する。

1 層 序

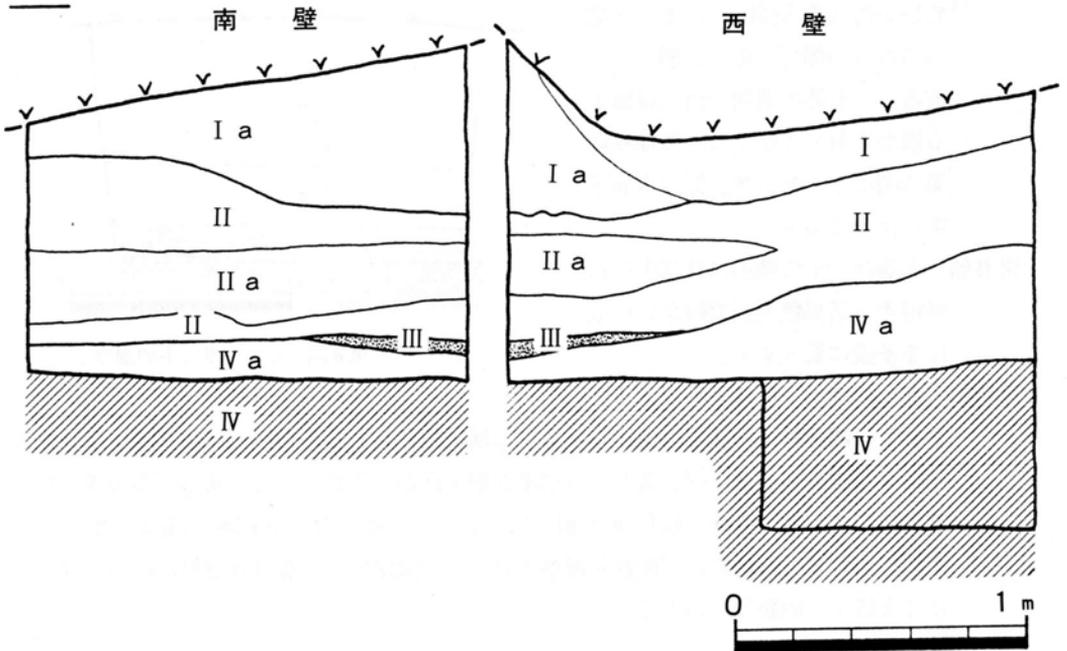
第I層 本層は前庭部の中央から洞穴および岩陰側にゆるく傾斜する褐色土と岩陰の真下で二次堆積した締りのない赤土（第I a層）から成る層で、層の厚さは約15~60cmを測る。遺物は近世・近代の陶磁器片等が検出された。しかし、第I a層からの遺物の検出は極めて少なかった。

第II層 第I層の褐色土に比較して濃い褐色を呈する土層で全体に前庭部中央側から岩陰側にゆるく下る。層の北西側に厚さ約20cmを測るレンズ状の黄褐色土層（第II a層）が認められたが、発掘の状況から部分的な変化であったので同一の層として扱った。遺物は厨子甕の破片、土器片等が検出されたが、第II a層からの遺物の出土は極めて少なかった。

第III層 本層は北西隅に認められた焼土と思われる赤土で厚さ約6cmを測るレンズ状を呈する層である。本来は文化層に含める層と考えるが、判然としないため、説明しやすいように1つの層として扱った。遺物は認められなかった。

第IV層 赤土の地山である。上部の土器等の遺物が出土する部分を第IV a層、いわゆる地山を第IV層とした。

E L. 56. 150 m



第4図 アーグリッドの層序

第4図 アーグリッドの層序

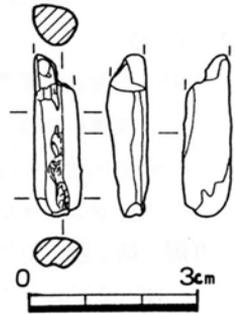
2 出土遺物

a 土器

本区では7点の資料が採集された。いずれも胴部の小破片で、胎土、混入物、器色等から沖縄貝塚時代後期に属するものである。胎土は砂質（1点）と泥胎質（6点）のものがあり、器色は橙褐色を呈し、焼成は不良である。

b 骨製品

第5図の1点のみで、イノシシの長管骨を棒状に加工したものである。棒の一端は丸みを帯びているが、他に加工痕はなく、形状から骨錐の軸頂部と推定される。残存部の長さ28.5mm、幅8.3mm、重さ1.4gを測る。出土層は不明である。



第5図 骨製品

第2節 イーグリッド

本グリッドは洞穴前庭部のほぼ中央に設けた2×2mのグリッドである。以下、層序、出土遺物について概述する。

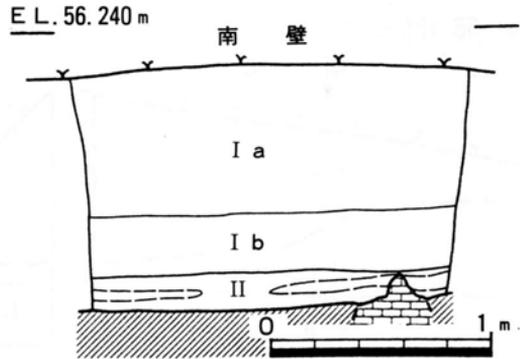
1 層序

第I層 本層は褐色土層で、細かい石灰岩粒を混入する攪乱がほとんど認められない部分（第I b層）から成る。土器等の遺物の出土は第I b層から最も多かった。ちなみに第10図のミニチュア土器は本層下部の出土である。

第II層 本層は赤土の地山にほぼ平行に堆積する暗褐色土層で細かい貝殻片を多量に混入する。

第III層 赤土の地山でほぼ水平である。

しかし、部分的に石灰岩も認められる。本層に認められる落ち込みは第7図に示したように7基認められた。尚、落ち込みは第2層上面から認められた。落ち込みの深さは3基については地山面から約10cmを越えたが、他の4基は約5cm前後と浅かった。前述の状況から3基は柱穴の可能性も推察されたが、決定できる裏付け資料が得られなかったこと等から即断は保留する。

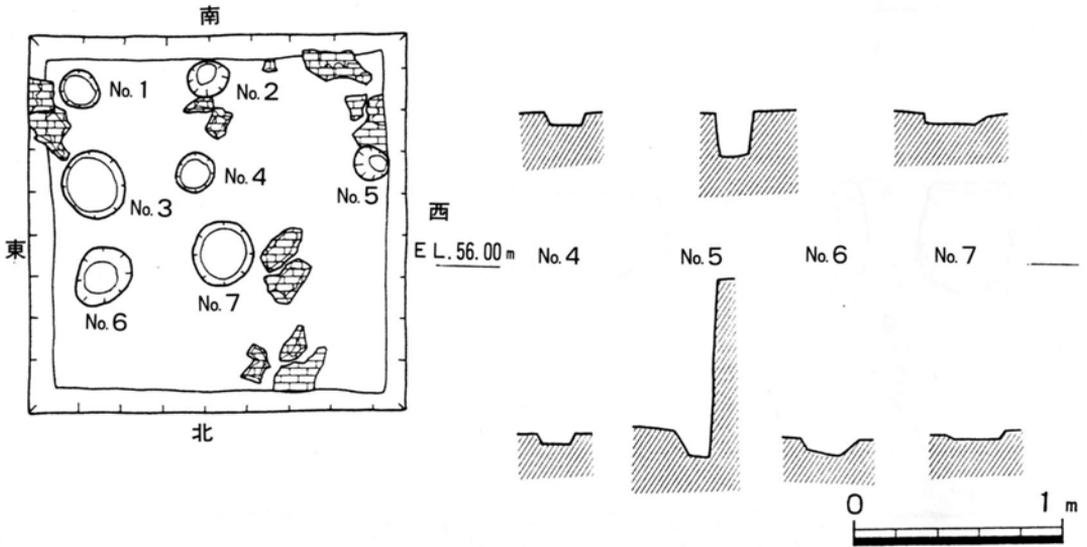


第6図 イーグリッドの層序

E L. 56.00 m No. 1

No. 2

No. 3



第7図 イーグリッド検出の落込み

2 出土遺物

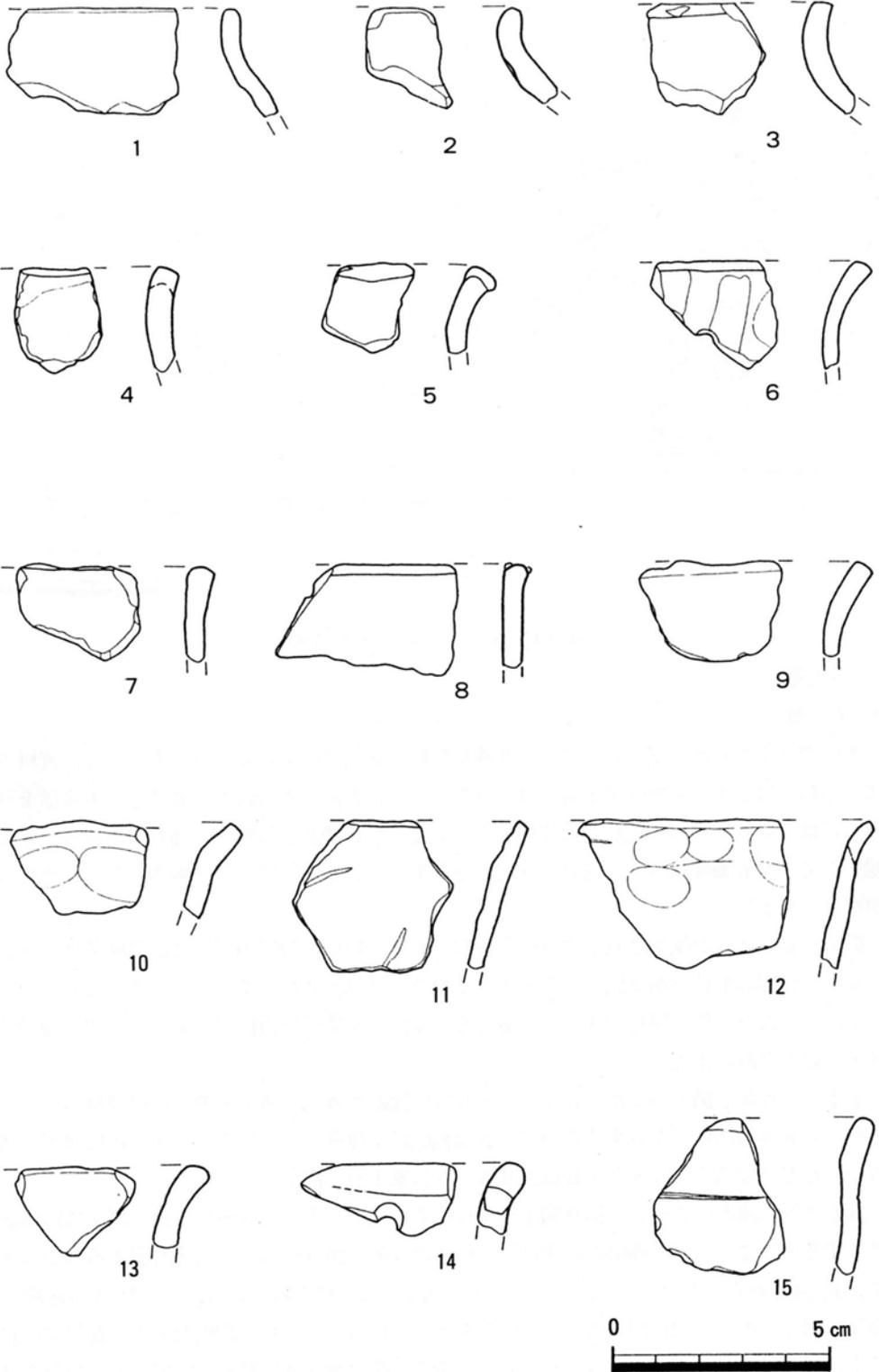
a 土器

本区で採集された土器は1499点で、沖縄貝塚時代後期の前半に属するものである。資料の中には第10図に示すミニチュア土器も得られている。ほとんどの資料が小破片のため全形を窺えるものはない。採集された資料は器種からみると壺形、甕形、鉢形の3種がみられる。胎土は泥胎質で、器面調整は悪く、内外面は凹凸をなす。器色は淡橙色ないし褐色が多く、焼成は不良なものが多い。

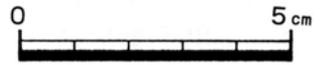
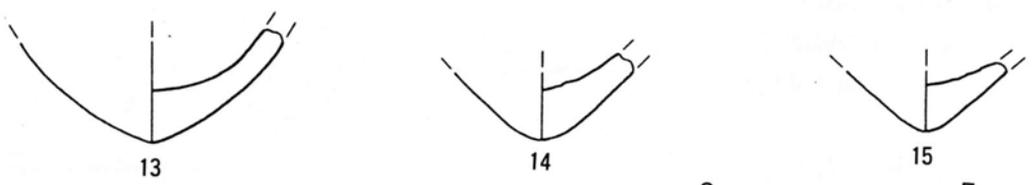
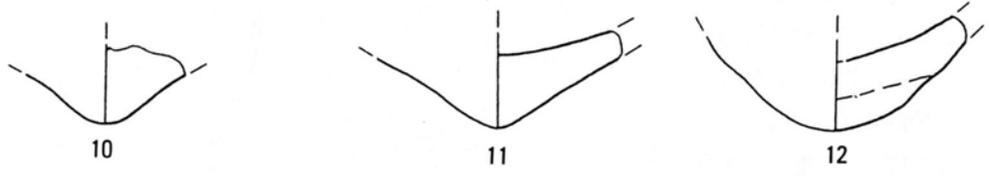
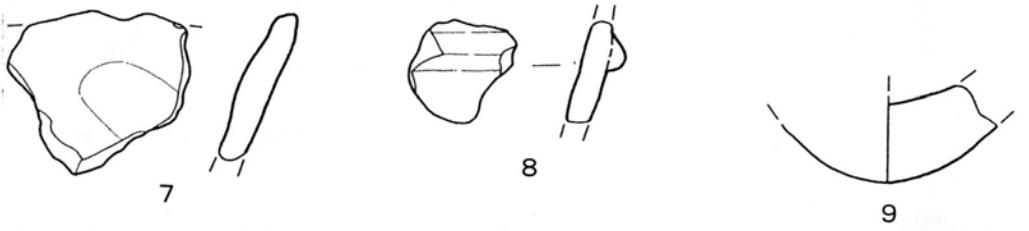
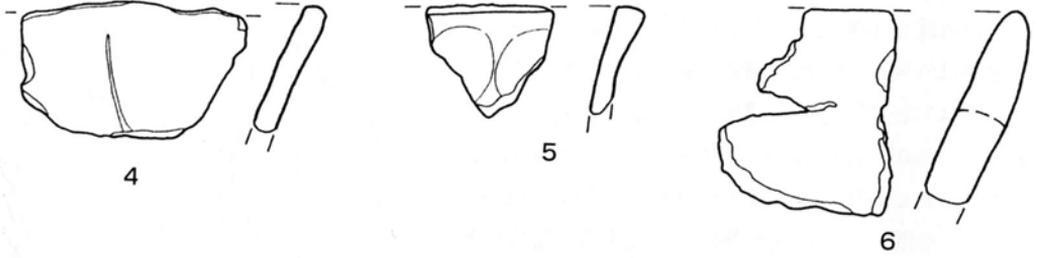
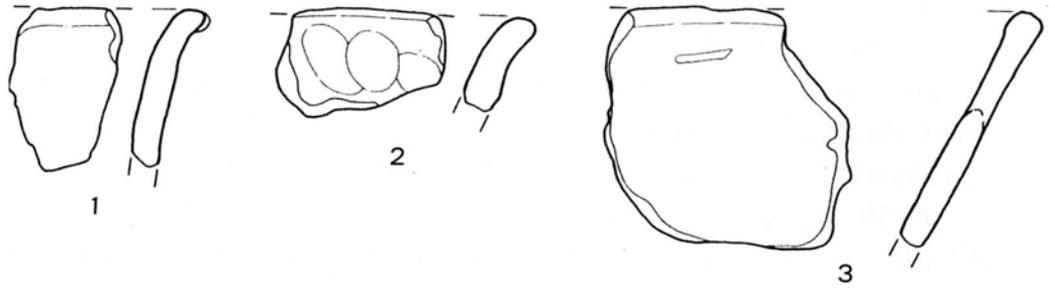
壺形土器は4点が採集され、口唇部から頸部までが短い、短頸の器形で、口縁部は直口を呈する。口唇部の形状は第8図1・3・4は平坦で、2は舌状につくられる。4は口唇部の左側が上昇しており山形口縁をなすものであろう。4点とも焼成は良好である。1・2は第I層、3・4は第II層の出土。

甕形土器は第8図5～8に示した。5・6は口縁部が外反するもので、口唇部は平坦につくられる。6は頸部に孔を有するもので、孔は焼成後に穿孔されている。7・8は口縁部がほぼ直口するものである。5・7・8は第II層、6は第I層の出土。

鉢形土器は第8図9～15、第9図1～7に示す13点で、第8図9～15、第9図1は口縁部が外反するものである。口唇部の形状は平坦なもの(第8図9～11)、舌状を呈するもの(第8図12)、丸みをもつもの(第8図13～15、第9図1・2)の3種がある。9・10は口縁部が朝顔状に開くもので、10は製作時の指頭圧痕を残している。11と12は比較的薄手の資料で、11は胎土に赤色粒を混入する。13は孔を有するもので、孔は焼成後に穿孔されている。14は沈線文を横位に施すものである。



第8図 イーグリッド出土の土器(1)



第9図 イーグリッド出土の土器(2)

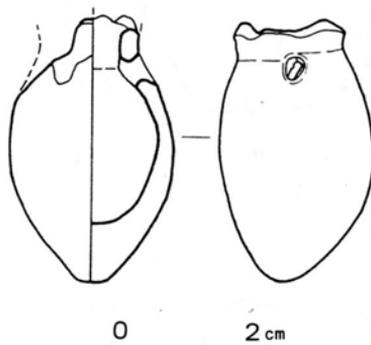
第9図3～7に示すものは口縁部が直口するもので、口唇部の形状は3～5は平坦、6・7は舌状を呈する。3・6は波状口縁をなすもので、2は縦位に沈線文を1条描いている。6は採集資料の中では器厚が厚い（約9mm）もので、胎土に石灰岩細礫片を混入する。第8図11と第9図4は第I層、他は第II層の出土。

有文胴部は第9図8に示す断面三角形の小凸帯を貼り付ける胴部資料で、器色は橙褐色を呈する。第I層の出土。

底部資料を第9図9～15に示した。7点とも器形は尖底で、9は丸底的な資料である。立ち上がりを見てみると緩やかに胴部へ移行するもの（9・11）、急角度で立ち上がるもの（10・12・13～15）がある。9・10・12・14・15は第I層、11・13は第II層の出土。

ミニチュア土器（第10図）

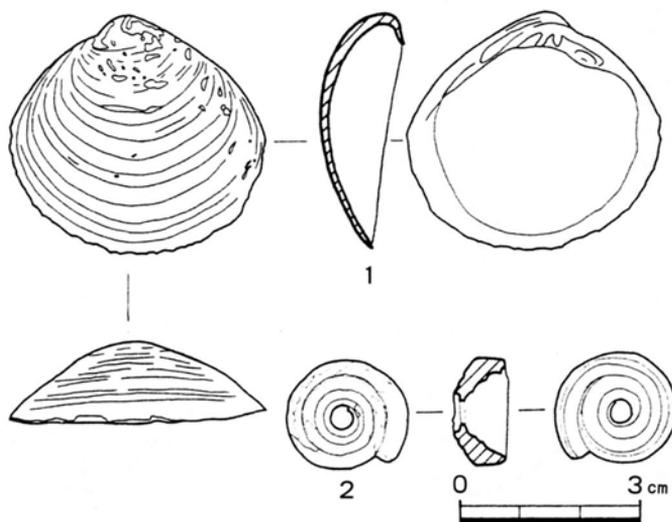
口縁部を半欠するが全形の窺える資料である。口縁部は外反し、頸部で締め胴部の膨らむ器形で、底部は尖底である。頸部には焼成前に穿孔された孔を有するが、紐づれ痕は認められない。器面調整は擦痕を施した後、ナデ仕上げされる。胎土には石英の細粒を混入し、色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。第I層最下部の出土。



第10図 ミニチュア土器

b 貝製品

第11図1・2に示す2点が得られている。1はシレナジミ製の貝刃である。左殻を用いたもので殻長60mm、殻高56mm、重さ17.2gを測る。付刃の範囲は前背縁から後背縁におよび、剥離も明瞭である。剥離の幅は0.5～4mmである。第II層の出土。



第11図 イーグリッド出土の貝製品

2はイモガイ科の殻頂を横位に用い円盤状に加工したものである。破損

品で螺塔面は殻が風化しているため研磨か磨耗か確認できない。体層側は研磨されている可能性が高い。残存部の最大径20.1mm、厚さ19.8mm、重さ2.6g、孔径4.4mmを測る。第II層の出土。

第3節 A-グリッド

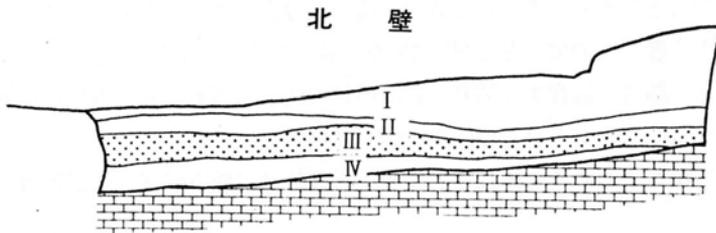
本グリッドは洞穴の入口から約5m入ったところ、いわゆる岩陰に設定したグリッドである。設定した5グリッドの中で最も多量の遺物が検出された。以下、層序と遺物について概述する。

1 層序

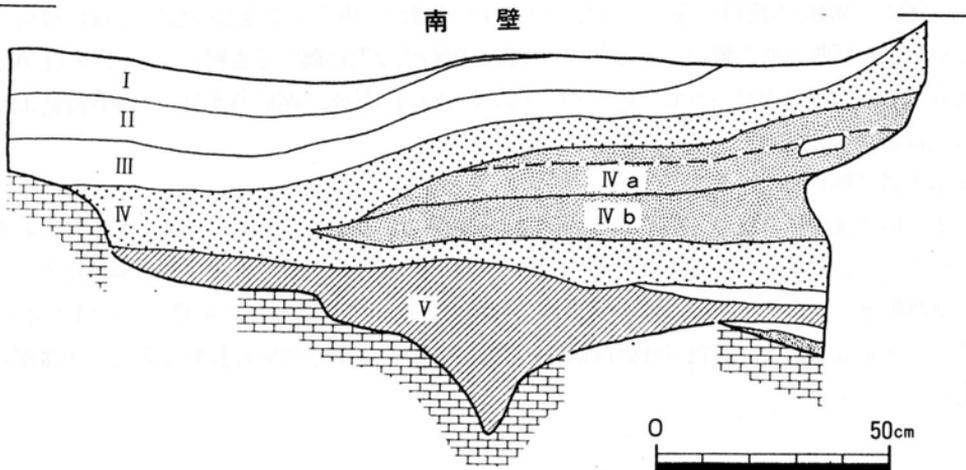
第I層 本層は非常に乾燥した黄褐色土で、土の締めりはない。同層は踏みつけるとほこり状に舞うほど上面はパウダー状を呈する。層の厚さは厚い所で約10cmを測り、グリッドの中央に移行するにつれて次第に第II層面になじんで行く。

第II層 本層はグリッドの北側から南側に傾斜する赤色混礫土層で、グリッド南側では第I層の下方に位置するもののグリッド中央から北側には第I層が達しないため、本層及び次の第III層は上方に露出した状態となる。遺物は土器片と近世の陶器片（荒焼等）が出土

E L. 54.300 m



E L. 54.300 m



第12図 A-グリッドの層序

した。

第Ⅲ層 本層は淡い褐色を呈する土層で、グリッドの北側から南側に多少起伏を持ちつつ傾斜する。人工遺物の検出は少なかった。

第Ⅳ層 本層は3枚の灰層を含む暗褐色土層である。層の厚さは北壁で約55cmと厚く、南壁側では約13cmと層の厚さは、次第に薄くなる。層は上面で傾斜するが、層の下方面ではほぼ平坦である。3枚の灰層は上位のものから概述すると、灰色を呈し、手ざわりがフカフカする層を第Ⅳa層。黄白色を呈し、きめが非常に細かい層を第Ⅳb層。第Ⅳ層の最下部で北側隅に認められる薄い灰色の層は第Ⅳc層とした。第Ⅳc層の下方部分では第Ⅴ層を掘り込んだと思われる部分が認められ、最下部に焼土が認められた。

第Ⅴ層 本層は黄色土で非常に細かい砂粒を含む。洞穴内の地山層と推察されるもので、人工遺物は認められなかった。

2 出土人骨

第Ⅱ層より人骨の骨片5点、歯3点が検出された。骨片は前頭骨、下顎骨、左と右の上腕骨に大別されるが、いずれも小破片のため特徴を捉えることは困難であった。しかし、資料の状況からほぼ同一個体で女性の可能性が推察された。

下顎骨については一見抜歯をしたように見えるが、沖縄では見ない広範囲の抜歯になること、骨の保存が悪いこと等からして、別の要因で歯が抜け落ちたものと推察された。

歯はいずれも上顎のもので、左のM¹、右M¹、M²、左あるいは右のP¹、P²であった。骨の年代については上腕骨を観察する限り、貝塚時代の特徴が認められるものの頭骨の厚さが近世の人骨と大差がないことなどから現時点の即断は保留したい。

尚、人骨の原稿をまとめるにあたり、長崎大学医学部の松下孝幸氏の御指導を賜った。

3 出土遺物

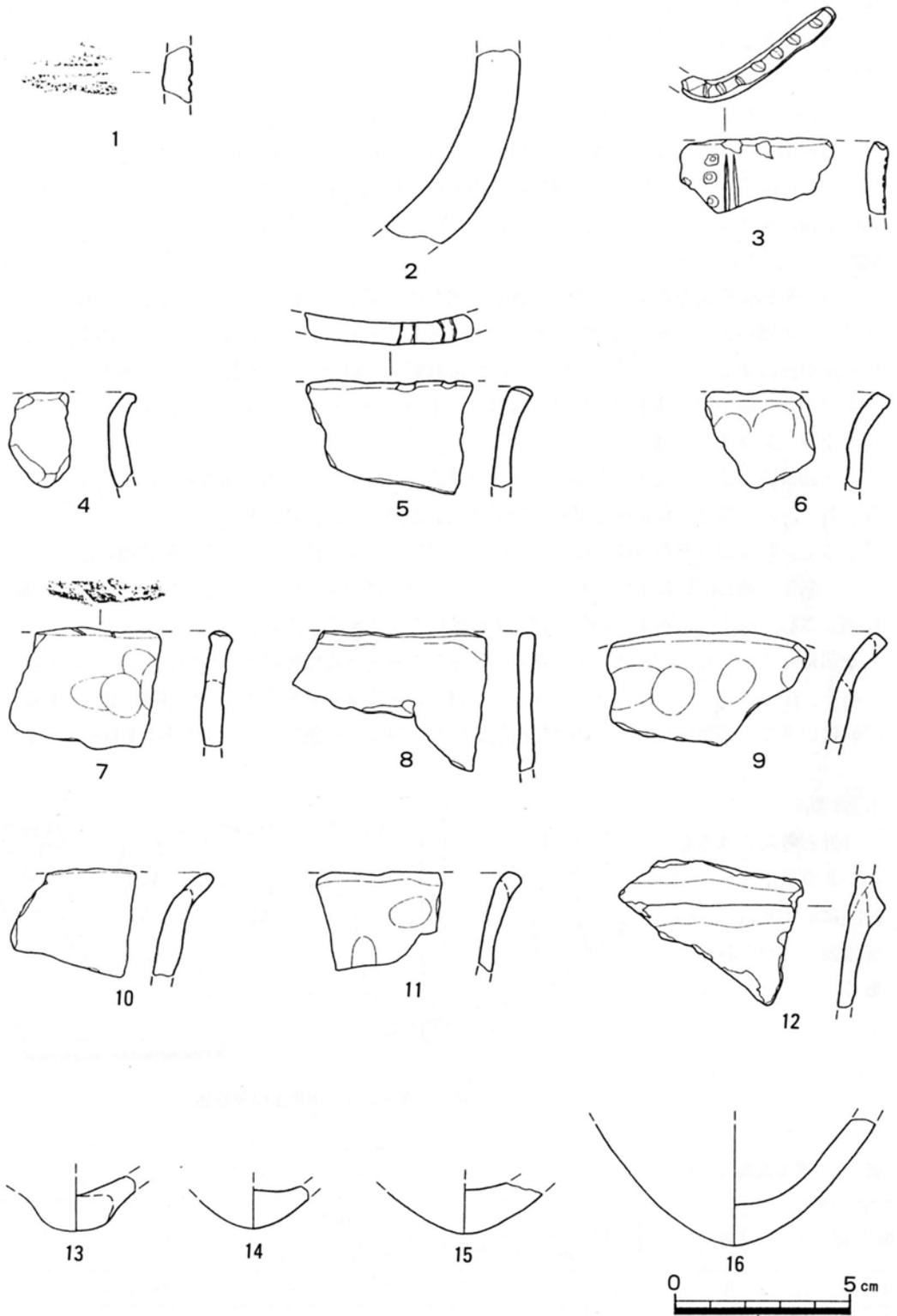
a 土器

本区では434点の資料が採集された。いずれも小破片で復元して全形の窺える資料は得られていない。採集された資料のほとんどは沖縄貝塚時代後期に属する資料で、他に前期土器と考えられるものが2点得られている。後期土器は一般的に胎土が泥胎質を呈し、器面調整は悪い。器色は褐色を基調とし、焼成不良なものが多い。

前期土器（第13図1・2）

1は横位沈線文の施されるもので、少なくとも3本の沈線文が認められる。胎土には石英砂粒を混入し、器色は外面褐色、内面茶褐色を呈する。焼成は良好である。第Ⅱ層の出土。

2は器厚が1.2cmを測る厚手の胴下部の資料で、外面に条痕を僅かに残す。胎土に石英とチャートを混入する。器色は外面淡褐色、内面茶褐色を呈し、焼成は良好である。第Ⅲ層の出土。



第13図 A-グリッド出土の土器

後期土器 (第13図 3~16)

器種は壺形、甕形、鉢形の3種が認められた。

壺形土器 (第13図 3・4)

3は口縁部がコーナーを形成するもので、口縁部は僅かに外反し、口唇部は平坦につくられる。口唇部と口頸部に文様が施され、口唇部には単篋工具による刻文を施す。口頸部はコーナー部分に縦位沈線文と半截竹管状工具による円形の刺突文を施している。第Ⅲ層の出土。4は口縁部が僅かに外反するもので、口唇部は舌状につくられる。出土層不明。

甕形土器 (第13図 5~8)

5は口唇部に刻文を施すもので、口縁部は僅かに外反する。胎土に黒色鉱物と赤色粒を混入する。第Ⅰ層の出土。6は口縁部が外反し、口唇部は平坦につくられる。第Ⅲ層の出土。7は口縁部が直口するもので、平坦に成形された口唇部には斜行の刻目を施す。第Ⅲ層の出土。8は器厚が約4mmを測る薄手の資料で、口唇部は平坦につくられる。第Ⅲ層の出土。

鉢形土器 (第13図 9~11)

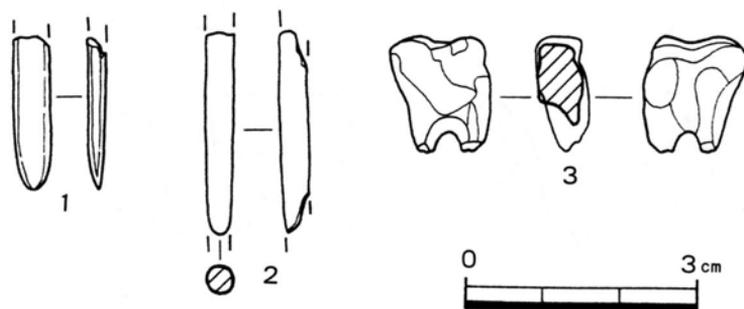
9・10は口縁部の外反するもので、9は口唇部が平坦をなし、内外面に製作時の指頭圧痕がみられる。10は口唇部が舌状を呈し、胎土には9と同じく赤色粒を混入する。9・10とも第Ⅲ層の出土。11は口縁部がほぼ直口するもので、口唇部は丸く仕上げられる。第Ⅱ層の出土。

有文胴部は第13図12に示したもので断面三角形の凸帯を貼り付けている。器面は比較的丁寧に調整され、胎土には石英・石灰岩細片・赤色粒を混入する。第Ⅲ層の出土。

底部は4点を第13図13~16に示した。形状をみても13は乳房状尖底で、他の3点は尖底である。後者は立ち上がりの緩やかなもの(14)、急角度で立ち上がるもの(15・16)がある。焼成は良好で、器色は13・15・16は橙褐色を呈し、14は淡褐色である。4点とも第Ⅲ層の出土。

b 骨製品

骨針と考えられるものが3点出土した。第14図に示すもので、詳細は表-2のとおりである。



第14図 A-グリッド出土の骨製品

表-2 骨製品観察一覧

単位: mm/g

No.	図番号	層	骨部位	完破	法 量				断面形状	加工状況
					長さ	幅	厚さ	重さ		
1	第14図 1	Ⅲ	腓骨	破損	19.0	4.8	2.7	0.2	長方形	先端をへら状に加工。
2	2	Ⅲ	肢骨	破損	26.0	3.5	2.6	0.3	円形	四肢骨を棒状に加工。
3	" 3	Ⅲ	腓骨	破損	14.7	6.7	6.7	0.8	—	遠位部に径4.5mmの孔を穿孔。

c 貝製品

貝製品の出土は本遺跡で最も多く、実用品と装飾品が出土している。実用品と考えられるものは二枚貝有孔製品（貝錘）-12点、貝刃-3点、装飾品と考えられるものは貝製小玉-9点、イモガイ製品-2点、トミガイ製品-1点で合計27点である。層別には第Ⅱ層-2点、第Ⅲ層-24点、不明-1点で第Ⅲ層が最も多い。以下、それぞれについて記述する。

(1)実用品

① 二枚貝有孔製品（貝錘） 第16図

二枚貝の殻頂部及びその近くに1~2cmの孔を施したものである。リュウキュウサルボウ-3点、メンガイ-2点、ヒメジャコ-7点の計12点である。重量は平均12.6gを測る。重量分布をみると0~9g、10~19g台に集中し、特にヒメジャコ（第16図6~9）は平均9.0gを測り、腹縁加工の状況、重量など規格化されていることから、同一の網に用いられたものと考えられる。

表-3 二枚貝有孔製品（貝錘）観察一覧

単位：mm/g

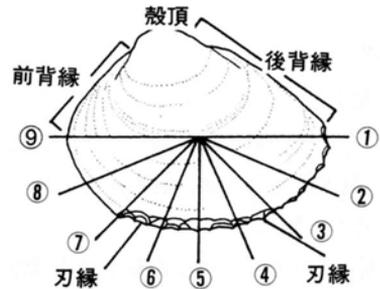
No	図番号	層	貝種	左 右	法 量			孔 径		孔の 形状	孔の 位置	穿 孔	腹 縁	加 工 状 況
					殻長	殻高	重量	た	よ					
1	第16図1	Ⅲ上	リュウキュウサルボウ	右	49.8	37.0	14.8	12.3	8.8	不明	上中	内	◎	前後背縁を僅かに残し、中央部は破損する。孔は殻頂部が摩耗する。紐ズレか。
2	2	不明	"	左	62.8	41.6	23.7	4.7	8.0		上中	外	×	殻頂部、前背縁に2~3ヶ所の剥離痕。
3	3	Ⅲ	"	右	51.0	36.0	16.0	4.5	6.8	楕円	上上	外	×	複孔、表に剥離がある。
4	4	Ⅱ	メンガイ	左	46.0	44.5	11.7	7.0	7.7	円	上中	内	×	石灰が付着する。
5	5	Ⅲ	"	左	53.3	58.2	25.9	6.7	11.2	不明	上上	内	×	複孔、殻頂は紐ズレ。前背縁が破損。
6	6	"	ヒメジャコ	右	38.4	31.2	6.7	5.9	8.8	横	上前	内	○	複孔剥離調整。
7	7	"	"	右	38.0	27.8	5.1	4.7	7.0	楕円	上前	内	◎	複孔、殻頂側剥離、前背縁が破損。
8	8	"	"	右	40.0	27.3	5.5	4.6	5.5	円	上前	内	◎	複孔、腹縁は大きく割れる。
9	9	"	"	"	41.0	26.3	5.6	3.6	5.9	楕円	上前	内	◎	複孔、腹縁側の内縁がシャープになる。紐ズレ。
10	10	"	"	左	48.5	34.6	7.3	8.5	23.4	不明	上前	内	×	岩へ付着したため、殻が薄くなる。さらにそこを穿孔する。
11	11	"	"	左	60.2	43.6	15.9	6.3	9.9	楕円	上前	内	×	前背縁側に紐ズレ痕がある。
12	12	"	"	右	62.5	40.5	17.2	11.1	3.0	楕円	上前	内	×	穿孔の縁は摩耗する。

注 ◎→丁寧に加工 ○→加工 ×→無加工

② 貝刃

二枚貝の腹縁部に押圧剥離を施し、刃をつけたと思われるもので、第17図に示す3点が出土した。いずれも、剥離は浅く、自然の可能性が高い。付刃の範囲はシヌグ堂遺跡（註1）に準ずる。

註1 『シヌグ堂遺跡』第1・2・3次発掘調査報告 沖縄県文化財調査報告書第67集 沖縄県教育委員会 1985年3月

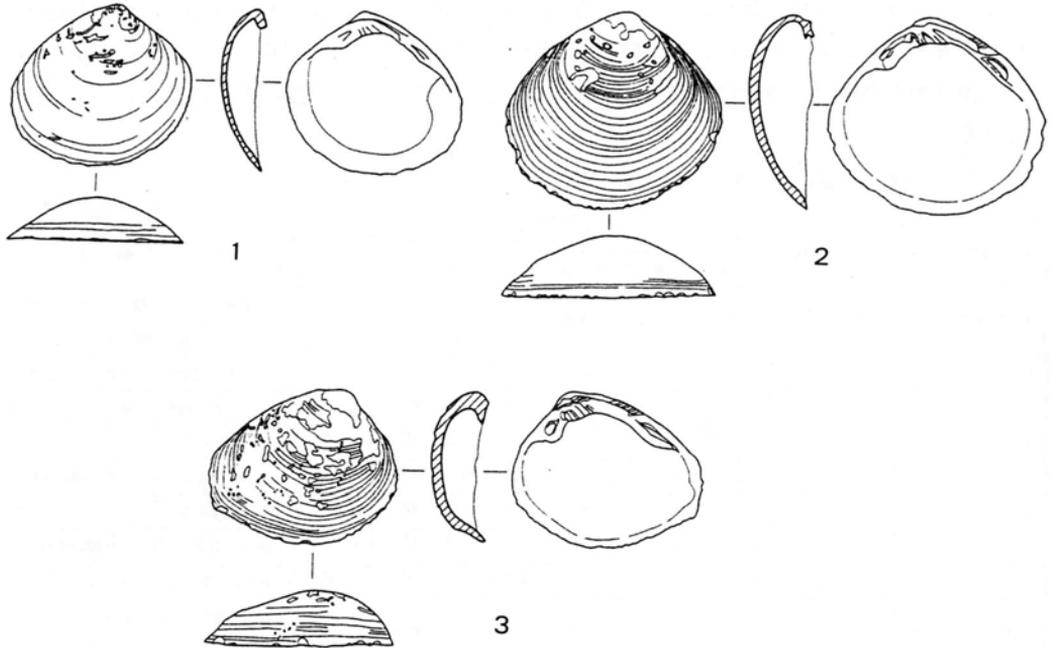


第15図 貝刃模式図

表-4 貝刃観察一覧

単位: mm/g

No	図番号	層	貝種	左右	法 量			刃先	付刃	備 考
					殻長	殻高	重さ			
1	第17図1	Ⅱ上	シレナシジミ	右	59.8	51.8	17.3	細	③~⑦	剥離は細かく、自然の感を受ける。
2	2	Ⅲ上	"	右	63.5	52.2	33.5	荒	①~⑨	貝殻自体が彫らむ。剥離は全縁。
3	3	Ⅲ	"	右	71.8	65.2	30.0	荒	①~⑨	腹縁の中央が弱い。



0 5 cm

第17図 A-グリッド出土の貝刃

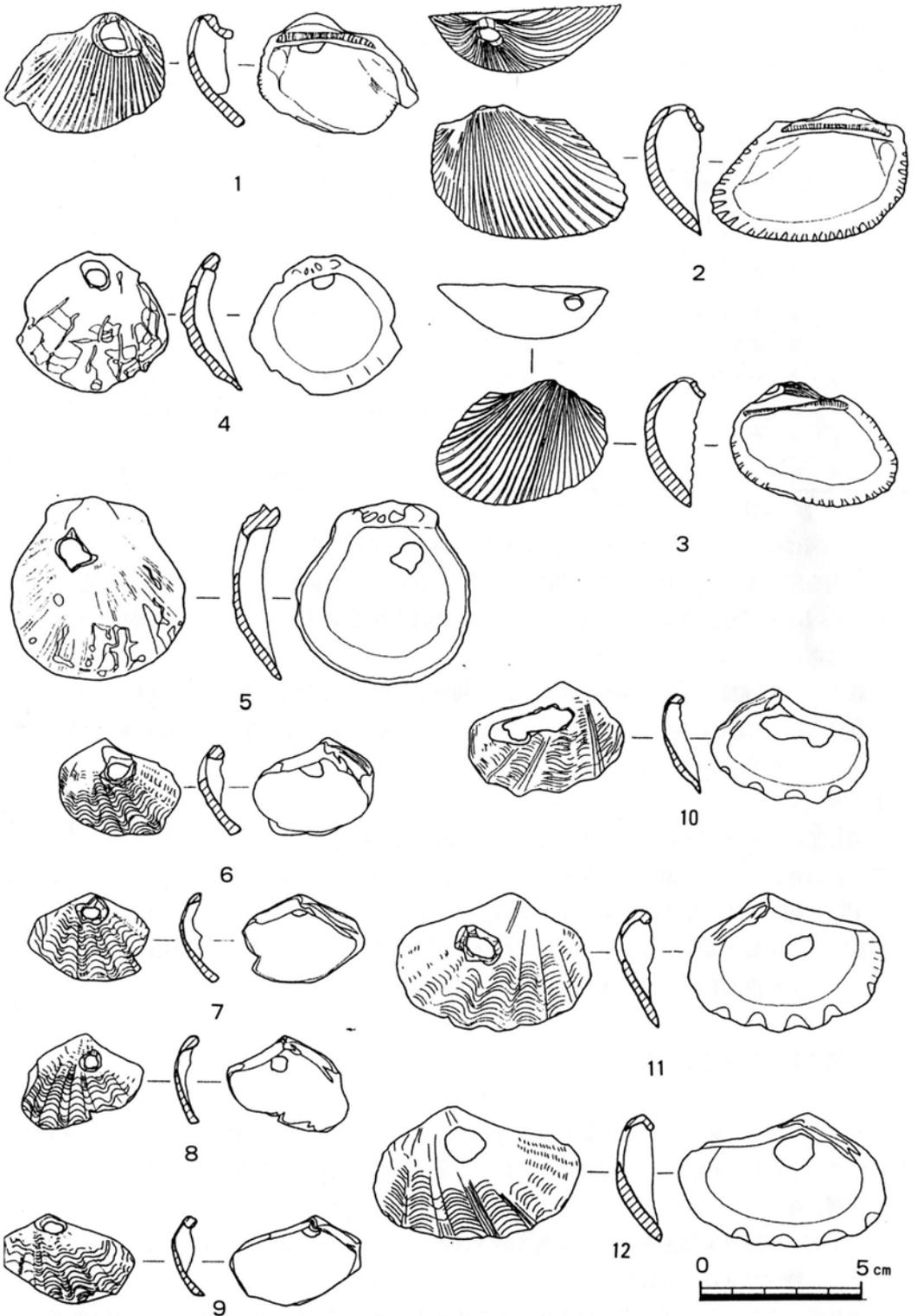
(2)装飾品

① 貝製小玉

イモガイ科の螺塔部を横位に用い円盤状に加工したもので、第19図1~9に示す9点が出土した。最大径は15.3mm、最小径は6.8mmを計る。1~3・5は丁寧に研磨したものである。

② イモガイ製品

第19図10のイモガイは肩部及び水溝部は磨耗する。殻頂は欠損しているため不明。残存部の最大径14.4mm、厚さ19.5mm、重さ1.7gを測る。第Ⅲ層0~10cmの出土である。同図11は小型のイモガイで、殻軸が欠損している。体層部に径1.2mmの小孔を有するが自然孔の可能性が高い。



第16図 A-グリッド出土の二枚有孔製品(貝鏝)

肩部及び殻頂が研磨される。完形品である。殻径6.8mm、殻長8.9mm、重さ1.0gを測る。第Ⅲ層の出土である。

表-5 貝製小玉観察一覧

単位：mm

No.	図番号	層	完破	形状	法 量			孔		加 工 状 況
					た て	よ こ	厚 さ	た て	よ こ	
1	第19図1	Ⅲ上	完形	楕円	8.2	2.3	0.11	2.4	2.7	殻頂部及び裏面も丁寧に研磨。
2	2	Ⅲ上	完形	不定	10.3	4.6	0.45	3.7	3.4	殻頂部面は研磨、体層側は一部研磨が認められる。
3	3	Ⅲ	完形	楕円	8.3	1.9	0.11	1.7	1.7	殻頂は入念に研磨、肩部も丁寧に調整する。そのため、全体に薄手。
4	4	Ⅲ	完形	楕円	12.9	5.5	0.84	1.9	1.5	殻頂及び肩部、体層も摩耗する。
5	5	Ⅲ	破損	一		7.6	0.36	2.1	2.1	風化する。殻頂及び体層は研磨したと思われる。
6	6	Ⅲ	完形	円形	15.3	6.9	0.82	5.1	5.0	殻頂は研磨か、摩耗か不明。そのまま利用。
7	7	Ⅲ	完形	方形	12.0	4.0	0.60	3.8	3.8	殻頂は研磨が丁寧。体層部はそのまま利用。
8	8	Ⅲ	完形	不定	14.3	5.3	1.16	4.3	3.7	自然摩耗、そのまま利用。
9	9	Ⅲ	完形	不定	10.5	4.6	0.51	1.2	1.2	肩部は丁寧に研磨、体部はそのまま摩耗。

③ トミガイ製品

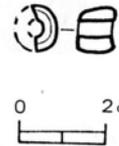
第19図12はトミガイ（タマガイ科）の腹面を殻頂に対して横位に研磨し穿孔したもので、孔は楕円を呈する。研磨痕は孔の周辺のみ認められる。最大長23.0mm、殻径17.5mmを測る。孔は、8×4mmを測る。第Ⅲ層の出土である。報告例は古我地原貝塚（註1）、古座間味貝塚（註2）にある。

註1 『古我地原貝塚』 沖縄県文化財調査報告書第84集 沖縄県教育委員会 1987年3月

註2 『古座間味貝塚』一範囲確認調査報告書一 沖縄県文化財調査報告書第40集 沖縄県教育委員会 1981年3月

d ガラス製品

第18図はガラス小玉の半欠品で直径5.2mm、厚さ1.9mmの丸玉である。色は青色である。第Ⅲ層の出土である。玉の大きさ、色をみると宇堅貝塚（註1）出土の資料と類似する。



註1 『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚発掘調査報告』 具志川市文化財調査報告書第4集 具志川市教育委員会 1980年3月

第18図 ガラス製品

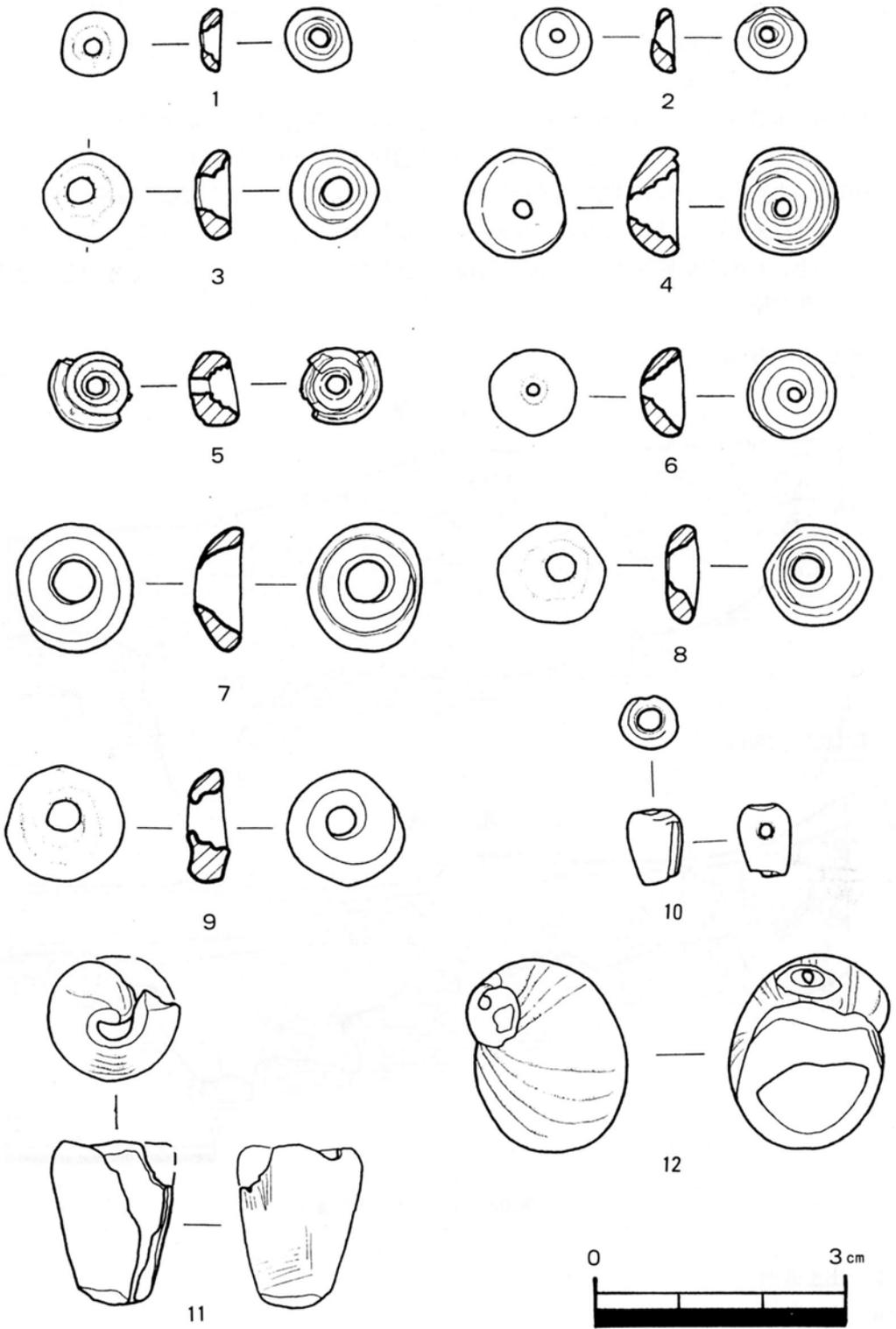
第4節 B-グリッド

本グリッドは洞穴の入口から約12m入ったところに設定した2×2mのグリッドで、入口から約7m下った海拔約51mに位置する。以下、層序と遺物について概述する。

1 層 序

第Ⅰ層 本層は黒褐色を呈する土層で厚さは約3～5cmを測る。石器片1点とイノシシの骨片が9点得られた。

第Ⅱ層 グリッドの西側半分認められる灰褐色土層で第3紀の粘土層(クチャ)に近似する。



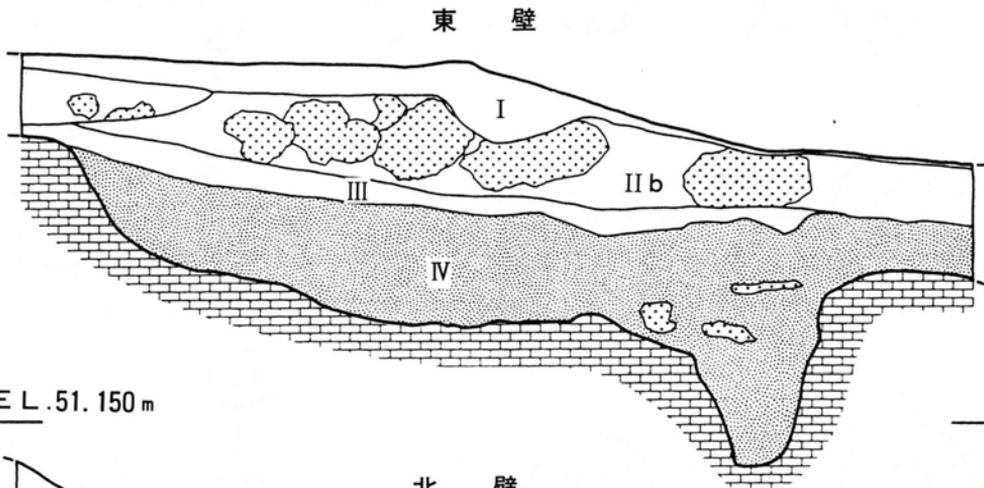
第19図 A-グリッド出土の貝製小玉(1~9)、イモガイ製品(10・11)、トミガイ製品(12)

本層は厚さ約10~15cmを測る。同層の中で拳大の石灰岩を多量に混入する層をⅡb層、赤褐色斑点を混入する層を第Ⅱa層と大別した。前者の層（第Ⅱb層）には貝殻片が顕著に認められた。

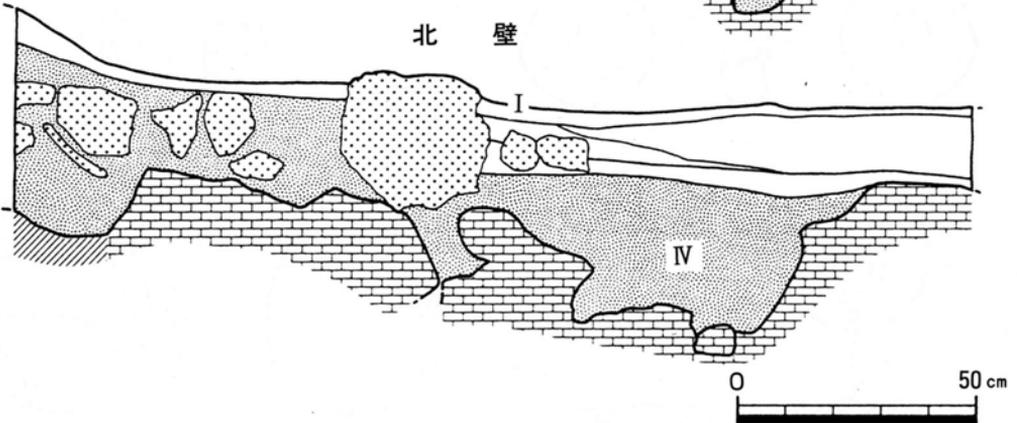
第Ⅲ層 本層もグリッドの西側半分に認められる二次的堆積層と思われる黒褐色土層で、層の厚さは約2~7cmを測る。遺物は沖縄産陶器片2点と自然遺物134点が検出された。

第Ⅳ層 本層は遺物や石灰岩礫を観察する限り、入口側からの流れ込み堆積と推察される赤褐色混礫土層で、層厚は約40~50cmを測る。遺物は他の層より多く、爪形文系の土器片1点と沖縄貝塚時代後期（高宮編年後期）の土器片108点、貝殻片、獣魚骨等の自然遺物等が検出された。

E L. 51. 150 m



E L. 51. 150 m



第20図 B-グリッドの層序

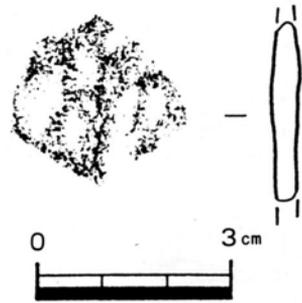
2 出土遺物

a 土器

本区では総数109点の資料が採集された。ほとんどが沖縄貝塚時代後期に属するものである

が、爪形文系土器が1点得られている。後期土器の多くは無文胴部の細片のため図示できないが、その特徴は胎土が泥胎質を呈し、混入物として黒色の鉱物を含むものがある。器面の仕上げは不良で、器色は淡橙色を呈するものが多い。

爪形文系土器は第21図に示す胴部資料で、外面に指頭押圧痕がみられる。内面は石灰分の付着のため調整等は窺えない。胎土に砂粒を混入し、器色は黒色を呈する。焼成は良好である。本資料は外面に残る指頭押圧痕から野国貝塚(註1)の爪形文系土器分類のⅢ類aに属し、いわゆるヤブチ式土器と称されるものである。



第21図 Bグリッド出土の土器

註1『野国』—野国貝塚群B地点発掘調査報告書—
沖縄県文化財調査報告書第57集 1984年3月

b 石器(第22図)

本区で採集された石器は7点で、内訳は石斧1点、叩き石4点、砥石1点、不明1点である。

1は剥片を利用した石斧で、表面は自然面、裏面は割面である。左側辺は自然面で、右側辺は表面側からの打剥調整で形を整えている。刃部は両面から砥ぎだされ、刃縁は偏刃を呈していたと考えられる。刃部は表面側に破損し、基部は横方向に折れている。本来の形状は短冊形を呈していたと考えられる。法量は現存最大値で長さ7.85cm、幅5.50cm、厚さ1.90cm、重さ140g。石質は緑色片岩である。出土層不明。

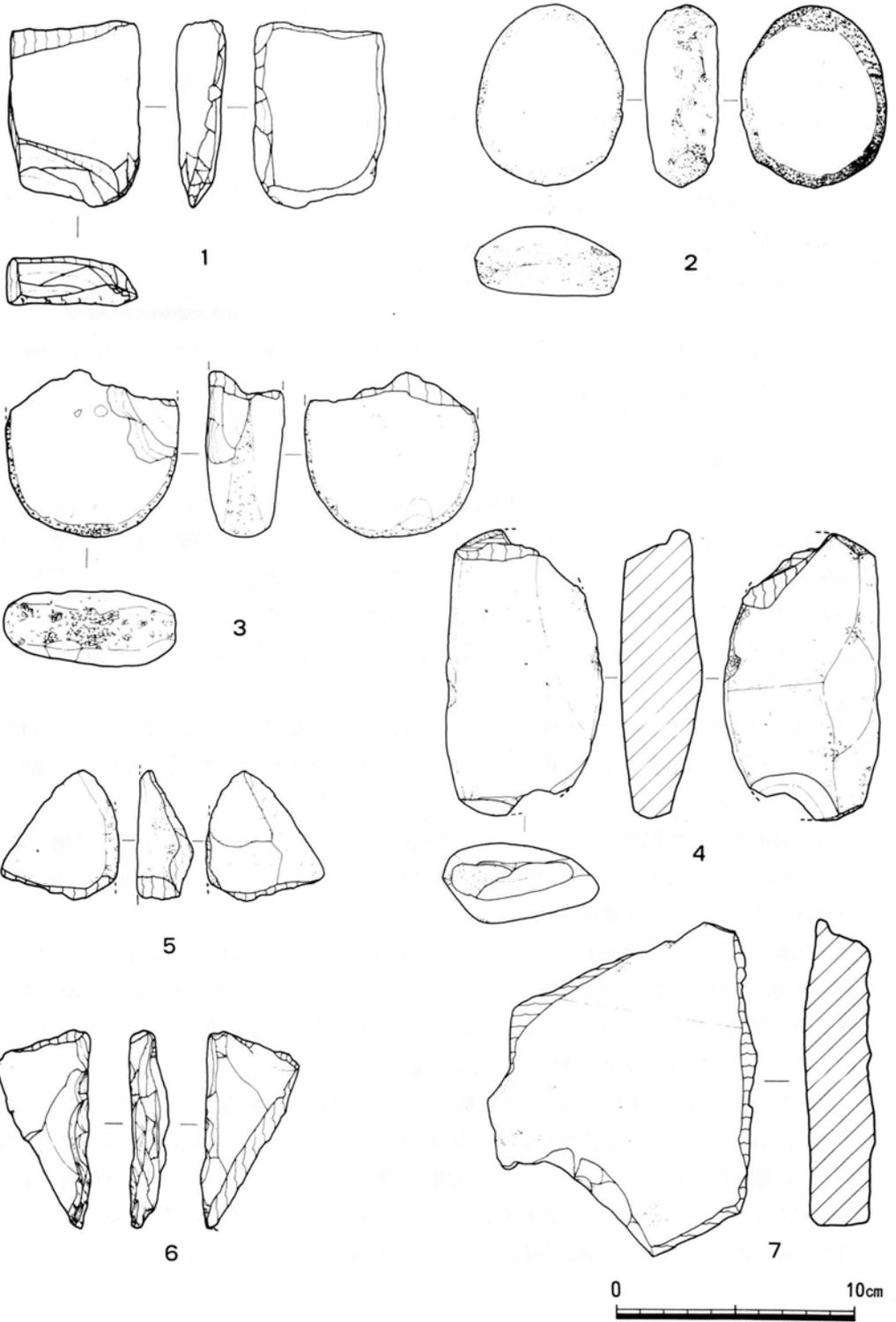
2は小型の偏平礫を利用した叩き石である。礫の周縁が敲打部位として利用され、特に上下端の潰れが著しい。表裏面に磨面は認められない。法量は現存最大値で長さ7.67cm、幅6.0cm、厚さ2.90cm、重さ200g。石質は細粒砂岩である。第Ⅲ層の出土。

3は身の半分を欠損する叩き石で、周縁を敲打部として使用している。下端の使用頻度は側辺に比べ高いようである。法量は現存最大値で長さ6.93cm、幅7.25cm、厚さ3.05cm、重さ200g。石質は石灰岩である。第Ⅲ層の出土。

4は断面形が三角形を呈する叩き石で、上・下端と両側辺部に敲打による潰れが認められる。側辺部は身の中ごろを敲打部として利用している。上・下端の割れは使用時の破損であろう。表裏面は自然面で、研磨痕等のみられない。法量は現存最大値で長さ12.30cm、幅6.55cm、厚さ3.36cm、重さ345g。石質は砂岩である。第Ⅲ層の出土。

5は磨石と叩き石の兼用品で、表面を磨石として、周縁部を敲打部として使用したものであろう。法量は現存最大値で長さ5.20cm、幅5.07cm、厚さ2.20cm、重さ60g。石質は砂岩である。

6は節理面から破損するもので、表面下端に研磨痕、右側辺に両面からの打剥調整が認められる。表面は割り面、裏面は自然面である。小型の石斧であろうか。石質は砂岩である。法量は現存最大値で長さ8.3cm、幅3.7cm、厚さ1.4cm、重さ50g。第Ⅱ層の出土。



第22図 B-グリッド出土の石器

7は扁平な板状の石を利用した砥石で、裏面は自然面であることから置き砥石として使用されたと考えられる。周辺の破損のため本来の形状は判然としない。法量は現存最大値で長さ9.2cm、幅11.4cm、厚さ2.8cm、重さ610g。石質は砂岩である。

C 骨製品

第23図2・3の2点である。いずれもイノシシの長管骨を用いたものである。

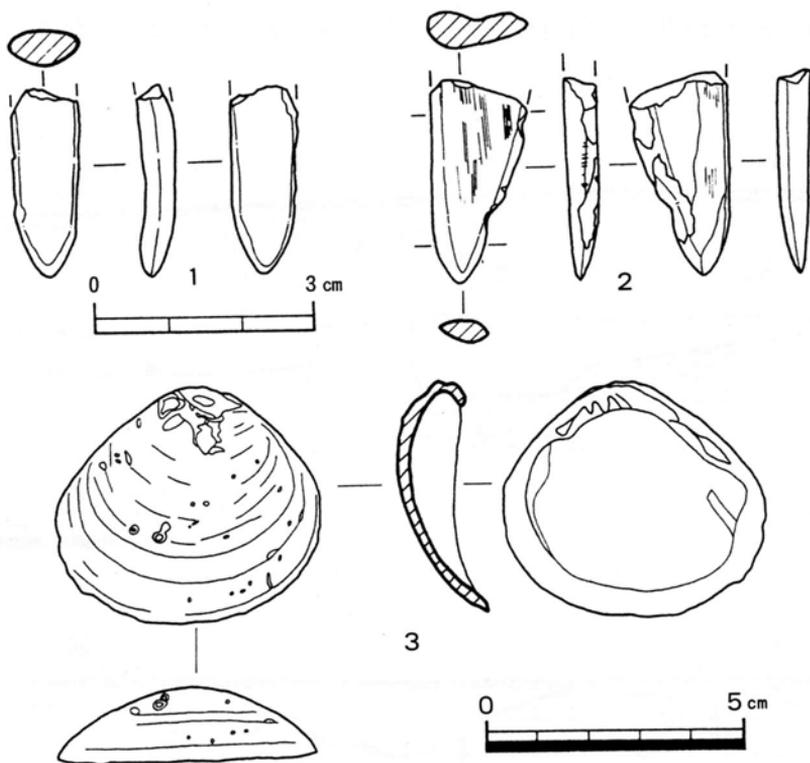
表-6 骨製品観察一覧

単位：mm/g

No	層	骨部位	完破	法量				断面	加工状況
				長さ	幅	厚さ	重さ		
1	Ⅲ	イノシシ	破損	27.3	13.7	4.3	1.1	長方形	片刃的で針先を丁寧研磨する。側辺は若干欠損する。
2	Ⅲ	イノシシ	破損	26.0	9.3	4.5	7.8	楕円	両刃的で針先は丁寧に研磨し、また反りかえることから尺骨と考えられる。

d 貝製品

第23図1のシテナジミ製の貝刃のみである。第Ⅱ層0~10cmレベルから得られ、殻長51.4cm、殻高45.4cm、重さ13.8gを測り、剥離は細かく、付刃の範囲は后背縁(②~④)に見られる。



第23図 B-グリッド出土骨・貝製品

第5節 Cグリッド

本グリッドは今回設定したグリッドの中で最も洞穴の奥(入口より約25m)に設けた約2×2m

のグリッドである。以下、層序と遺物について略記する。

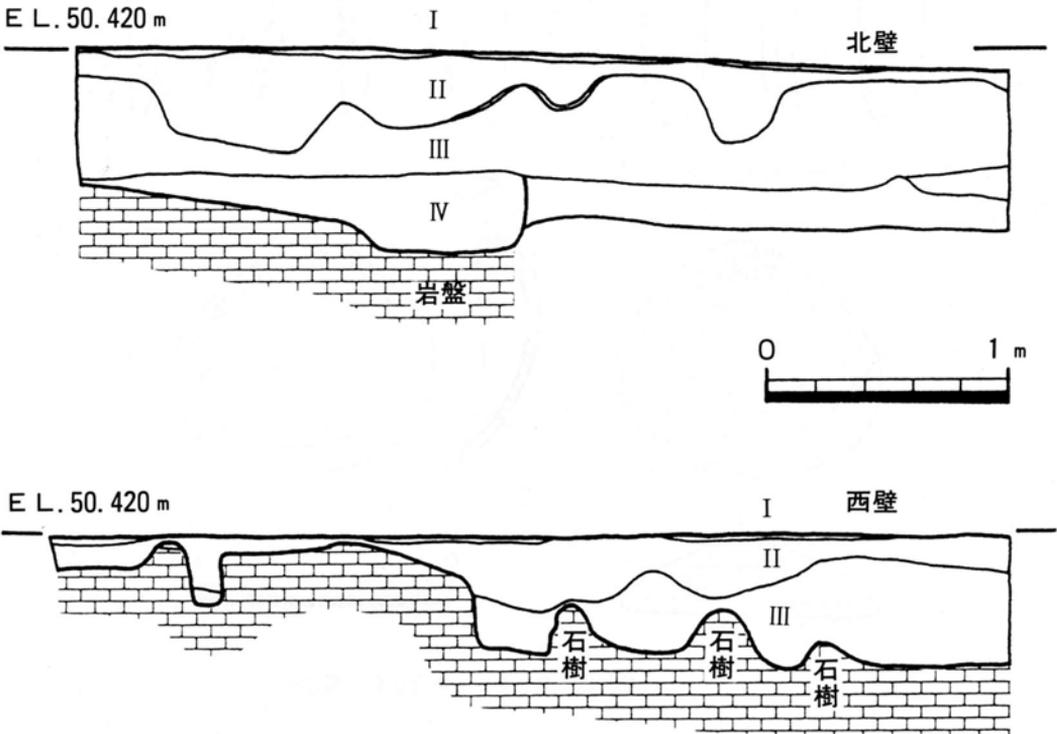
1 層序

第Ⅰ層 本層は厚さ約1～2cmと非常に薄い褐色土層で、ほぼ水平な堆積である。遺物は土器片、現代陶磁器片、戦争遺物等が検出された。

第Ⅱ層 本層は層厚約5～20cmを測る赤色粘土層である。層の上面はほぼ平坦であるが、下面は起伏が認められた。人工遺物は認められなかったが、貝殻等の自然遺物が僅かに検出された。

第Ⅲ層 本層は層厚約5～22cmを測る灰褐色土層で炭を多量に混入する。層の上面は起伏があるが、下の面はほぼ平坦である。しかし、下の部分では石樹による起伏が認められる部分もある。また、本層の上面には、フローストーンが認められること等から、この時期に水が溜る環境があったと推察される（大城逸朗氏より指導を賜った）。遺物はヤナギシボリイモガイ、シャゴウ、ヒメジャコ、シレナシジミ、シュリマイマイ等の貝類が主に検出された。

第Ⅳ層 本層は基盤に移行する赤土で、グリッドの北側半分に認められた。層の厚さは約5～15cmを測る。



第24図 C-グリッド層序

2 出土遺物

a 土器

本区では沖縄貝塚時代後期に属する無文胴部片1点が得られた。その特徴は胎土が泥胎質を呈し、器面の仕上げは不良で、器色は淡橙色を呈する。

b 貝製品

① ボタン

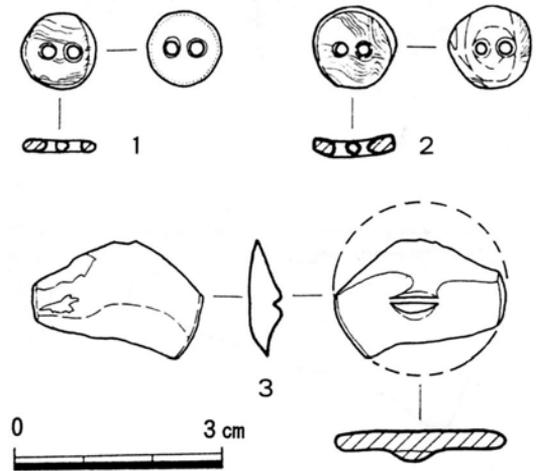
貝殻を加工したもので本地区で3点得られたが、いずれも第I層の出土である。直径10~11mmのものに1.5mm前後の小孔を2個穿孔したもので、シャツ等に用いたものである。

第25図1は両面とも研磨が著しく、貝種は不明である。片側面の縁に沈線の模様がみられる。

2は前者と同一タイプのものであるが表面に貝殻の模様を残す。裏面も研磨されるが孔の周辺に自然面を残す。周縁の成形も前者に比べて悪い。孔は両面から穿孔する。径11.1×11.9mm、厚さ1.9mm、孔径1.0mmを測る。

3は前述の2点と異なり、直径24.4mmの大きさに加工したもので表面は平らに加工し、裏面は中央部に厚さ4.0mmの突起をだし、横に径1.5mmの溝状痕があり、横から穿孔したものと考えられる。破損品で厚さ2.7mm、重さ1.6gを測る。

これらの製品は第I層の出土であることを考慮すると、戦前か戦時中のものと考えられる。



第25図 C-グリッド出土の貝製品

第6節 表採資料(土器)

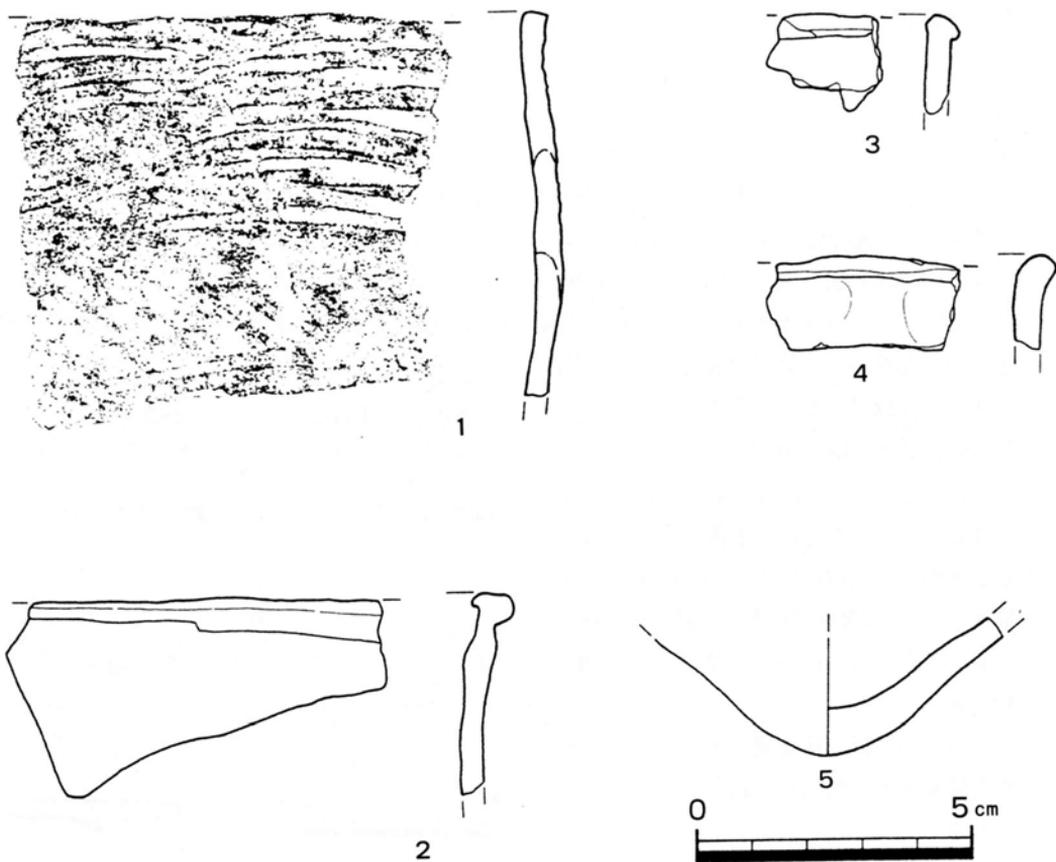
第26図1は口縁部が内湾するもので、口唇部は平坦に成形される。器面には幅1cmの調整具の痕跡を残す。胎土に石灰質砂粒と赤色粒を混入し、色調は橙褐色を呈する。焼成は良好。

2は口縁部が僅かに外反する甕形土器で、口唇部は粘土帯を貼り付けて平坦に造られるが、仕上げは雑である。胎土に赤色粒を含み、焼成は良好、器色は淡褐色を呈する。

3は口唇部が外傾するもので、胎土は泥胎質を呈し、焼成は悪い。

4は口縁部上端が外反する鉢形土器で、口唇部は丸く造られる。器色は淡褐色を呈する。

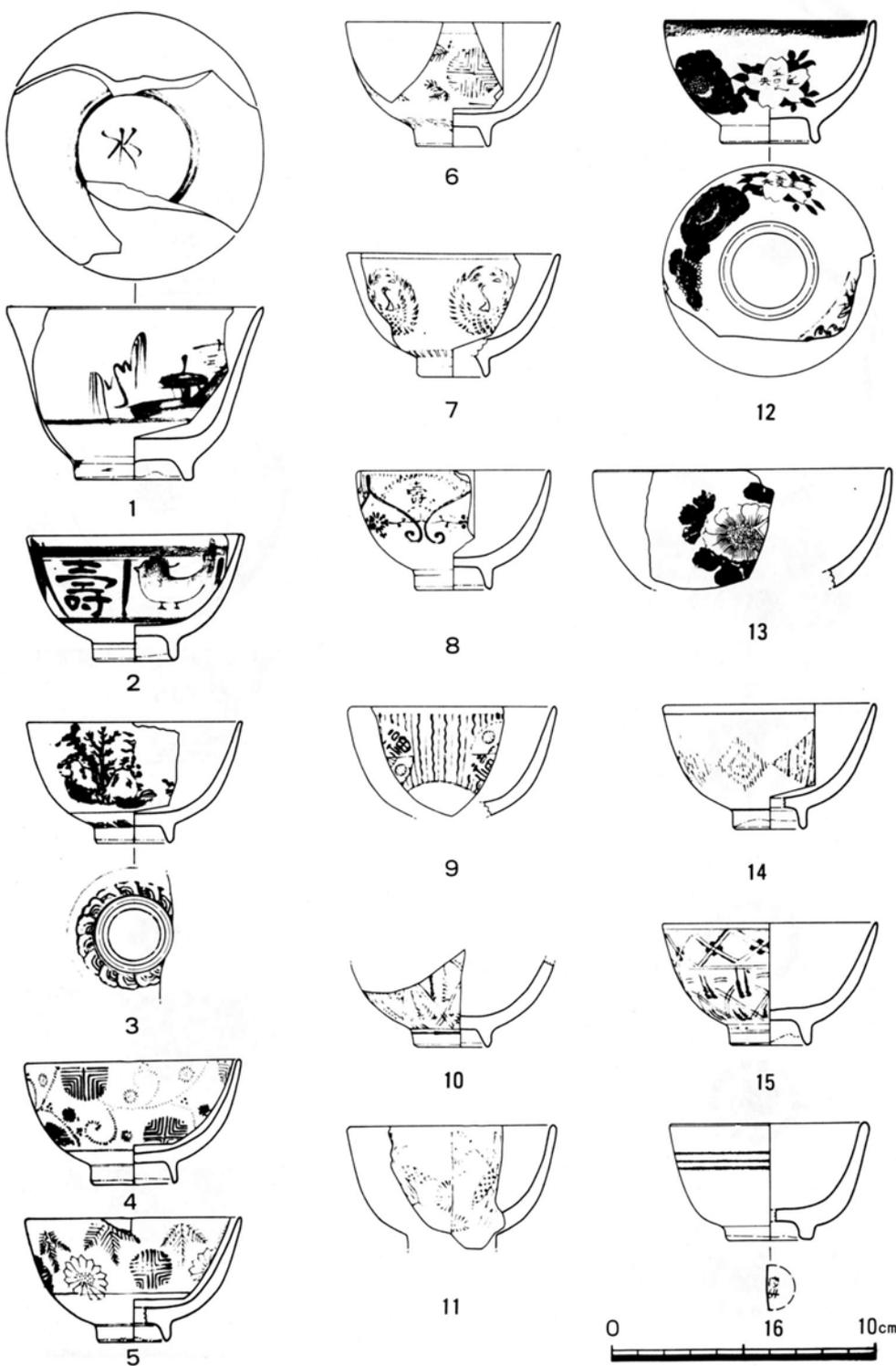
5は丸底的な尖底である。焼成は良好で、色調は外面褐色、内面黒色を呈する。



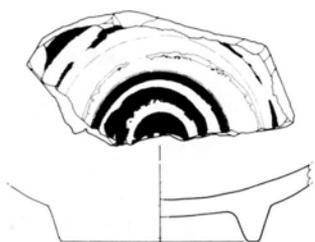
第26図 表採資料（土器）

第7節 その他の人工遺物（第27～36図）

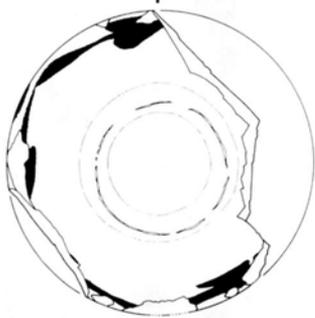
ここで扱う資料の大半は、近代のものと推察されるものである。前述したように洞穴の入口一帯は、①貝塚時代頃の住居地として利用、②中・近世頃の墓域としての利用（古くは、どの時代まで遡るかは不明）、③去る大戦の避難壕としての利用（主に現在の宜野湾市嘉数の人々が大战中に避難したと聞く）が考えられることから、本資料は、避難壕として本洞穴が利用された際の持ち込み遺物ではないかと推察する。去る大戦以前の浦添・宜野湾を考える上では、貴重な資料と考えるが、遺物の図及び写真の紹介にとどめ、詳細は省略する。



第27图 磁器(碗)



1



2



3



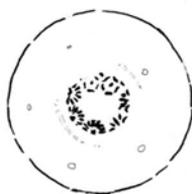
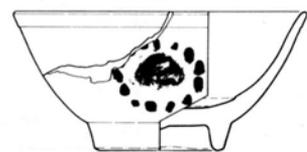
4



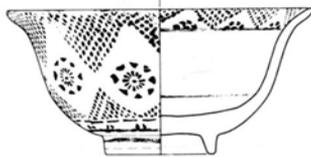
5



6



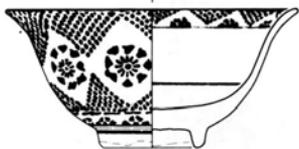
7



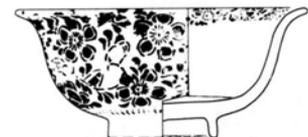
8



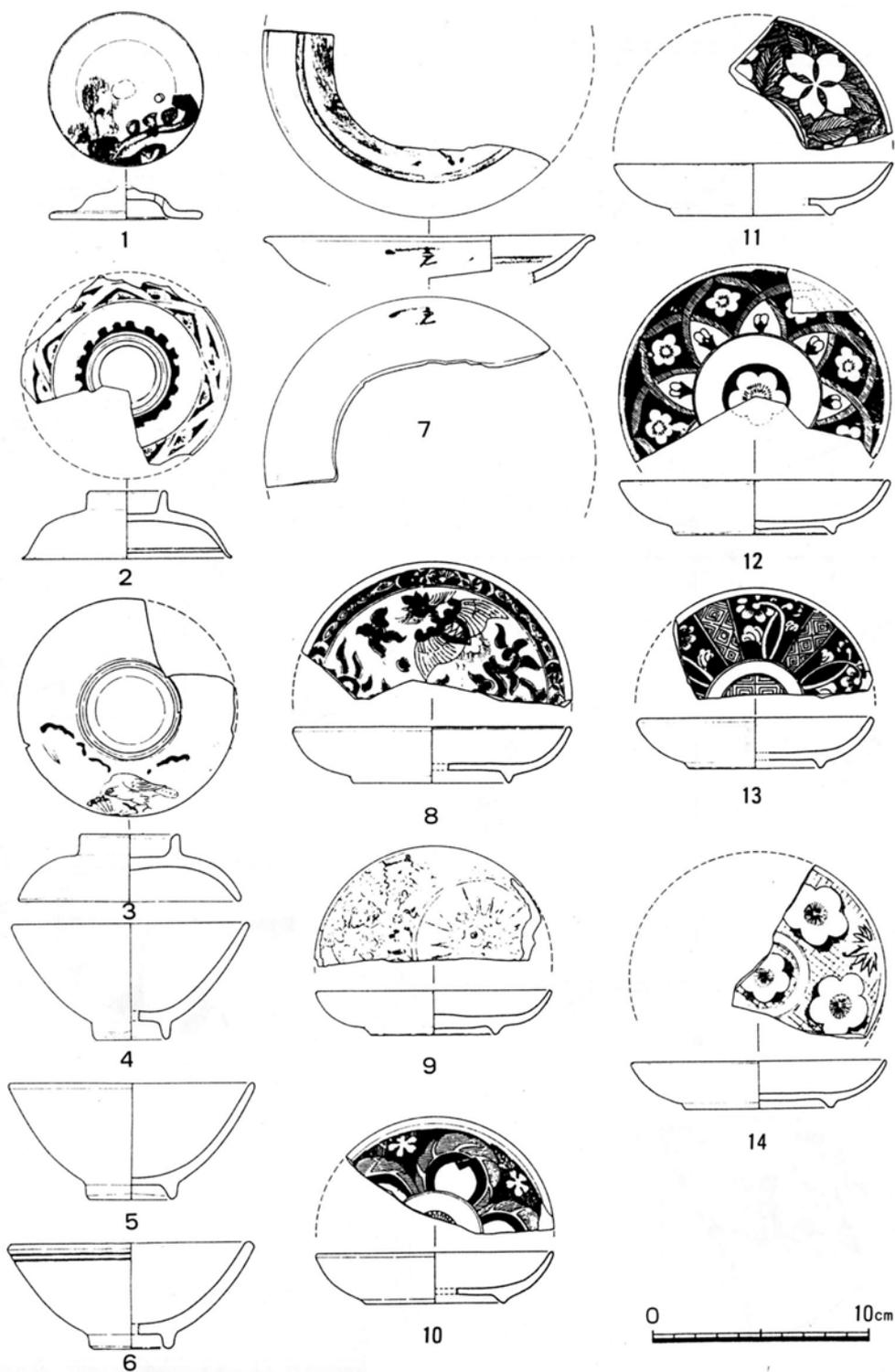
9



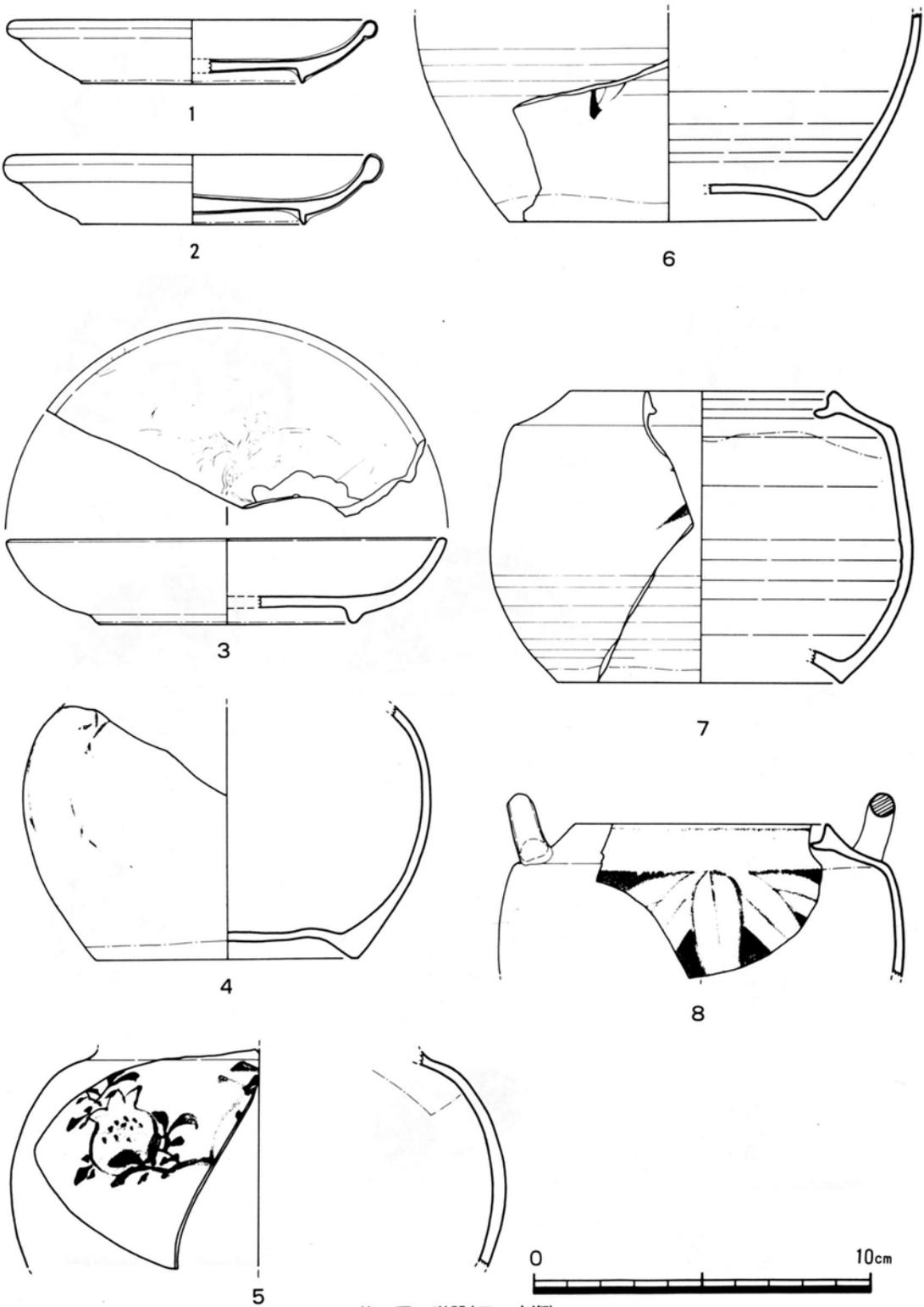
10



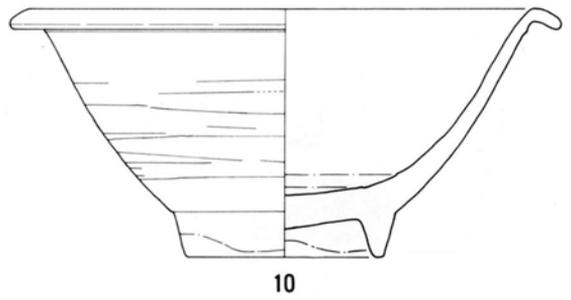
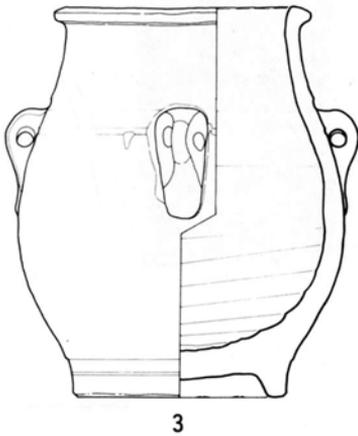
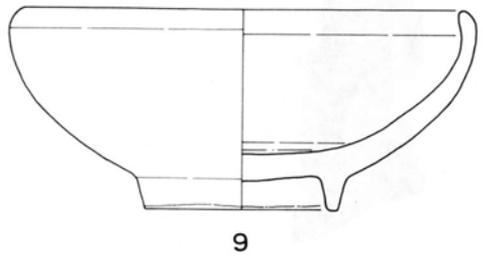
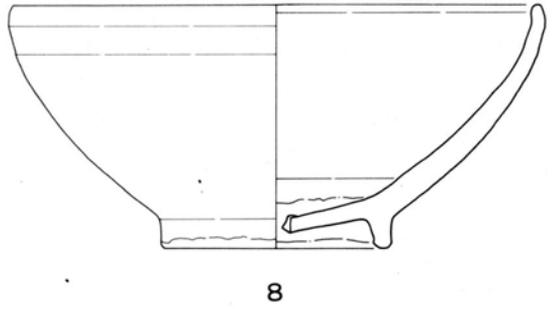
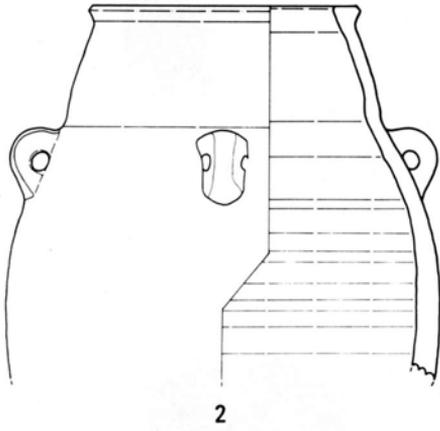
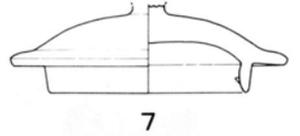
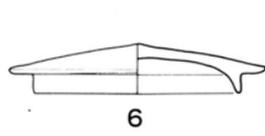
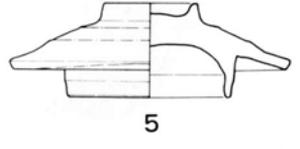
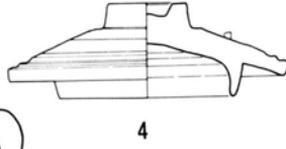
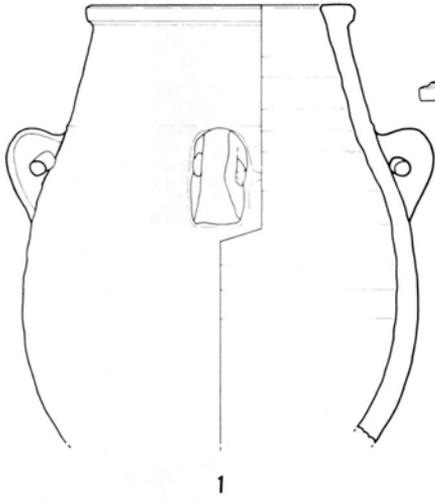
第28图 陶磁器(碗)



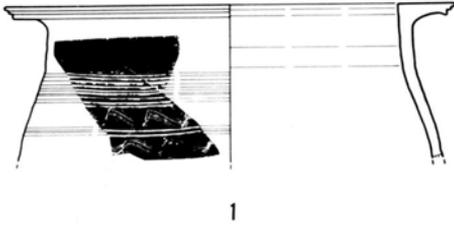
第29图 磁器(盖·碗·皿)



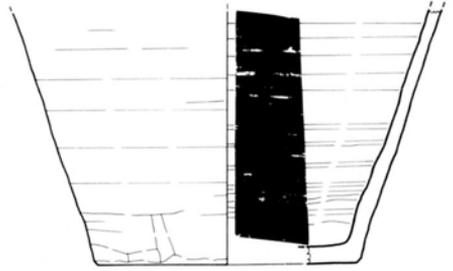
第30図 磁器(皿・土瓶)



第31图 陶器(壺·壺蓋·鉢)



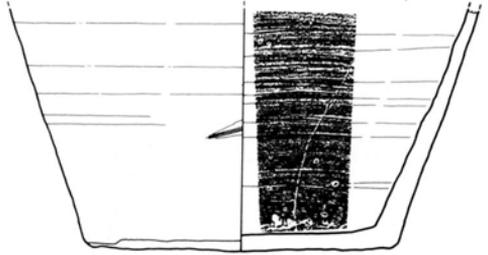
1



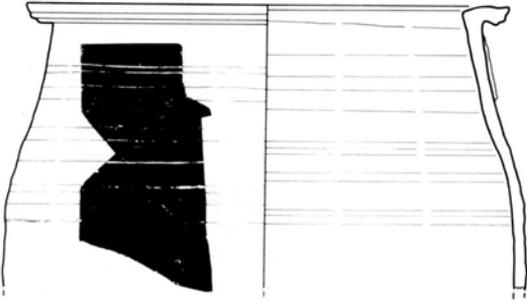
5



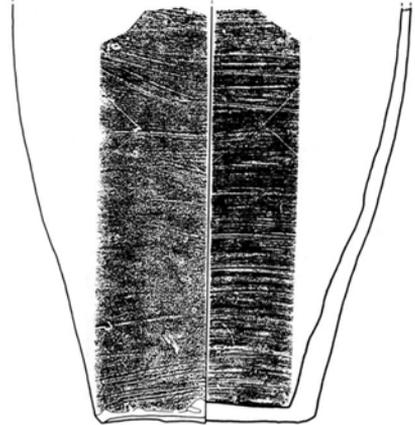
2



6



3



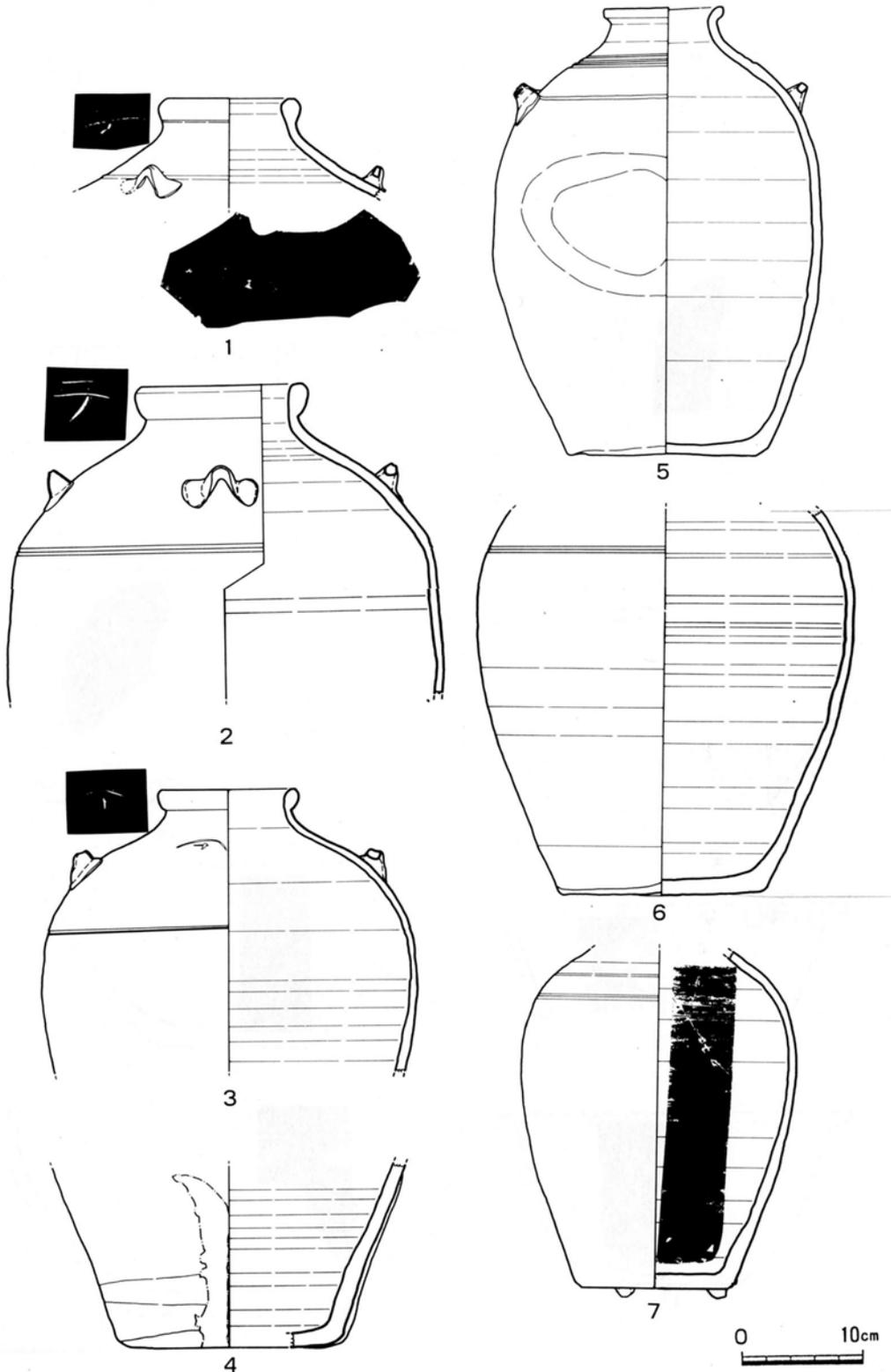
7



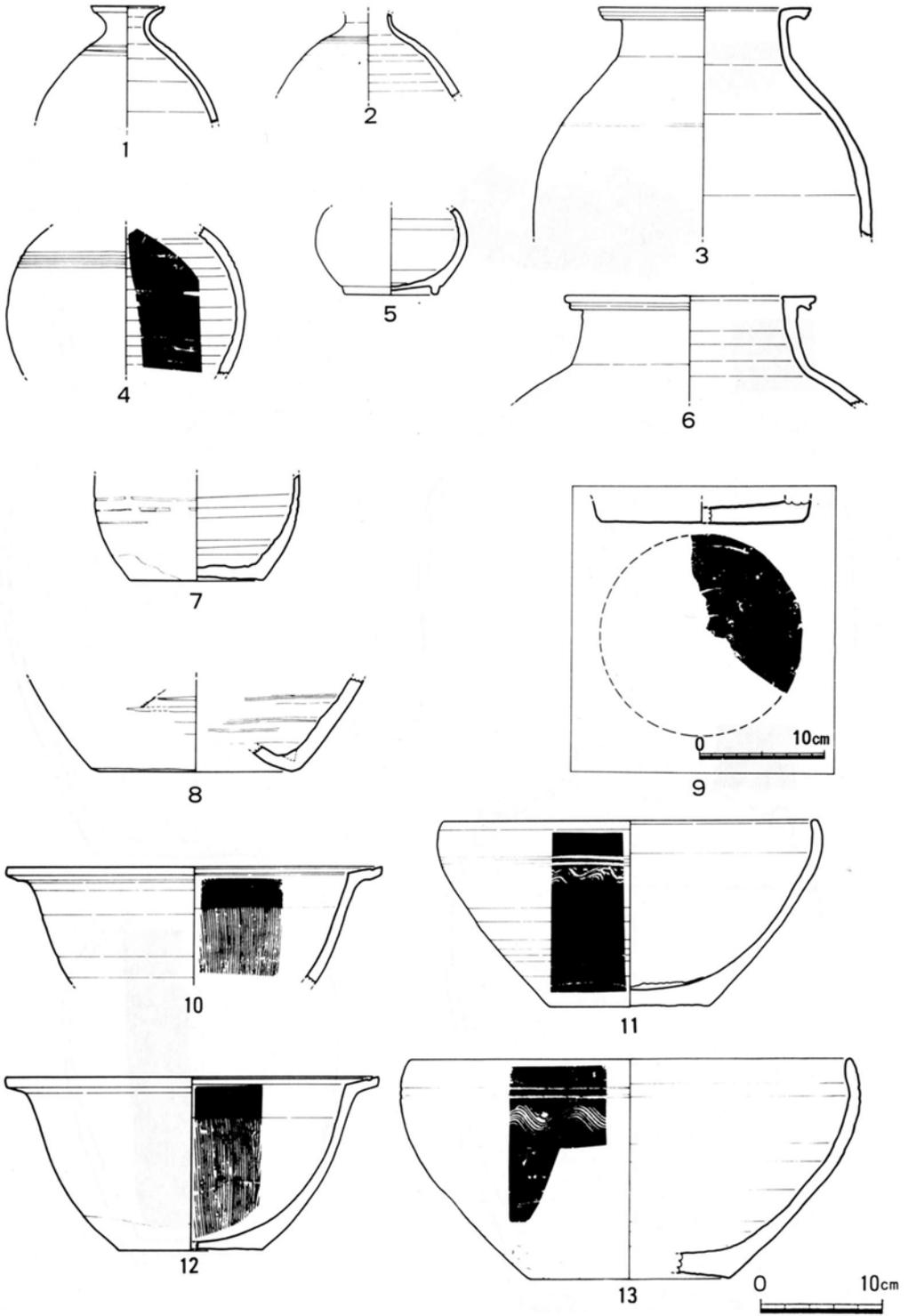
4



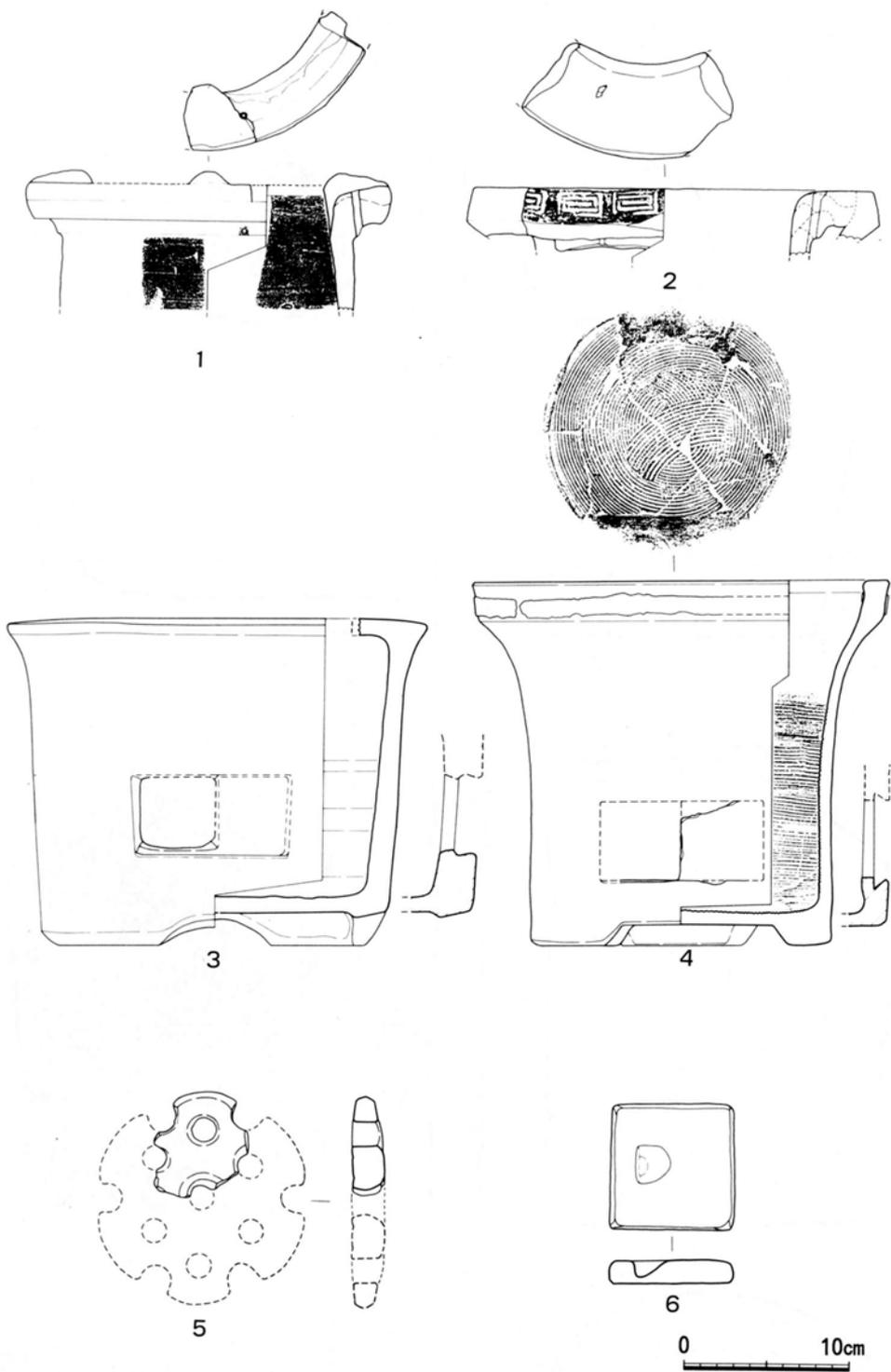
第32図 陶器(甕・甕底部?)



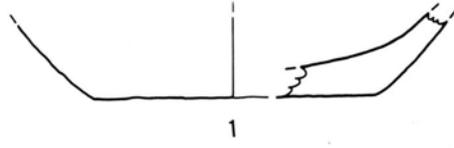
第33図 陶器(壺・壺底部?)



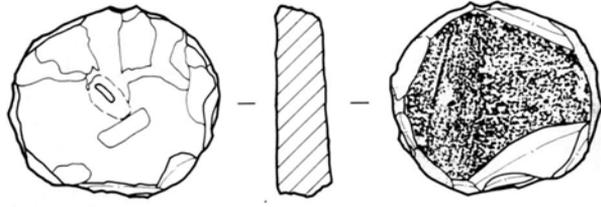
第34図 陶器(壺・播鉢・器種不明底部・鉢)



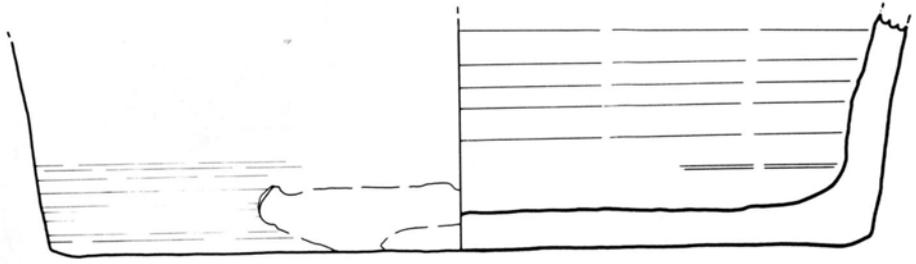
第35圖 瓦質土器



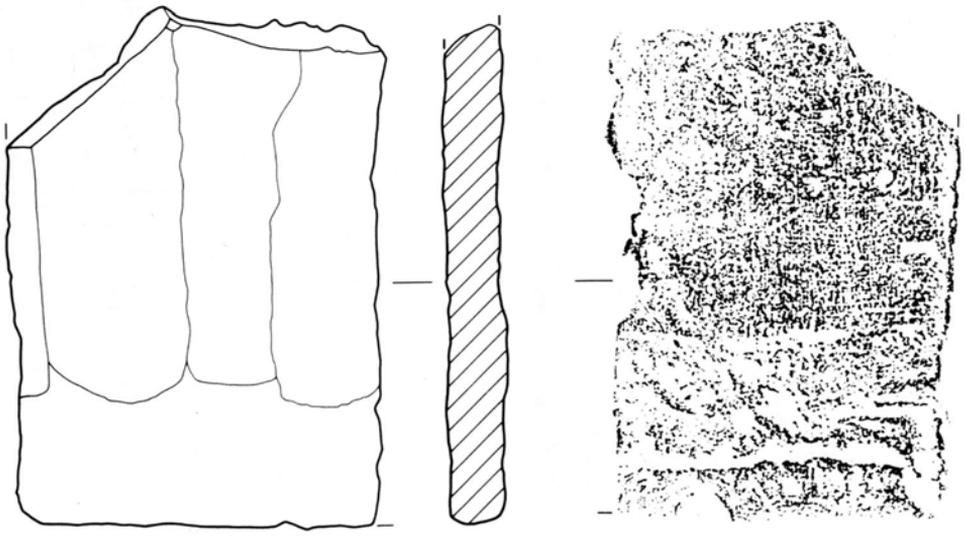
1



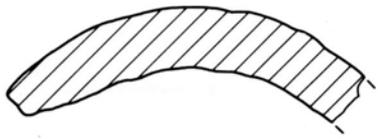
2



3



4



第36図 陶器(底部)・円盤状製品・瓦

第8節 自然遺物

本貝塚の自然遺物は他の遺物の出土状況から遺跡の中心をA-グリッドと考え、本グリッドの第Ⅲ層を1mm、3mmのメッシュにかけた。以下、貝、骨について記述する。

1 貝類

本遺跡出土の貝類はA-グリッド-1.3%、イ-グリッド-34.7%、A-グリッド-47.8%、B-グリッド-13.8%、C-グリッド-2.4%の出土である。その中でもA-グリッド、イ-グリッドが特に多い。

<集計について>

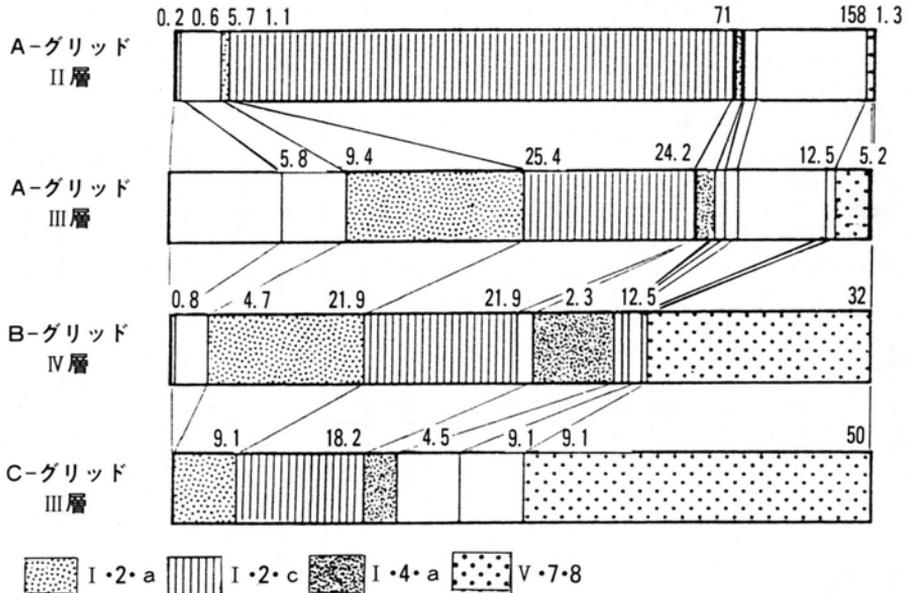
①貝殻は完形、殻頂、破片に分けて集計し、完形、殻頂を個体数とした。

②貝殻の分類は黒住耐二氏にお願いした。記して感謝致します。文中の棲息地の分類については黒住分類に従い表-7-1・2に示し、文中では記号で示した。

A-グリッド

24個の出土で全体の1.3%と最も少ない。第Ⅰ層から12個体検出された。棲息地別の出土状況を見ると(第37図)オキナワヤマトニシ、シュリマイマイの陸産貝が10個体(83.3%)と最も多い。海産の貝はほとんどが破片でサラサバティ、マガキガイ、シレナシジミ、シラナミ、イソハマグリ、エガイ、ツヤギセルガイ、カワニナが少量検出されたのみである。陸産貝については第Ⅰ層の出土を考慮すると食用というより、自然死の可能性が高い。貝塚は形成しない。イ-グリッド

630個の出土で全体の34.7%を占め、A-グリッドについて多い。主体層は第Ⅱ層である。棲息地別の出土状況を見ると(第37図)Ⅰ・2・cが全体の72%を占める。次はⅢ・0・cの15.8%



第37図 貝類棲息地別出土状況

表7-1 貝類出土状況

No.	貝類	アーグリッド								小計	イーグリッド								
		I 層				V 層					採				I 層				
		完形	殻頂	破片	個体数	完形	殻頂	破片	個体数		完形	殻頂	破片	個体数	完形	殻頂	破片	個体数	
1	ミミガイ科	マ	ア	ナ	ゴ														
2	ニシキウズガイ科	ニ	シ	キ	ウ	ズ	ガイ												
3		ギ	ン	タ	カ	ハ	マ	ガイ											
4		サ	ラ	サ	バ	テ	イ												
5		ク	マ	ノ	コ	ガ	イ												
6	リュウレンサザエ科	チ	ョ	ウ	セ	ン	サ	ザ	エ										
7		ヤ	コ	ウ	ガ	イ													
8		ヤ	コ	ウ	ガ	イ	(フタ)												6
9		カ	ン	ギ	ク	ガ	イ												
10	アマオブネガイ科	イ	シ	タ	ミ	ア	マ	オ	ブ	ネ									1
11		マ	ン	グ	ロ	ウ	ブ	ア	マ	ガイ									
12		ニ	シ	キ	ア	マ	オ	ブ	ネ										
13		カ	ノ	コ	ガ	イ													
14	ムカデガイ科	ヘ	ビ	ガイ	の	仲	間												
15	ウミニナ科	イ	ボ	ウ	ミ	ニ	ナ												2 ☆
16	オノツノガイ科	オ	ノ	ツ	ノ	ガイ													
17	ソデガイ科	マ	ガ	キ	ガ	イ													
18		ネ	ジ	マ	ガ	キ	ガイ												
19		ク	モ	ガ	イ														
20		ス	イ	ジ	ガ	イ													
21	タカラガイ科	ハ	ナ	ビ	ラ	ク	カ	ラ	ガイ										
22		ホ	シ	キ	ヌ	タ	ガイ												1
23		ホ	シ	タ	カ	ラ	ガイ												
24		ヤ	ク	シ	マ	タ	カラ												
25	フジツガイ科	ホ	ラ	ガイ															
26	ヤツシロガイ科	ス	ク	ミ	ウ	ズ	ラ	ガイ											
27	アクキガイ科	ガ	ン	ゼ	キ	ボ	ラ												
28		ツ	ノ	レ	イ	シ													
29		ア	カ	イ	ガ	レ	イ	シ											
30	オレイヨフハ科	ヨ	フ	バ	イ	モ	ド	キ											
31	オニコブシガイ科	コ	オ	ニ	コ	ブ	シ	ガイ											
32	イトマキボラ科	イ	ト	マ	キ	ボ	ラ												
33		チ	ト	セ	ボ	ラ													
34	イモガイ科	マ	ダ	ライ	モ	ガイ													2
35		サ	ヤ	ガ	タイ	モ	ガイ												
36		キ	ヌ	カ	ツ	ギ	イ	モ											
37		イ	ボ	シ	マイ	モ	ガイ												
38		ヤ	ナ	ギ	シ	ボ	リ	イ	モ	ガイ									
39		カ	バ	ミ	ナ	シ	ガイ												
40		サ	ラ	サ	ミ	ナ	シ	ガイ											
41		ヤ	キ	イ	モ	ガイ													
42		ア	カ	シ	マ	ミ	ナ	シ	ガイ										
43		ク	ロ	ミ	ナ	シ	ガイ												
44		ア	ジ	ロ	イ	モ	ガイ												
45		不	明																
46	カワニナ科	カ	ワ	ニ	ナ														
47	ヤマタニシ科	オ	キ	ナ	ワ	ヤ	マ	タ	ニ	シ									
48	キセルガイ科	ツ	ヤ	ギ	セ	ル	ガイ												
49	コハクガイ科	オ	オ	カ	サ	マイ	マイ												
50	ナンシマイマイ科	シ	ユ	リ	マイ	マイ													
51		オ	キ	ナ	ワ	ヤ	マ	タ	カ	マイ	マイ								
52	オナジマイマイ科	バ	ン	ダ	ナ	マイ	マイ												
53		イ	ト	マン	マイ	マイ													
54	フネガイ科	エ	ガ	イ															
55		リ	ュ	ウ	キ	ュ	ウ	サル	ボ	ウ	ガイ								1
56	イガイ科	リ	ュ	ウ	キ	ュ	ウ	ヒ	バ	リ	ガイ								12
57	ウグイスガイ科	ミ	ド	リ	ア	オ	リ	ガイ											57
58		ク	ロ	チ	ョ	ウ	ガイ												
59	イタヤガイ科	ヒ	オ	ウ	ギ	ガイ	類	の	一	種									
60	ウミギクガイ科	メ	ン	ガイ	の	仲	間												
61	イクボガキ科	カ	キ	の	仲	間													
62	シジミガイ科	シ	レ	ナ	シ	ジ	ミ	ガイ											1318
63	シャコガイ科	シ	ラ	ナ	ミ														
64		ヒ	メ	シ	ャ	コ	ガイ												
65		ヒ	レ	ジ	ャ	コ													
66		シ	ャ	ゴ	ウ														
67	ザルガイ科	カ	ワ	ラ	ガイ														
68	マルスタレガイ科	オ	キ	シ	ジ	ミ	ガイ												
69		ヌ	ノ	メ	ガイ														
70	チドリマスオガイ科	イ	ソ	ハ	マ	グ	リ												1
71	ナミノコガイ科	リ	ュ	ウ	キ	ュ	ウ	マ	ス	オ	ガイ								617
72	ニッコウガイ科	リ	ュ	ウ	キ	ュ	ウ	シ	ラ	ト	リ	ガイ							
73	クサズリヒザラガイ科	ヒ	ザ	ラ	ガイ	の	仲	間											
	小計																		24

注 ☆印→個体有

とつづく。I・2・cのなかでもマガキガイが53.7%を占める。Ⅲ・0・cではシレナシジミが14.2%を占めるが、破片は224個とマガキガイに比べて多く出土している。

A-グリッド

869個体で全体の47.8%を占め、本遺跡で最も多い。主体層は第Ⅲ層で本グリッドの63.5%を示す。本層の棲息地別の出土状況を見ると(第37図) I・2・c-24.3%、I・2・a-25.6%、Ⅲ・0・c-12.0%を占める。I・2・aはヒメジャコガイ-34.0%、I・2・cの中ではマガキガイが全体の25.5%、Ⅲ・0・cのシレナシジミが18.2%と多いが、ヒメジャコガイ、シレナシジミは破片の数も多く、絶対数はマガキガイより多い可能性がある。

B-グリッド

251個で全体の13.8%を占め、A・I-グリッドについて多い。主体層は第Ⅳ層で本グリッドの47.4%を占める。棲息地別の出土状況を見るとV・8-22.9%、I・2・c-21.8%である。V・8ではオキナワヤマタニシが最も多く、I・2・cではマガキガイ、サラサバティ、ヒメジャコガイが多い。

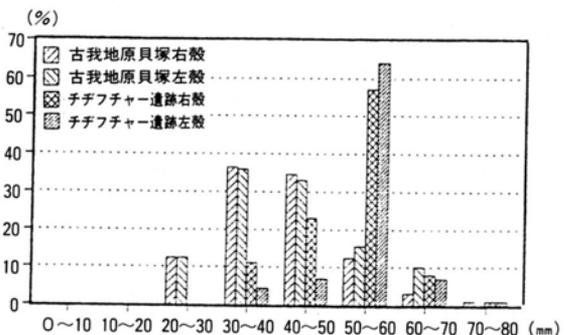
C-グリッド

43個の出土で、全体の2.4%を占め、A-グリッドについて少ない。出土状況を見ると表面採集47.6%、第Ⅲ層52.4%である。第Ⅲ層の棲息地別の出土状況を見ると(第37図) V・7・8(陸産貝)が50%を占める。貝種はシュリマイマイ、オキナワヤマタカマイマイ、イトマンマイマイで、その中でもシュリマイマイが多い。次に多いのはI・2・c-18.2%である。外にマガキガイ、ヤナギシボリイモガイがみられる。

以上、各地区別に述べたが、ここで棲息地別の出土状況をまとめるとマガキガイが最も多いが、シレナシジミの破片の数が多いことが気になる。本遺跡の立地状況からシレナシジミの棲息地は牧港川の河口付近で多量に採集されたと考えられることからマガキガイと同様主体的に採集されたと考えられる。

また、貝殻の計測を試みた。巻貝ではチョウセンサザエの蓋、マガキガイ、二枚貝ではシレナシジミ、ヒレジャコ、ヒメジャコについて試みた。

チョウセンサザエの蓋は1.0~2.0cm大が出土しているが2.0cm大のものが多く、シレナシジミは殻高5cm大が60%、殻長6cm大64%と最も多い。これを古我地原貝塚(註1)ハ地区の第Ⅶ層のものと大きさを比べてみると(第38図)、本遺跡のものは3~7cm大にまたがり、前述の大きさが主体を示すのに対し、古我地原貝塚のものはこれより小さく、2~6cm大にまたがり、主体は4~5cmに多く、本遺跡のもの



第38図 シレナシジミ 大きさ殻高別構成比

が1 cm程大きい。これは採集された個体数の量、遺跡の時期も違うが、遺跡間で大きさに変化がみられる好資料である。

ヒレジャコガイは殻高3~9.6cm、殻長6~12cmにまたがるが、特に殻高5 cm大、殻長8 cm大が多い。計測値の報告のある本部町の具志堅貝塚(註2)、糸満市伊原遺跡(註3)と比較してみると具志堅貝塚の場合は殻高7 cm大、殻長14cm大が主体を示し、伊原遺跡は殻高3~5 cm、殻長6~9 cmを測り、本遺跡は伊原遺跡よりは大きく、具志堅貝塚より小さくなることから3遺跡の資料は時期を考慮すると新しくなるに従って、小さくなる傾向にある。

ヒメジャコガイは殻高2.1~7.5cm、殻長3.8~10.7cmにわたり、特に殻高3 cm大、殻長5 cm大が多い。

マガキガイは殻高3.8~6.8cm、殻径1.9~3.2cmにわたり、特に殻高5 cm大、殻径2 cm大が多い。

オキナワヤマタニシは殻高1.6~2.1cm、殻径2.2~2.5cmを測る。

パンダナマイマイは殻高1.6~2.2cm、殻径2.3~3.4cmを測る。

註1 『古我地原貝塚』 沖縄県文化財調査報告書第84集 沖縄県教育委員会 昭和62年12月

2 『具志堅貝塚調査報告書』 本部町教育委員会 昭和61年3月

3 『伊原遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第73集 沖縄県教育委員会 昭和61年3月

2 節足・脊椎動物遺存体

種名一覧

I 軟骨魚綱	I Class Chondrichthyes
1 サメ目	1.Order LamniLamnida
科・属不明	Fam.et gen. indet.
II 硬骨魚綱	II Class Osteichthyes
1、ウナギ目	1.Order Anguillida
a ウツボ科	Family Muraenidae
属・種不明	Ge. et sp. indet.
ハタ科	Order Mugiliformes
2、スズキ目	2.Order Perciformes
aスズキ科	Family Serranidae
スジアラ	<i>plectropomus leopardus</i>
bフェダイ科	Family Lutjanidae
cタイ科	Family Sparidae
クロダイ	

dフエフキダイ科	Family Lethrinidae
ハマフエフキ	<i>Lethrinus nebulosus</i>
eベラ科	Family Labridae
コブダイ属	
カンムリベラ	Con's sp.
fブダイ科	Family scaridae rubrouiolaceus
ナンヨウブダイ	<i>Scarus gibbus</i>
ナガブダイ	<i>Scarops rusbrouiolaceus</i>
gニザダイ科	Family Acanthuridae
属・種不明	Ga. et sp. indet.
3、フゲ目	3.Order Tetraodontiformes
aカワハギ科	Family Aluteridae
bハリセンボン科	Family Diodontidae
ハリセンボン	<i>Diodon holacanthus</i>

III 両生綱

1、無尾目

- aアカガエル科
アカガエル属
ナミエガエル

III Class Amphibia

1.Order Anura

- Family Ranidae
Genus Rana LINNE
Rananamiyei STEJNEGER

IV 爬虫綱

1、カメ目

- aリクガメ科

2、有鱗目

- 科, 属不明

IV Class Reptilia

1.Order CheIlonia

- Family Testudinidae

2.Order Ophidia

- Fam. et gen. indet

V 哺乳綱

1、翼手目

2、齧歯目

- aネズミ科

3、偶蹄目

- aイノシシ科

- リュウキュウイノシシ *Susleucomystax riukiuanus*

V Class Mammalia

1.Order Chiroptera

2.Order Rodentia

- Family Murida

3.Order Artiodactyla

- Family Suidae

<分類・集計について>

- 1、骨の同定は金子浩昌氏にお願いした。記して感謝致します。
- 2、分類可能なものはすべて分類し、それ以外は破片として集計した。
- 3、イノシシの歯の咬耗度については大阪市池上遺跡、石川市古我地原貝塚を参考に作成した。

Aーグリッド

甲殻・脊椎動物遺存体の出土量は全体の2.4%と非常に少ない。甲殻類はウニの棘が6点出土したが出土層は不明である。

魚類はウナギ目の2個体のみで他は少破片のため種は不明である。

爬虫類はリクガメが得られた。リクガメは第Ⅰ層から椎骨板が2点、カメの手が1点出土したのみで、全体の2.0%と他のグリッドに比べて非常に少ない。

両生類はカエルが2個得られた。その内訳はナミガエルの距踵骨・脛骨、アカガエル属の脛腓骨がそれぞれ1点ずつが第Ⅰ層から検出された。

哺乳類はネズミ、イノシシ、大型獣（ウシカウマ）が出土した。ネズミは3破片で第Ⅰ層から左寛骨、第Ⅱ層から左大腿骨、脛骨が検出された。イノシシは第Ⅱ層から1個体、層不明-2個体の計3個体が検出された。

大型獣は4点検出されたが、詳細は不明である。

イーグリッド

甲殻・脊椎動物は全体の23.8%で、その中でも第Ⅱ層が主体である。

甲殻類はウニの甲羅-3個、棘-5個、イカの甲羅-8個が第Ⅱ層から出土した。

魚類は出土総数36個体で、そのうちブダイ科は22個体で最も多い。次にハリセンボン、ベラが多い。脊椎は719個得られた。

リクガメは破片総数498個で全体の44.6%で最も多い。そのうち、第Ⅱ層は331個、層不明が171個あるが、第Ⅱ層の可能性が高い。部位別にみると上腕骨3点、左下腹板1点、臀骨板が左右各1点、頂骨板1点、爪が277点で最も多く得られた。最少個体数は3個体である。

へび類は脊椎骨が3点得られた。第Ⅱ層-2個、層不明-1個である。

哺乳類はネズミ、イノシシ、大型獣が出土した。ネズミ類は第Ⅰ層-寛骨、第Ⅱ層左大腿骨、左右不明の脛骨の3点が出土した。イノシシは第Ⅰ層で左右不明の下顎骨、左脛骨がそれぞれ1個、第Ⅱ層-中手（足）骨が1個出土した。歯牙から最少個体数を推定すると4個体である。

大型獣は第Ⅰ層から1点出土している。

Aーグリッド

甲殻・脊椎動物は全体の57.5%で本遺跡のなかで最も出土量が多い。前述した理由で3mmと1mmのメッシュにかけた。そのため、他のグリッドに比べて出土量も多く、その中でも第Ⅲ層が最も多い。

甲殻類は他のグリッドに比べて多く、ウニの甲羅-150個、棘-215個、イカ甲羅-38個、破片-1個の計404個出土した。

魚類をみると全体の60.2%を占める。種類別にみるとブダイ科が多く、その中でもナンヨウブダイ、ナガブダイが多く得られている。次にニザダイ科は尾部の基部につく硬質盾状の鱗が11点、ハリセンボンが16個体多い。また、魚の脊椎骨854個得られたが、種の同定は困難である。

リクガメは244個（全体の22.7%）でイーグリッドに次いで多い。上腕骨から最少個体数は2個体が推定できる。

カエルはナミエガエル、アカガエル属が出土した。他のグリッドに比べて出土量が多い（表9）。

鳥類はサシバ左大腿骨近位部が第Ⅲ層から出土した。他に種不明のものが得られている。

哺乳類はコウモリ、ネズミ、イノシシ、大型獣（ウシカウマ）が得られた。コウモリは遊離歯が第Ⅲ層より2点出土した。また、出土層不明の左上腕骨遠位部が1点得られているが、これも本層出土の可能性が高い。

ネズミは頭骨、下顎、中手（足）、寛骨、大腿骨、脛骨が出土し、最少個体数は3個体と推定され、全グリッドの中で最も出土量が多い。

イノシシは破片は109個（10.3%）最少個体数は6個体と考えられ、他の遺物の出土に比べて少ない。

大型獣は2点出土したが出土層は不明である。

B-グリッド

甲殻・脊椎動物は全体の8.4%で出土量が最も少ない。

魚類（表13）は全体の0.09%でハマフェフキ2個体、ブダイ科1個体得られた。脊椎は全体の0.1%の出土である。

リクガメは第Ⅲ層から左下腹板1点、縁骨板3点の計4点得られた。

鳥類はサシバの左上腕骨遠位部、左中手骨がそれぞれ1点得られた。また、ニワトリの脛骨近位部が第Ⅰ層から1点出土している。

哺乳類はイノシシ、大型獣（ウシカウマ）が得られた。イノシシは本グリッドが最も多く出土している。骨には石灰及び赤土が付着している。破片数は744個で全体の77.5%を占める。個体数は13個体が想定される。そのうち第Ⅲ層からは11個体出土している。骨の部位の中では頭骨が多い。イノシシの年齢については古我地原貝塚の歯の咬耗度を参考にすると0.5~2.0歳が出土し、特に2.0歳以上が53.1%で主体を示す。第41図に古我地原貝塚と比較してみた。これによると本遺跡は古我地原貝塚に比べると幼獣が少ない。

C-グリッド

甲殻・脊椎動物は全体の3.2%が出土している。

甲殻類はウニの甲羅が第Ⅲ層－1点、層不明－1点の計2点が出土した。

魚類は全体の4.1%が出土している。サメの椎体が第Ⅲ層から1点得られた。直径3.7mm、厚さ1.9mmを計る。ブダイ科4個体、ベラ科2個体、ニザダイ科は尾部の基部につく硬質楯状の鱗が出土している。脊椎は94個で全体の4.4%である。

両生類はナミエガエルの左上肩甲骨が1点出土したのみである。出土層は不明である。

爬虫類はリクガメ、ヘビ類が検出された。リクガメは100点出土し、そのほとんどは破片、カメの手でわずかに部位の確認できるものは縁骨板の4点である。第Ⅲ層から出土している。

ヘビ類の椎体が2点検出された。出土層は第Ⅲ層と層不明からである。

哺乳類はイノシシが得られた。Ⅲ層から1個体、層不明－1個体が出土した。

表－8 甲殻類出土状況

種類	出土地		I-グリッド			A-グリッド			C-グリッド			不明	合計
	ア-グリッド	層不明	第Ⅱ層	層不明	小計	第Ⅲ層	層不明	小計	第Ⅲ層	層不明	小計		
ウニ	甲螺		3		3	150		150	1	1	2	25	180
	トゲ	6	5		5	215		215			0	115	341
イカ	甲螺				0	19	19	38			0		38
	その他		8		8	1		1			0		9
合計		6	16	0	16	385	19	404	1	1	2	140	568

表－9 両生類出土状況

種類・部位	出土地		A-グリッド				C-グリッド			出土地区不明	合計		
	ア-グリッド	層不明	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅲ層	層不明	小計	第Ⅲ層	層不明			小計	
ナミエガエル	上腕骨	右		1	3		4					4	
		左			4		4					4	
	上肩甲骨	右					0					0	
		左					0		1	1		2	
	桡尺骨	右					0					0	
		左			1		1					1	
	鳥口骨	右					0					0	
		左			1		1					1	
	脛腓骨	不				5	1	6					6
		不				2		2					2
	距踵骨	不				6		6					6
		不	1			6		6					7
	小計		1	1	22	1	24	0	1	1	1	26	
	アカガエル属	上腕骨	右					0					0
左							0					0	
上肩甲骨		右					0					0	
		左					0					0	
桡尺骨		右			1		1					1	
		左			1		1					1	
鳥口骨		右					0					0	
		左					0					0	
脛腓骨		不	1		6	1	7					9	
		不					0					0	
距踵骨	不					0					0		
	不					0					0		
小計		1	0	8	1	9	0	0	0	0	9		

表-10リクガメ出土状況

部位	出土地		アーグリッド					イーグリッド				A-グリッド				B-グリッド		C-グリッド					不明	合計
	第1層	第II層	第III層	層不明	小計	第III層	第III層	層不明	小計	第III層	第I層	第III層	層不明	小計	第III層	第I層	第III層	層不明	小計					
腹甲板	R				0		1		1					0					0				1	
	L		1		1				0	1				0					0				2	
中甲板	R				0				0					0					0	1			1	
	L				0				0					0					0				0	
背脊骨板	R		1		1				0					0					0				1	
	L		1		1				0					0					0				1	
	完				0		1		1					0					0	1			2	
甲頂骨板			1		1		1		1					0					0				2	
		2	5		5		14	1	15					0					0				22	
			39		39	1	34	1	36	3	1	3		4					0	9			91	
破片				85	85		72		72							10	3	13		9		179		
カメの手		1	277		85	362		102						102			69	14	83	202			750	
上腕骨	R		1		1		2		2					0					0	1			4	
	L				0		2		2					0					0				2	
	不		1		1	2	4	1	5					0					0				7	
合計	3	327	0	171	498	1	233	3	237	4	1	82	17	100	223								1,065	

表-11ネズミ類出土状況

地区	層序	P/L/不	頭蓋骨	下蓋骨	脊椎骨	肋骨	肩胛骨				上腕骨	尺骨桡骨				中手骨	寛骨		大腿骨		脛骨		腓骨	踵骨	距骨	中足骨(手)	指骨			破片	合計				
							PSd	RSd	PSd	RSd		PSd	RSd	PSd	RSd		PSd	RSd	PSd	RSd	PSd	RSd					PSd	RSd	PSd			RSd	PSd	RSd	PSd
イ	第I層	R														1														1					
	第II層	L																																	
		不																																	
グ	第II層	R																																	
	第III層	L																																	
		不																																	
フ	小	R																																	
	第II層	L														1	1																		
		不																																	
アイ	第II層	R																																	
	第III層	L	①																																
		不																																	
グ	第III層	R	①													2																			
	第IV層	L		3①																															
		不				1										2																			
フ	小	R	1													2																			
	第II層	L	1	3①																															
		不				1										2																			
不明	R																																		
	L															1																			
	不																																		
合計	R	1													2																				
	L		3①													1	1																		
	不				①											3																			

表-12大型獣出土状況

部位	出土地		アーグリッド				イーグリッド		A-グリッド		B-グリッド		不明
	第I層	第V層	層不明	小計	第I層	層不明	第III層	層不明	第III層	層不明			
部位不明	1	2	1	4	1	2	4					1	

表-13魚類出土状況

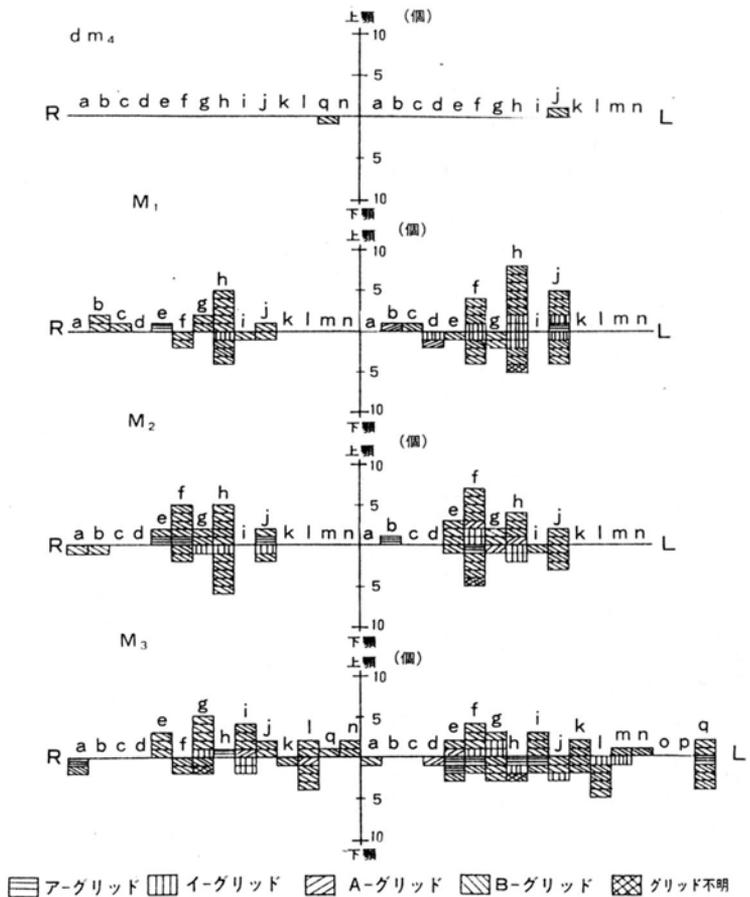
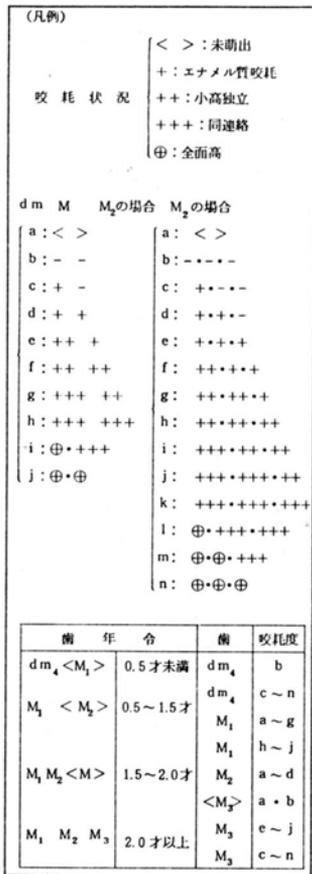
種別	出土地	A-グリッド					B-グリッド					C-グリッド					破片数	個体数	
		不明	第II層	第III層	不明	小計	第I層	第II層	第III層	不明	小計	第I層	第II層	不明	小計				
ウツボ科	ワナギ目					0												0	0
ハタ科	スズキ目					0												0	0
スズキ科	スズキ目					0												0	0
フエダイ科	スズキ目					0												0	0
タコイダ科	スズキ目					0												0	0
フエキダイ科	スズキ目					0												0	0
ハマフエフキ	スズキ目					0												0	0
ベラ科	スズキ目					0												0	0
コブダイ	スズキ目					0												0	0
カンムリベラ	スズキ目					0												0	0
他	スズキ目					0												0	0
フダイ科	スズキ目					0												0	0
ナンヨウフダイ	スズキ目					0												0	0
ナガブダイ	スズキ目					0												0	0
他	スズキ目					0												0	0
ニザダイ科	スズキ目					0												0	0
カワハギ	スズキ目					0												0	0
背鰭線形	スズキ目					0												0	0
上下	スズキ目					0												0	0
ハリセンボン	スズキ目					0												0	0
不	スズキ目					0												0	0
明	スズキ目					0												0	0
フエキダイ	スズキ目					0												0	0
骨	スズキ目					0												0	0
椎	スズキ目					0												0	0
椎	スズキ目					0												0	0
木	スズキ目					0												0	0
合計		17	1,403	7	195	1,604	249	3,924	163	4,337	6	201	65	266	6,228	204			

表-14イノシシ歯牙出土状況

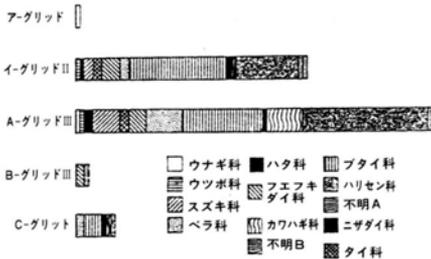
出土地	上												下												C	I	計
	右						左						右						左								
	i ¹	i ²	i ³	i ⁴	i ⁵	i ⁶	i ¹	i ²	i ³	i ⁴	i ⁵	i ⁶	i ¹	i ²	i ³	i ⁴	i ⁵	i ⁶	i ¹	i ²	i ³	i ⁴	i ⁵	i ⁶			
第I層																											
第II層																											
不明																											
小計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	
第I層																											
第II層																											
不明																											
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
第I層																											
第II層																											
不明																											
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
地区不明																											
合計	0	1	0	2	0	0	0	1	4	8	10	20	3	2	1	4	0	0	2	5	11	13	22	17	9	1	

表-15イノシシ出土状況

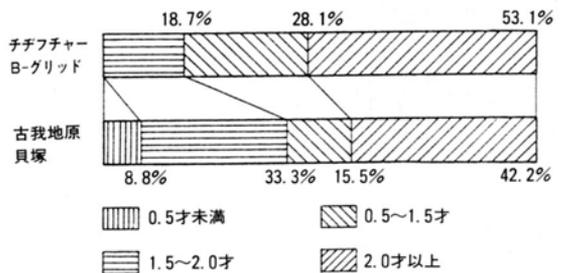
地区	期	R L 不	頭蓋骨	下顎骨	脊椎骨	肋骨	肩甲骨	上腕骨	尺骨	骨	中手骨	寛骨	大腿骨	胫骨	腓骨	踵骨	距骨	中足骨 (手) P(S)d	指			破片	合計	個体数		
																			中手骨	中手骨	中手骨					
アイグランド	I	R																					8	8		
		L																								
	II	R		1																				26	28	1
		L																								
	ド	不明	R	14	1								1											1	1	
			L	2	2																					
小		R	3	1	2破	1	3																	110	143	2
		L	15	1									1													
計		R	2	2																						
		L	3	2	2	1	4																	145	180	3
アイグランド	I	R													1									1	3	1
		L		1																						
	II	R																								
		L																								
	不明	R																								
		L																								
計	R			1											1											
	L																							10	13	2
アイグランド	I	R																							1	1
		L		1																						
	II	R	3	5	1																					
		L																								
	III	R	2	3	4破	1	2																			
		L																								
不明	R																									
	L																									
計	R																									
	L																									
アイグランド	II	R																								
		L																								
	III	R	13	108	11	1		1	1			4	1	1	1	1	1									
		L	15	5	2	1	5	2	2			2	2	2	2	2	2	2								
	不明	R	16	4	20	22破	2	5	13	2		1	2	2	2	2	2	2								
		L																								
計	R	13	110	11	1		1	1			4	1	1	1	1	1	1									
	L	15	5	2	1	5	2	2			2	2	2	2	2	2	2									
計	R	16	4	20	22	2	5	13	2		1	2	2	2	2	2	2									
	L																									
アイグランド	III	R																								
		L																								
	不明	R																								
		L																								
	計	R																								
		L																								
合計	R	16	121	13	1		1	1			1	4	1	1	1	1	1									
	L	17	7	2	1	5	2	2			2	2	2	2	2	2	2									
合計	R	21	4	25	2	1	3	5	19	2																
	L																									



第39図 イノシシ歯萌出・咬耗度



第40図 魚類地区別出土状況



第41図 イノシシ歯牙による年齢別構成比

第V章 まとめ

本市の洞穴および半洞穴に所在する遺跡は当山洞穴遺跡、城間第1洞穴遺跡、城間第2洞穴遺跡、牧港貝塚、本遺跡（チヂフチャー洞穴遺跡）が報告されている（註1）。これらの遺跡の立地は1遺跡（当山洞穴遺跡）を除いては、いずれも川沿いの石灰岩丘陵に所在する。このことは浦添の地形、特に石灰岩地形と洞穴遺跡の在り方を考える時、興味が持てるように思われる。又、沖縄貝塚時代後期の遺跡は沖縄本島中南部においては一般的に砂丘附近に立地することが多いが、本遺跡の場合はやや内陸に立地する遺跡としての特徴があるように思われる。以下、本遺跡の発掘成果を略述する。

本遺跡における包含層の広がりや踏査とグリッド設定した5グリッドの発掘調査の状況から洞穴の前庭部と洞穴内の入口から約12mあたりまで確認できた。しかし、後者の場所B-グリッドについては洞穴の入口に設定したA-グリッドあたりからの流れ込み堆積であり、自然堆積の包含層が認められたのは前庭部の中央に設定したI-グリッドと洞穴入口から約5mに設定したA-グリッドであった。また、沖縄貝塚時代の遺物の出土状況についてもI-グリッド、A-グリッドで顕著であった。さらに、前述のI-グリッドにおいては落ち込み（柱穴？）、A-グリッドでは灰層が5枚認められた。

本遺跡の編年上の位置は第IV章調査の成果の各グリッドの土器のところで略述したように基本的には沖縄貝塚時代後期の前半（高宮編年、後I・II期）とした。しかし、検出された土器資料が小破片のため、前述の時期と断定するには厳しい状況があること、さらには、底部の形状が後期前半と扱われている伊江村ナガラ原西貝塚（註2）等で見られる土器底部よりシヌグ堂遺跡のB群土器IV類（註3）および仲原遺跡の仲原式土器（註4）、に近似するようにも見えること等からあるいは仲原式土器の時期前後まで遡る可能性も僅かながらあることを示しておくことにする。又、爪形文系土器と沖縄貝塚時代前期の土器資料も僅かに出土したが、同時期の包含層は認められなかった。

土器以外の人工遺物は骨錐と思われる製品、シレナシジミ製の貝刃、イモガイ製品、トミガイ製品、貝錘、小玉等と石斧、たたき石等の石器等が検出された。これらの資料の中では、ガラス製の小玉と貝錘の資料は興味が持てるものであった。

自然遺物は貝類4195点、魚骨（ブダイ科、ベラ科、カワハギ科等）7324点、イノシシの骨1055点、その他の骨（リクガメ、ネズミ、カエル、コウモリ等）2934点の出土があった。

以上、発掘調査を行った5グリッドの遺物の中から沖縄貝塚時代の資料を中心に報告を行った。しかし、前に記述したように沖縄貝塚時代の生活場所としての利用の後には、洞穴の岩陰部を中心に墓域としての利用（沖縄の近世を主とすると思われる）、去る大戦中は避難壕として利用されてきた変遷があったことを再度報告してまとめといたします。

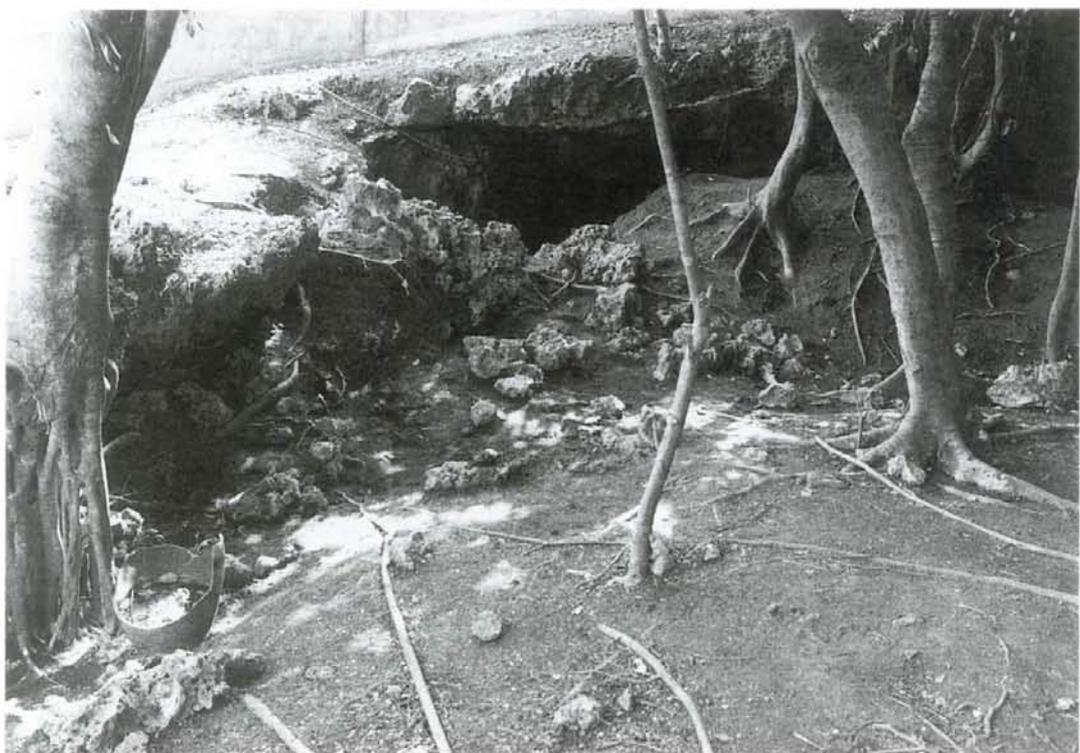
註1.『遺跡分布調査報告書』浦添市教育委員会 昭和55年3月

2. 『伊江島ナガラ原西貝塚緊急発掘調査報告書概報篇・自然遺物篇』伊江村教育委員会
昭和54年3月
3. 『シヌグ堂遺跡 -第1・2・3次発掘調査報告-』沖縄県教育委員会 昭和60年3月
4. 上原 静・当間 嗣一「仲原式土器の提唱について」 沖縄県教育委員会文化課『紀要』
第1号 昭和59年3月

圖 版



図版1 遺跡近景



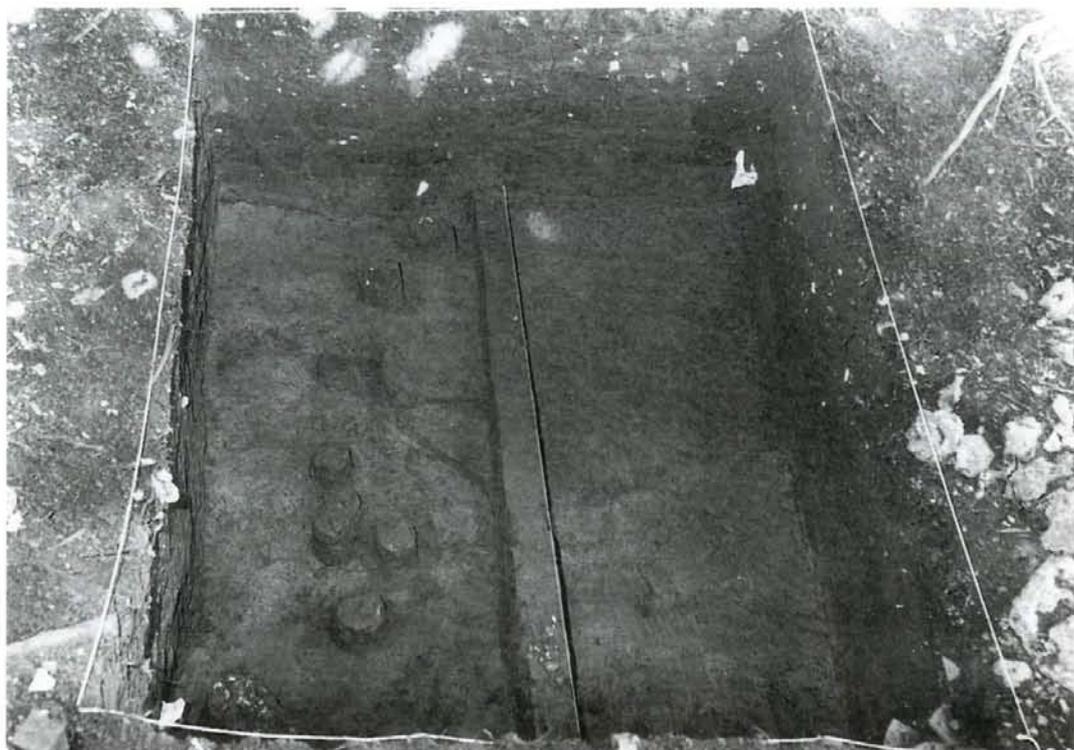
図版2 洞穴入口



図版3 洞穴前庭部の遺物出土状況



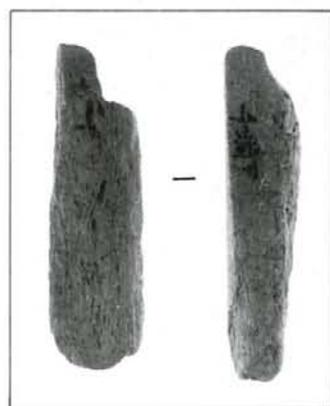
図版4 前庭部北側の遺物出土状況



図版5 アーグリッド発掘状況



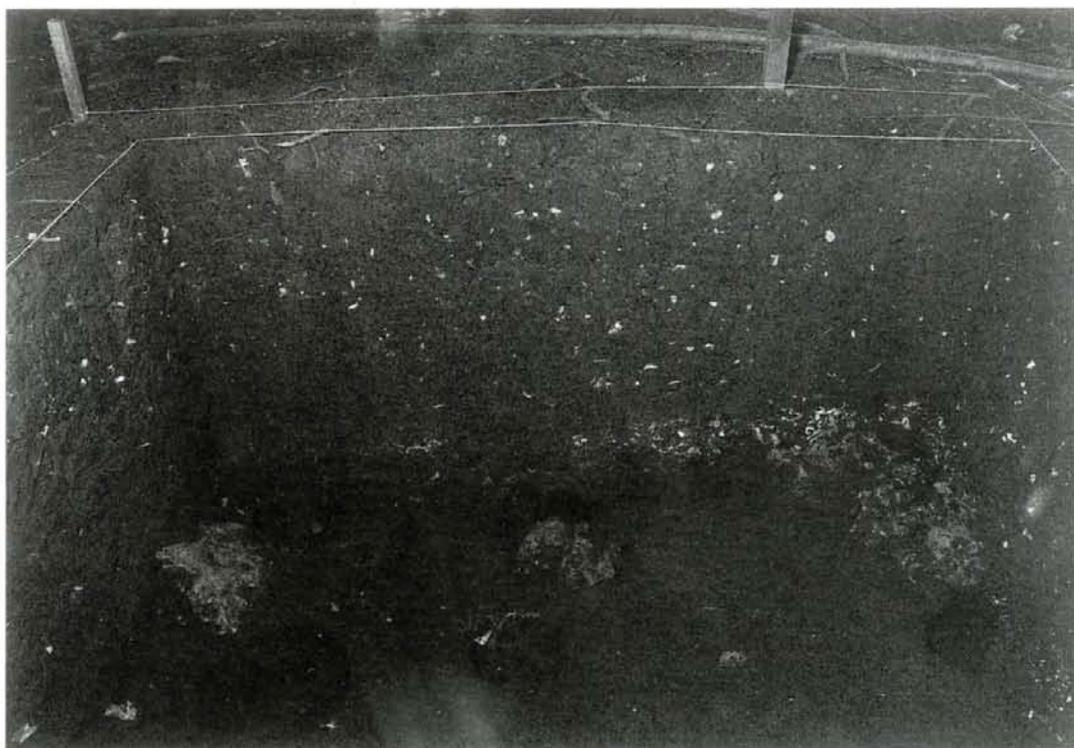
図版6 アーグリッド層序



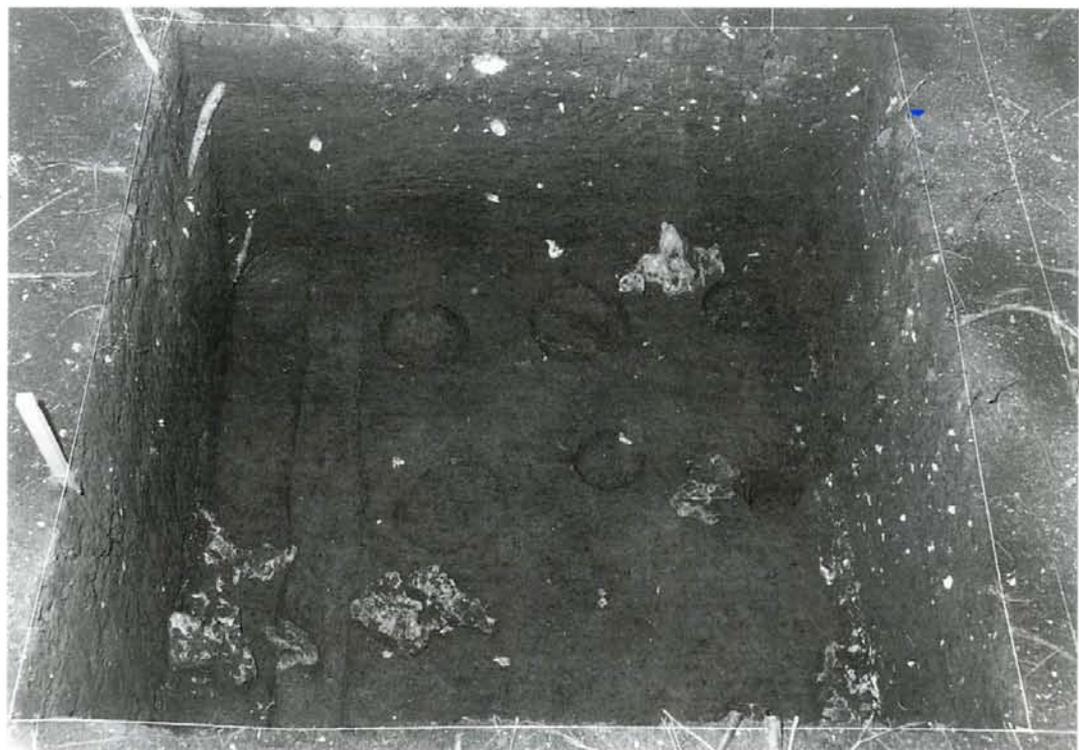
図版7 アーグリッド出土の骨製品



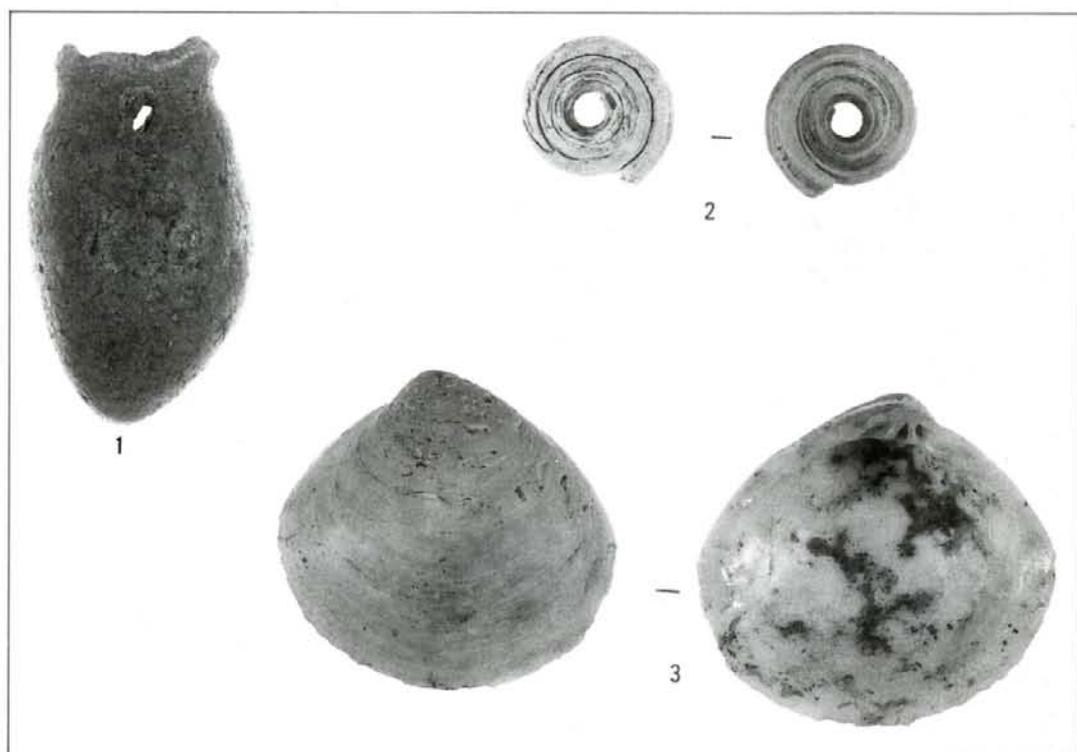
図版8 イーグリッド発掘状況



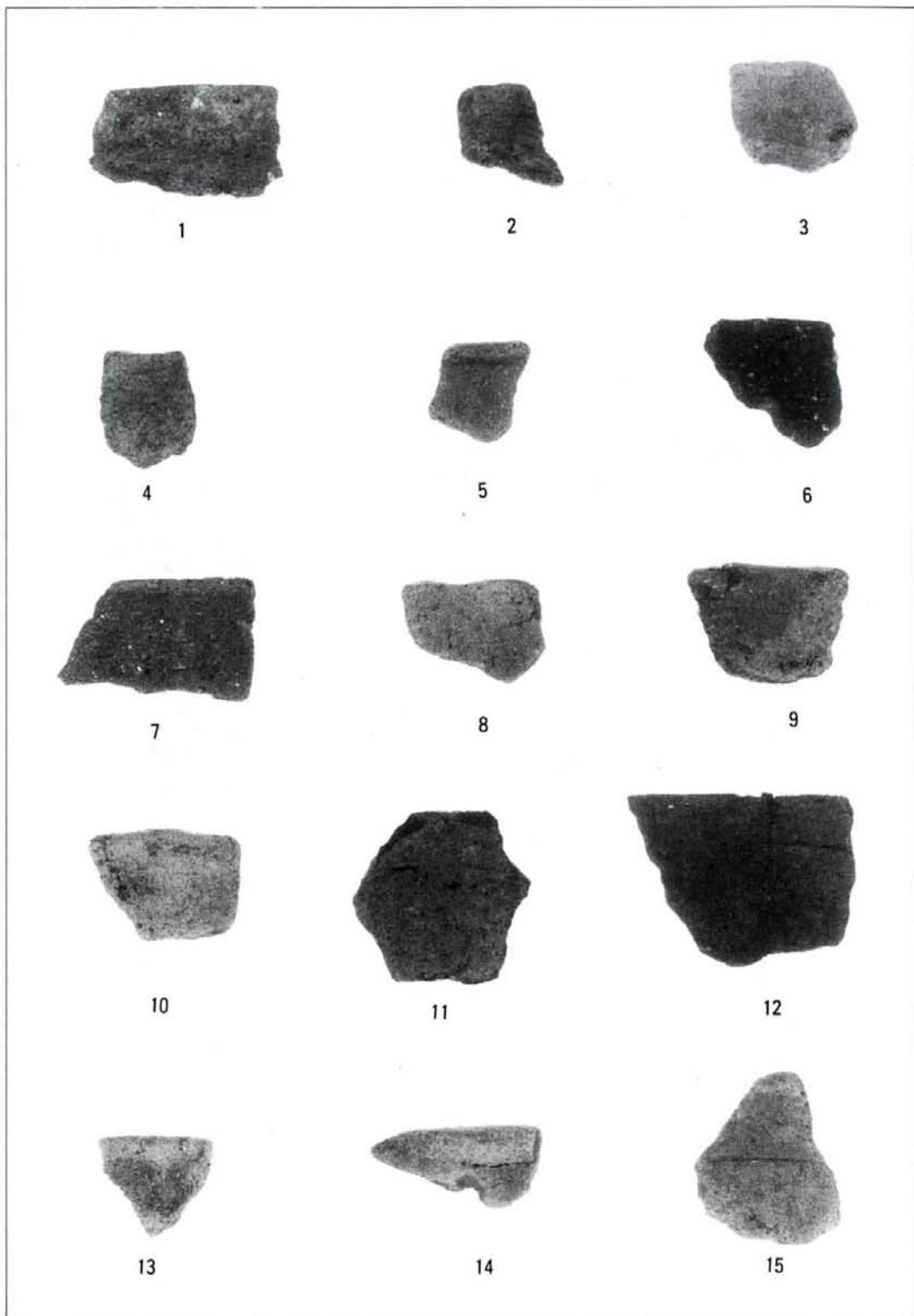
図版9 イーグリッド層序



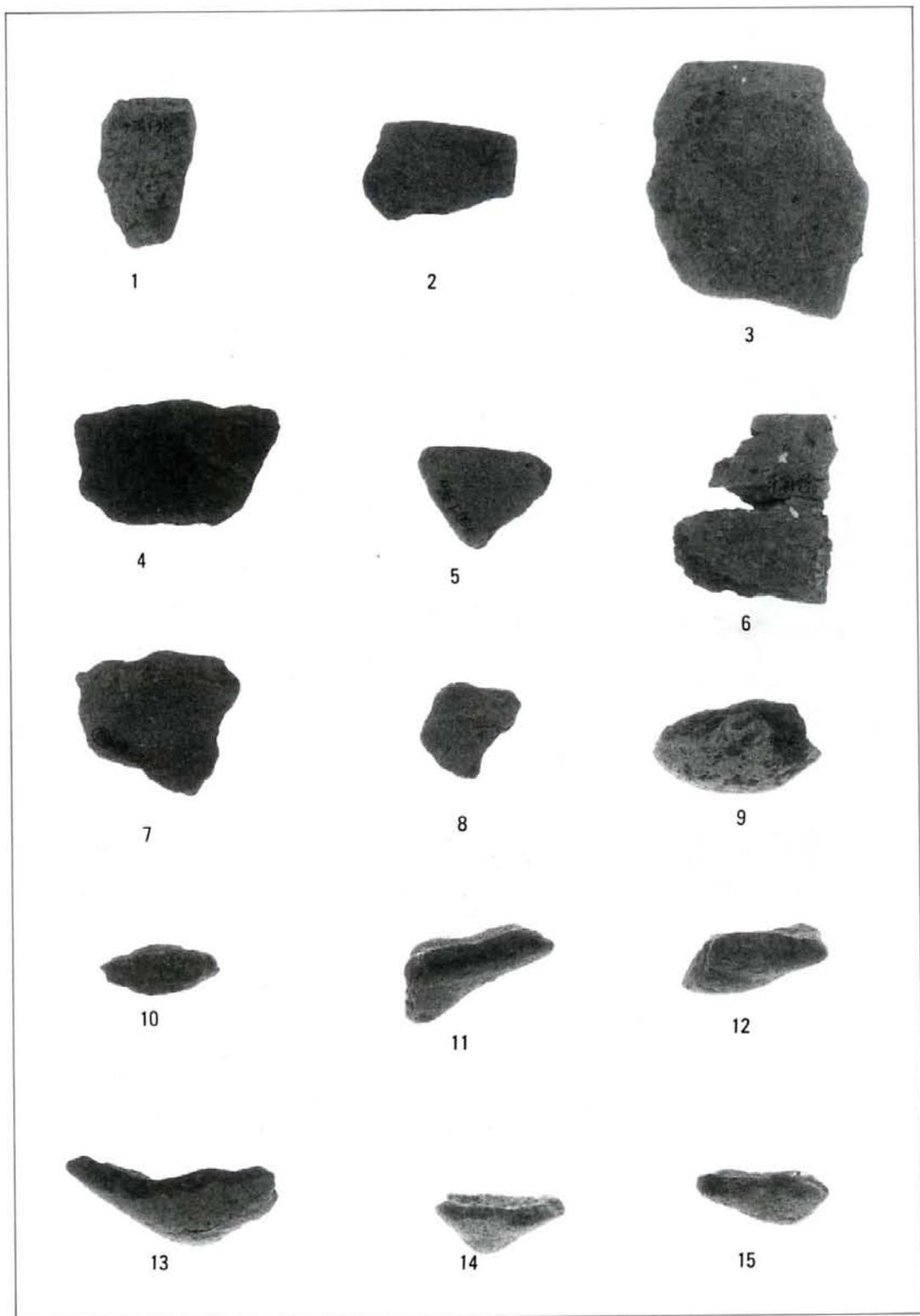
図版10 イーグリッド検出の落込み



図版11 イーグリッド出土のミニチュア土器(1)、貝製品(2・3)



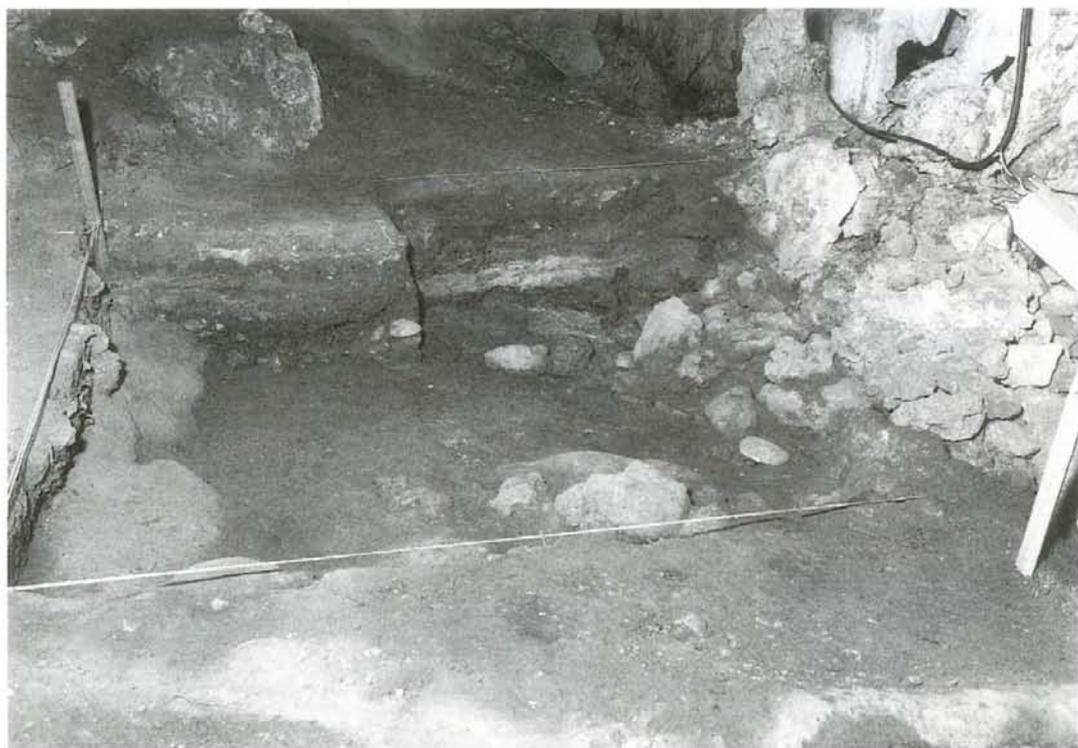
図版12 イーグリッド出土土器(1)



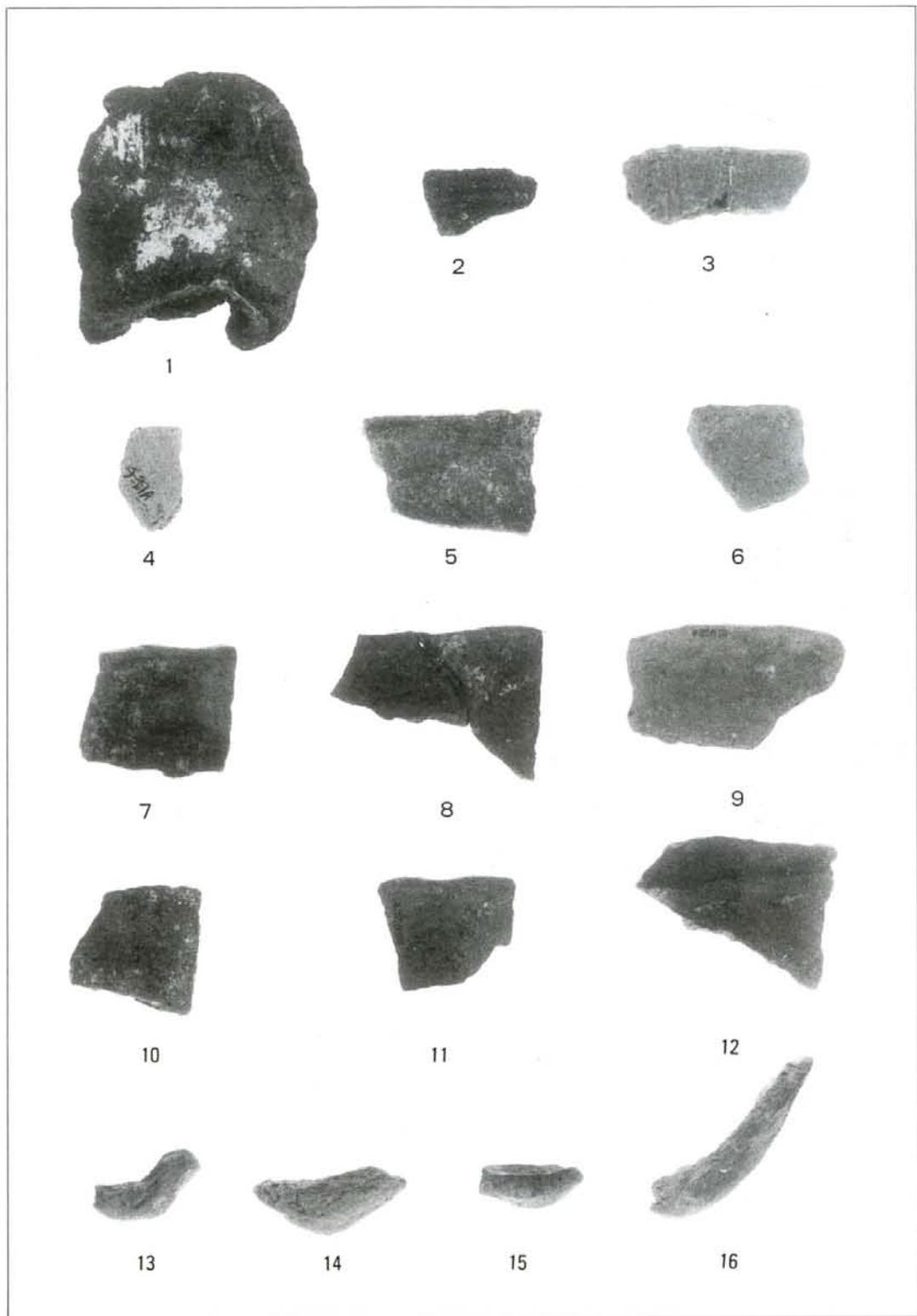
図版13 イーグリッド出土土器(2)



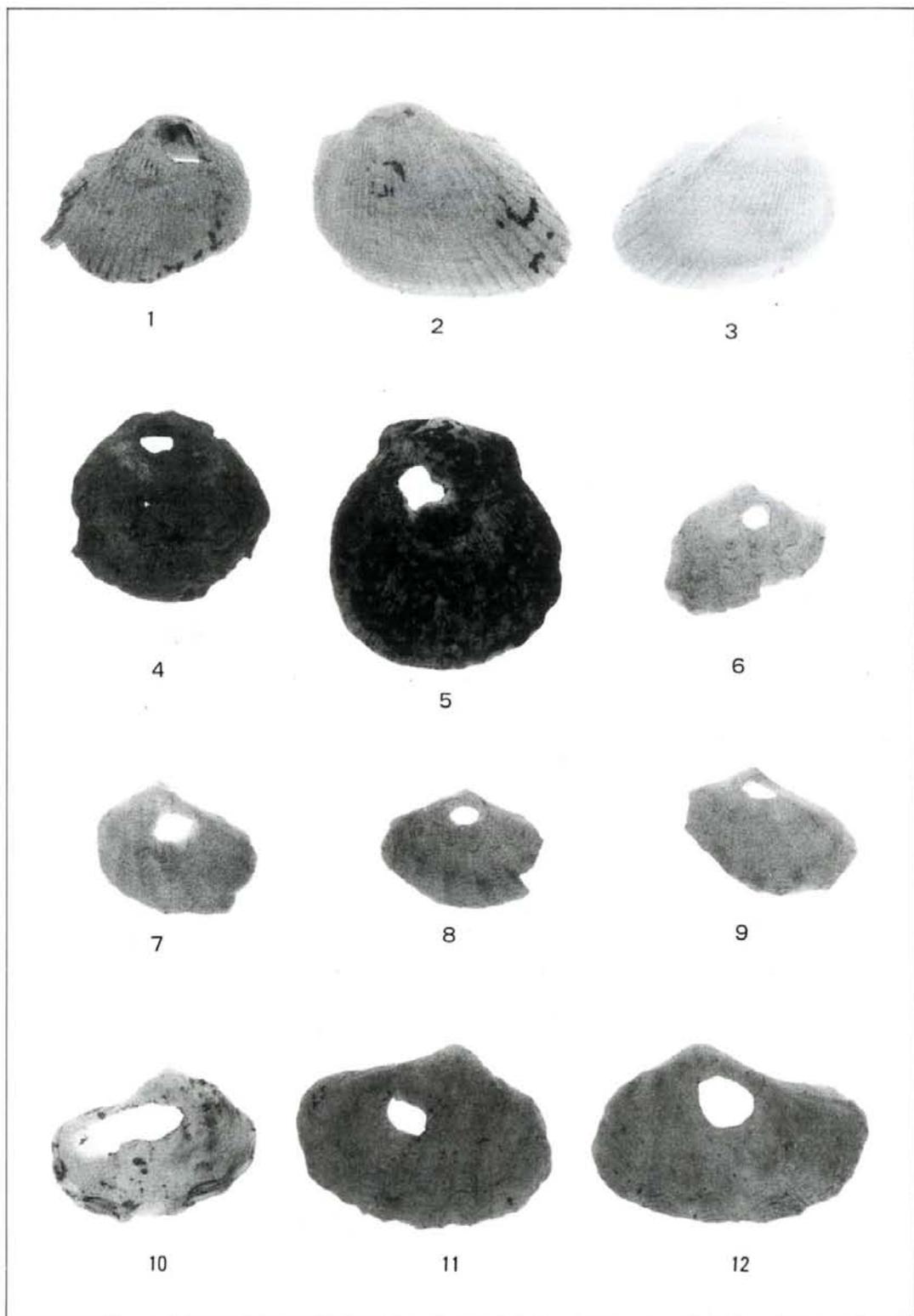
図版14 A-グリッド発掘状況



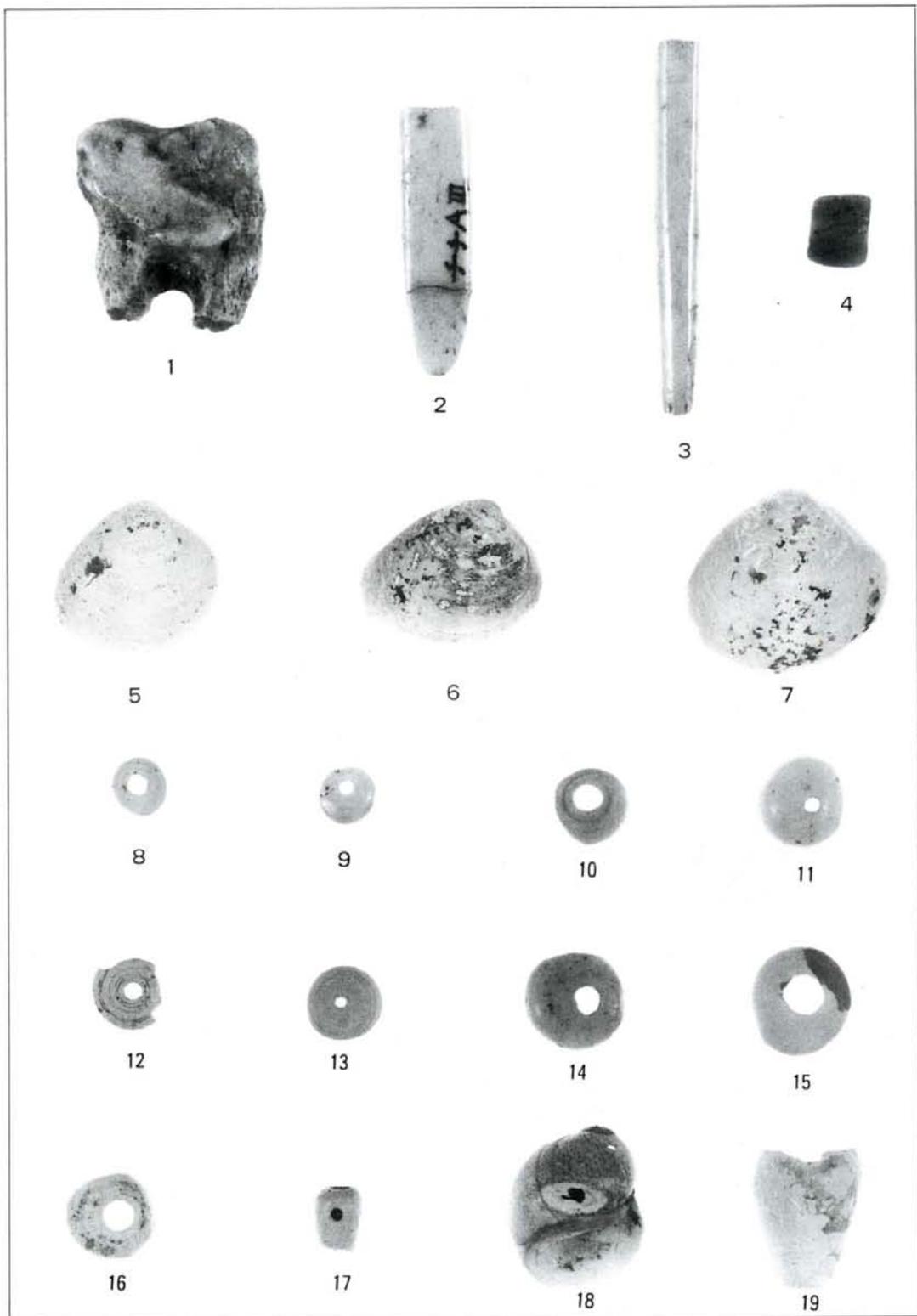
図版15 A-グリッド層序



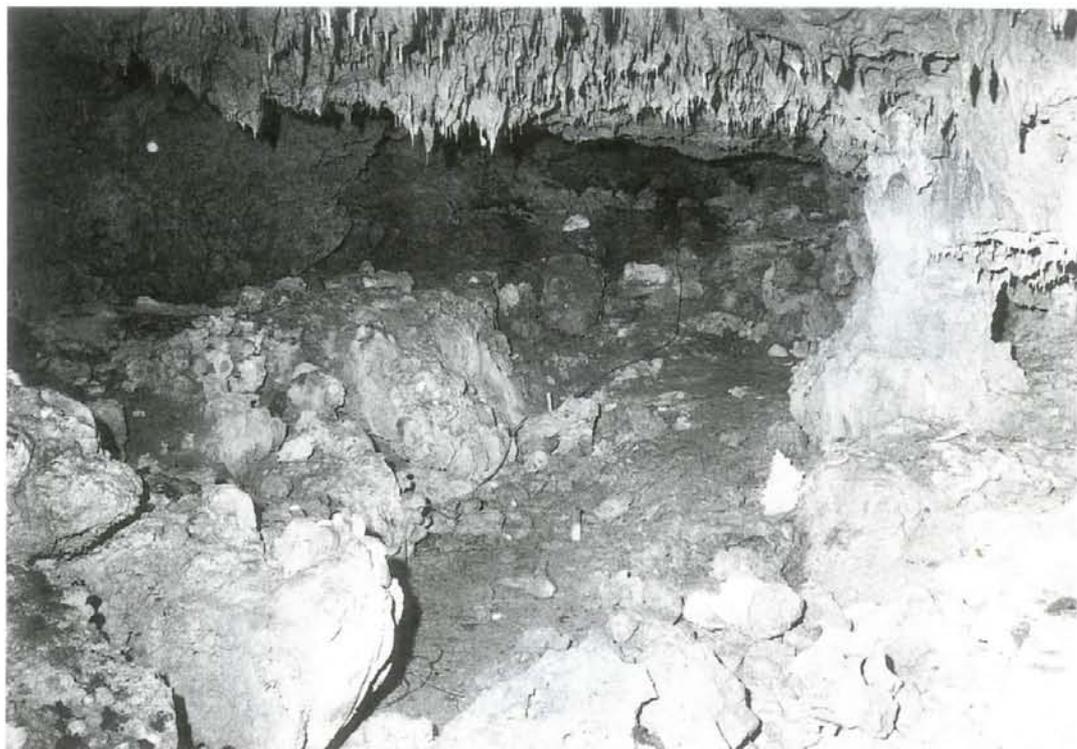
図版16 A-グリッド出土土器



図版17 A-グリッド出土の二枚貝有孔製品



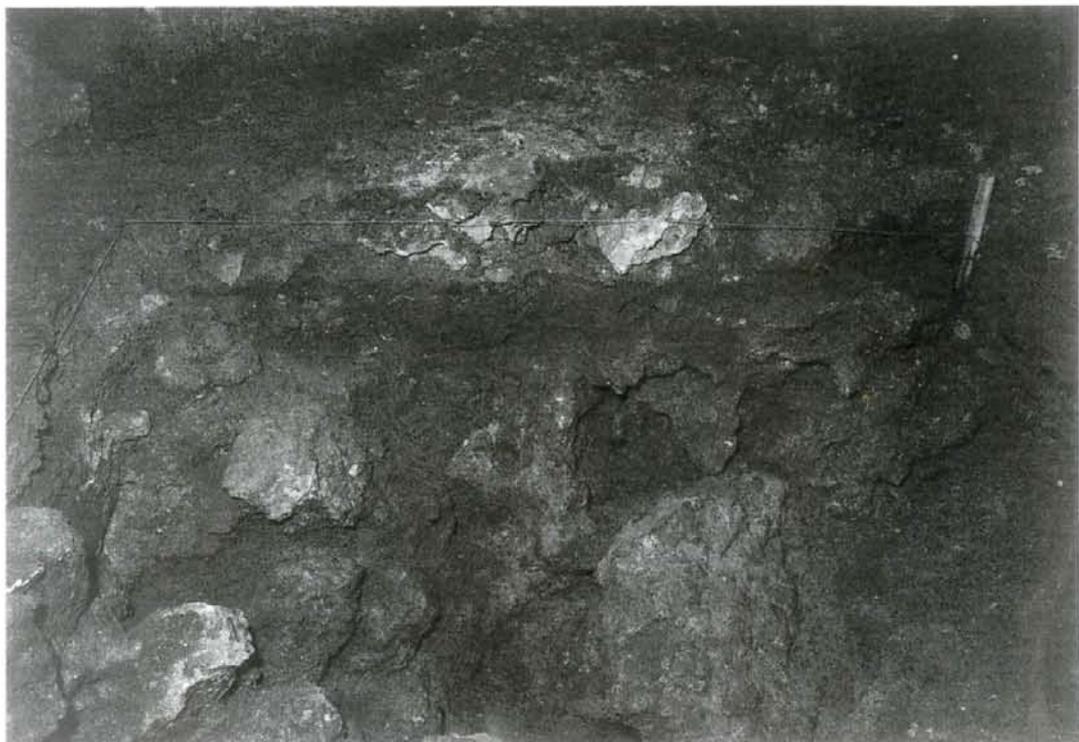
図版18 A-グリッド出土の骨製品(1~3)、ガラス製品(4)、貝製品(5~19)



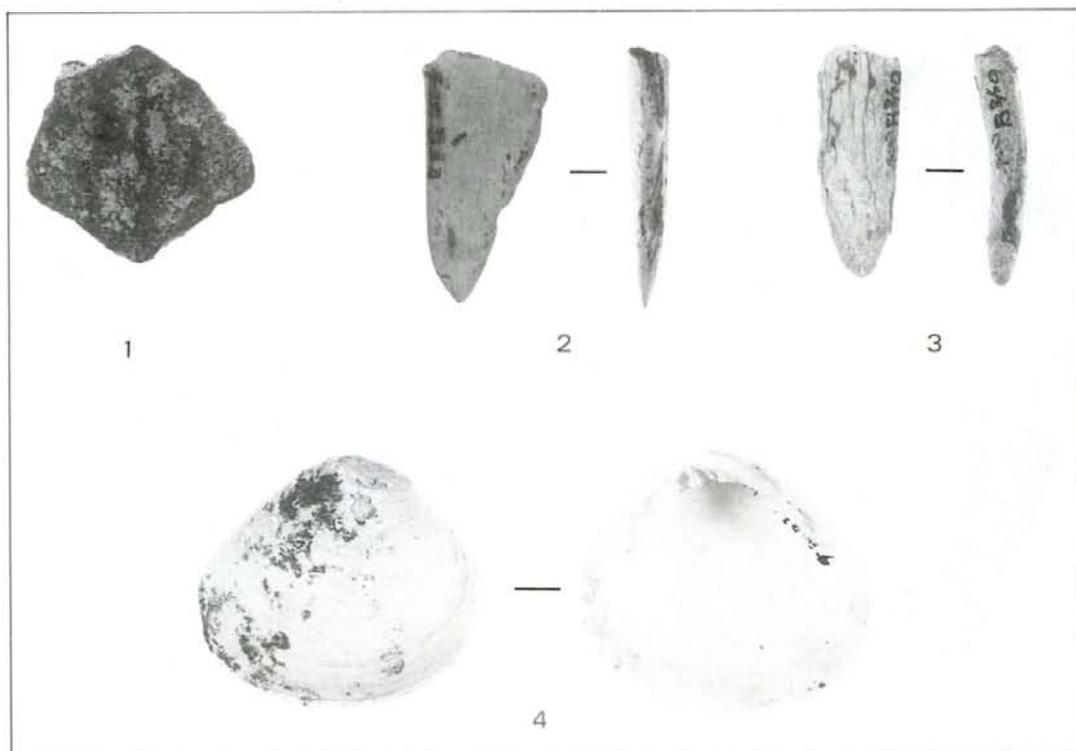
図版19 洞穴内部の状況



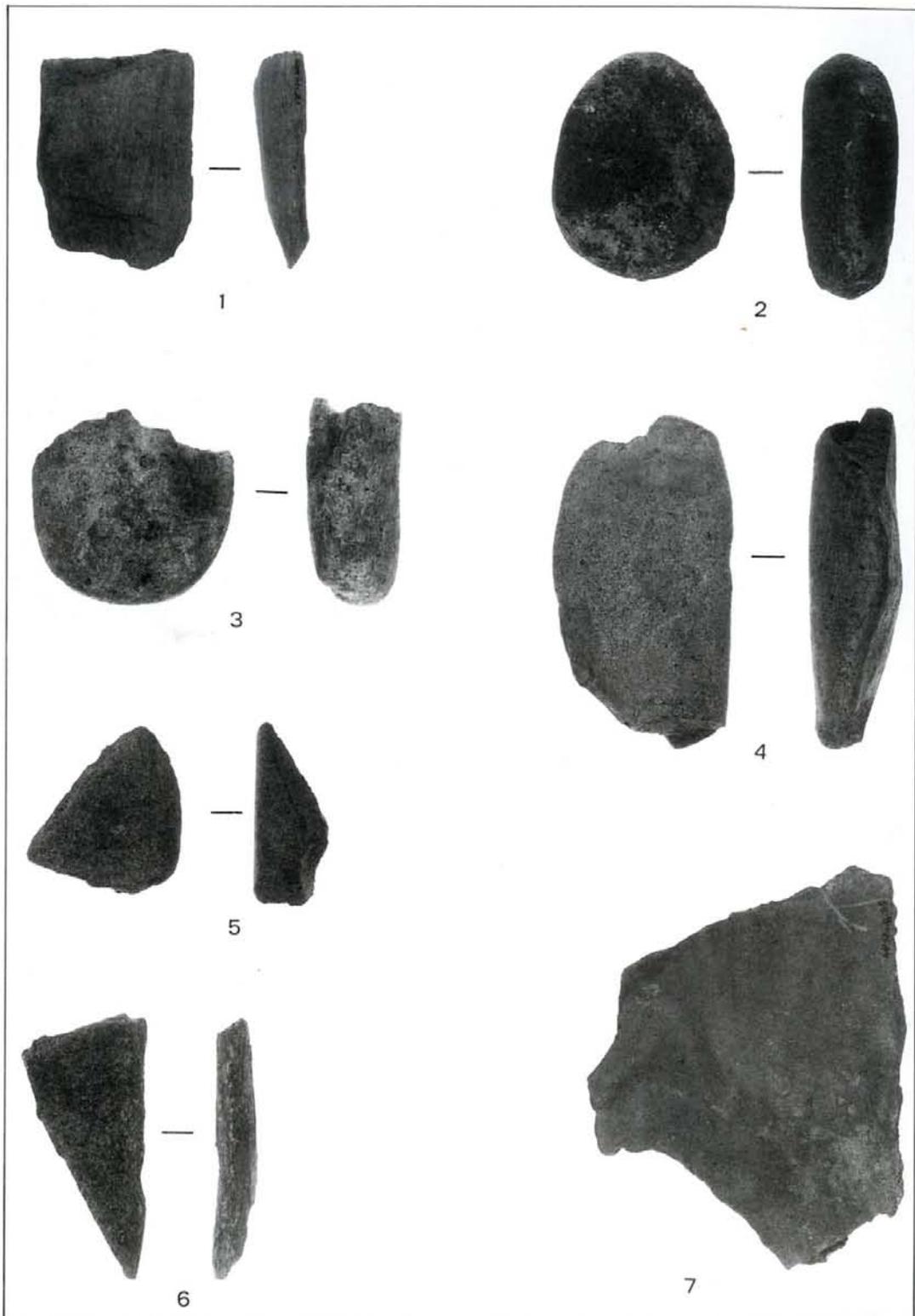
図版20 B-グリッド発掘状況



図版21 B-グリッド層序



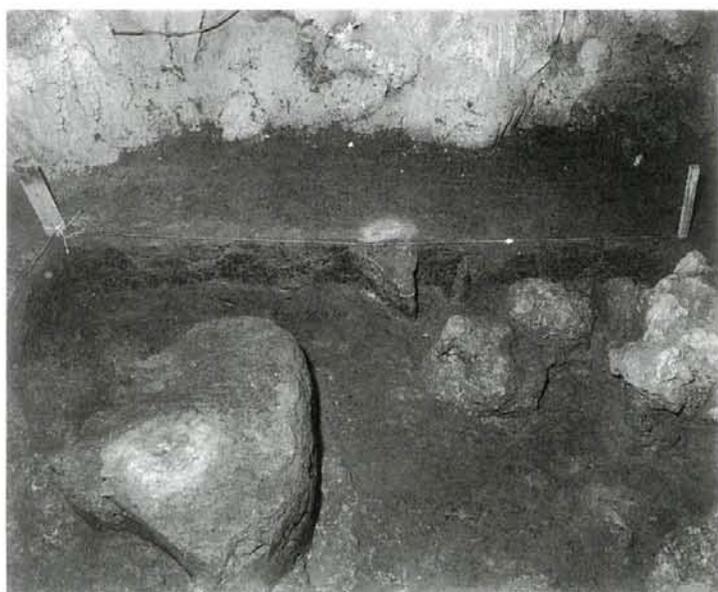
図版22 B-グリッド出土の爪形文系土器(1)、骨製品(2・3)、貝刃(4)



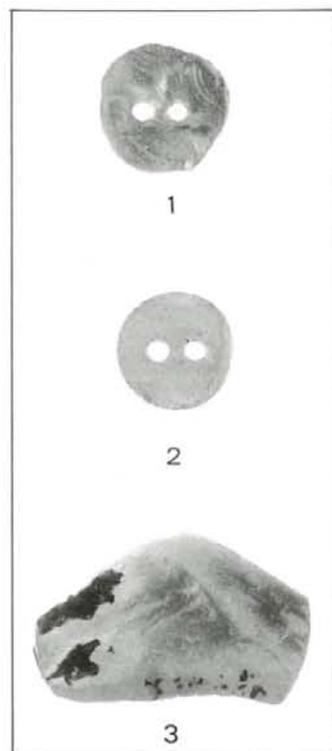
図版23 B-グリッド出土石器



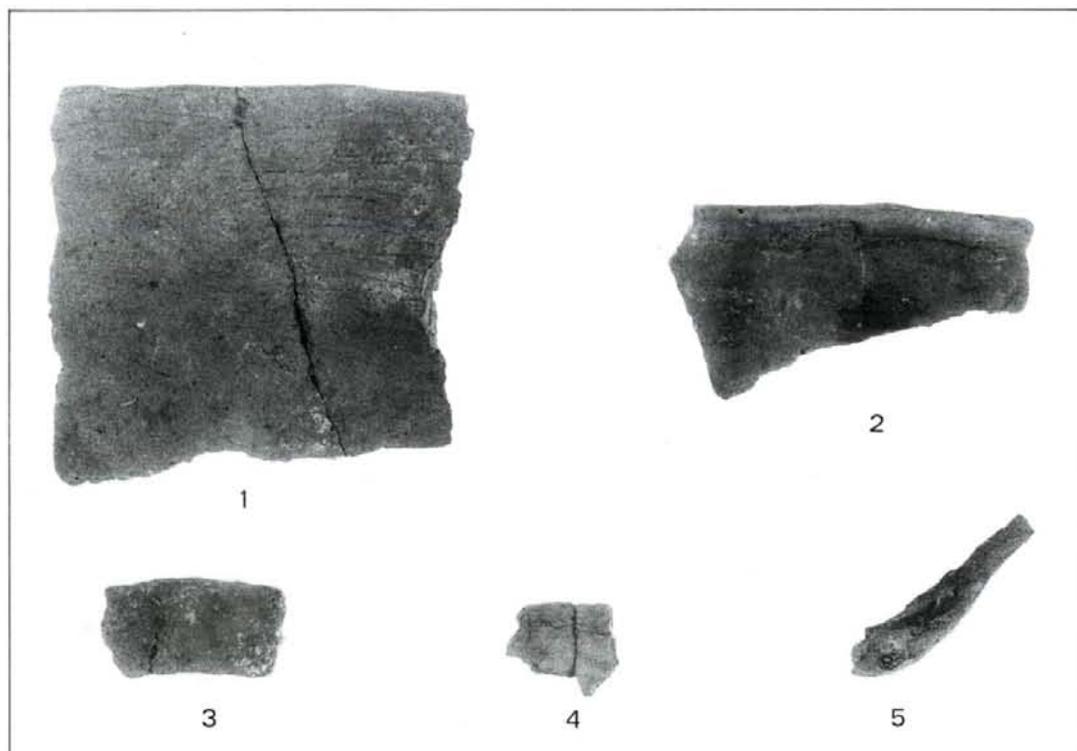
図版24 C-グリッド発掘状況



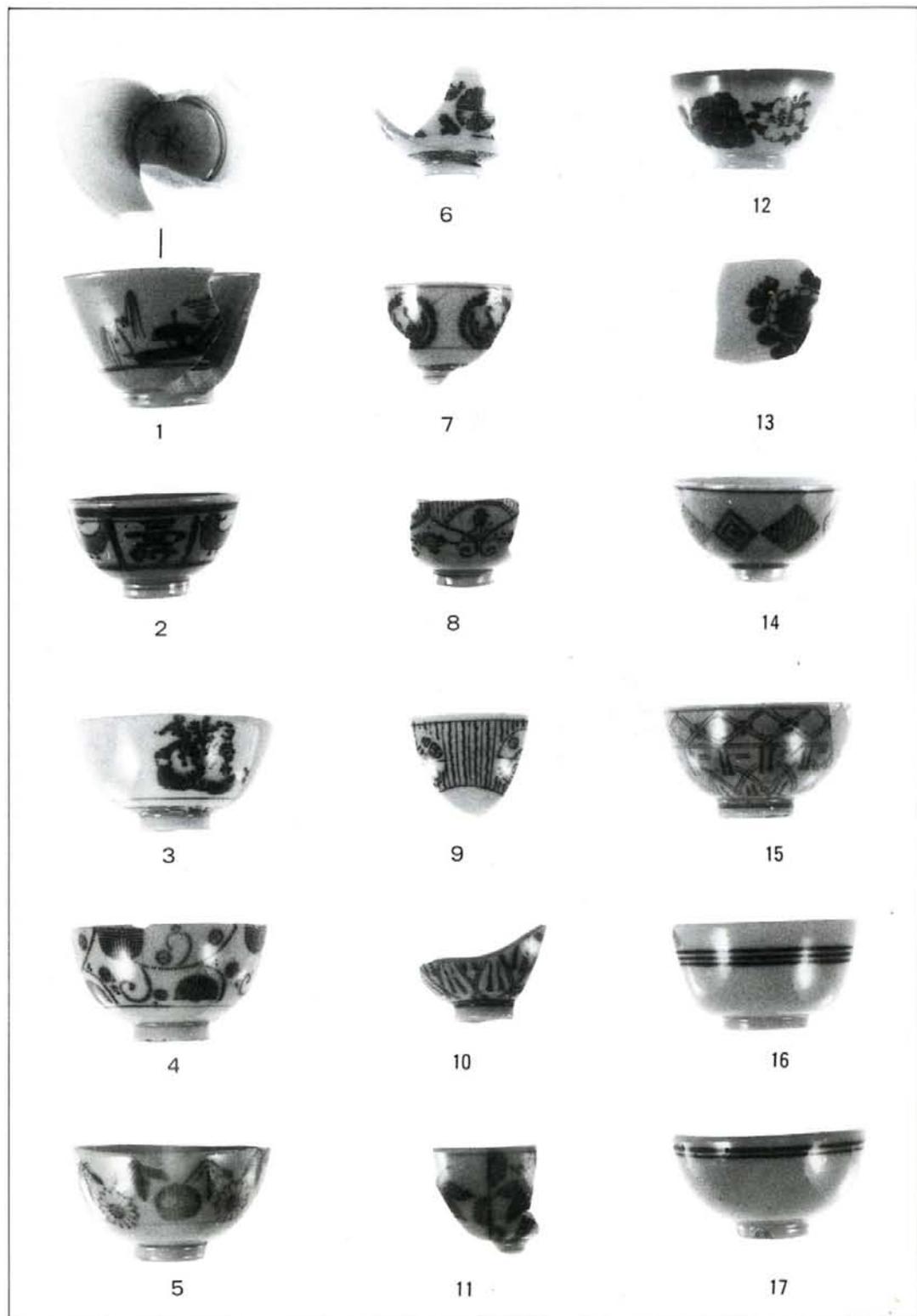
図版25 C-グリッド層序



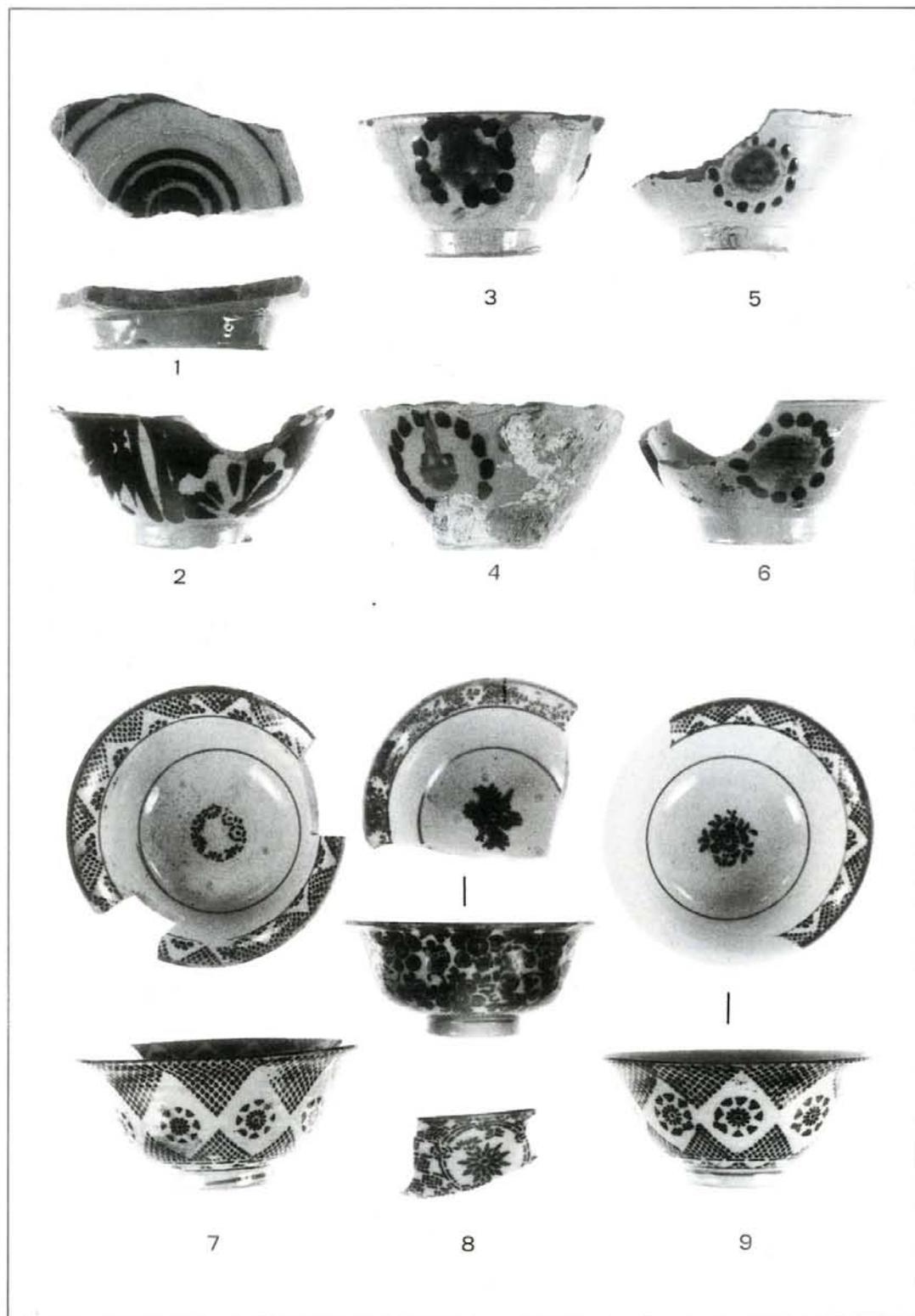
図版26 C-グリッド出土製品



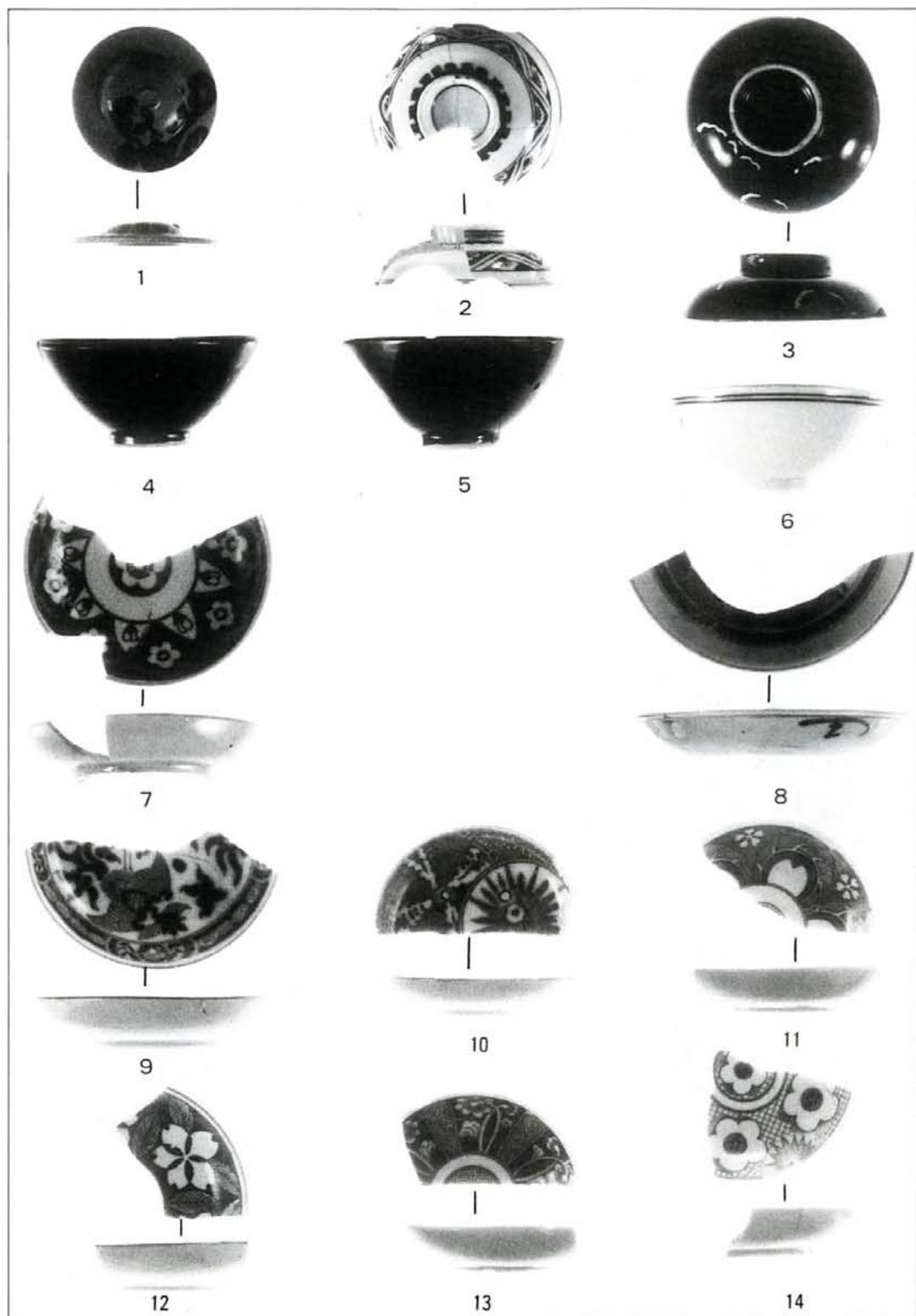
図版27 表採資料(土器)



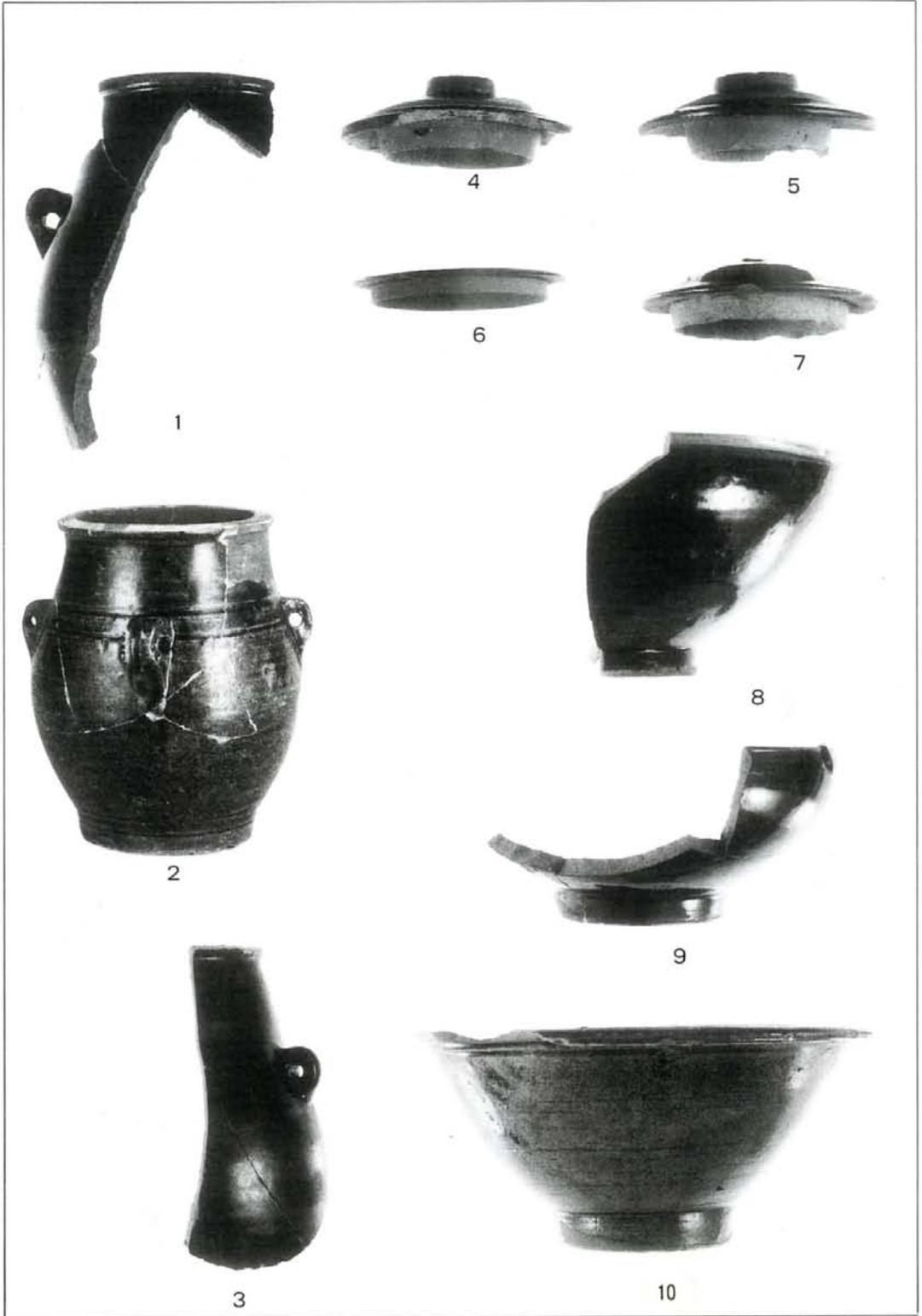
图版28 磁器(碗)



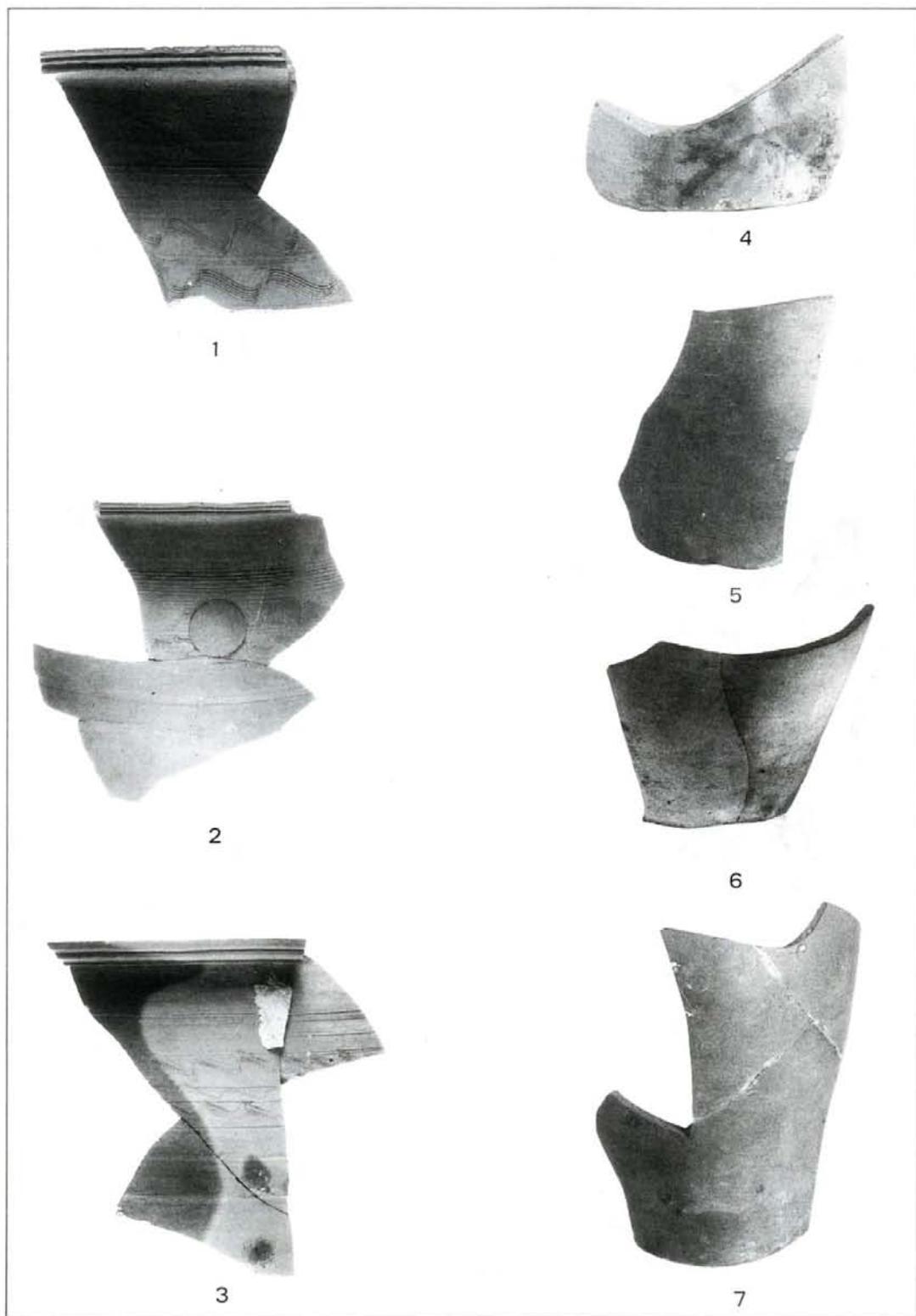
图版29 磁器(碗)



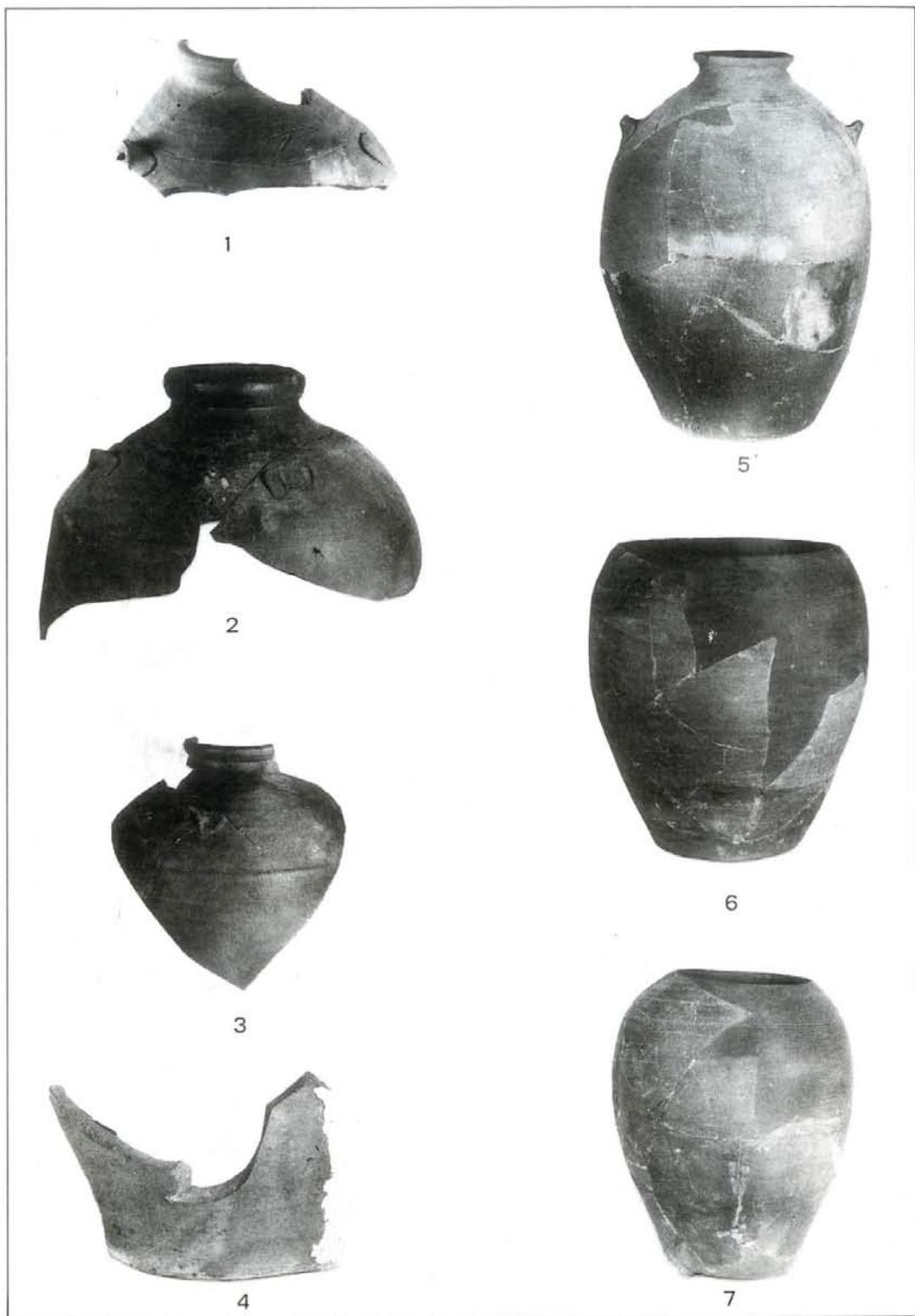
图版30 磁器(盖·碗·皿)



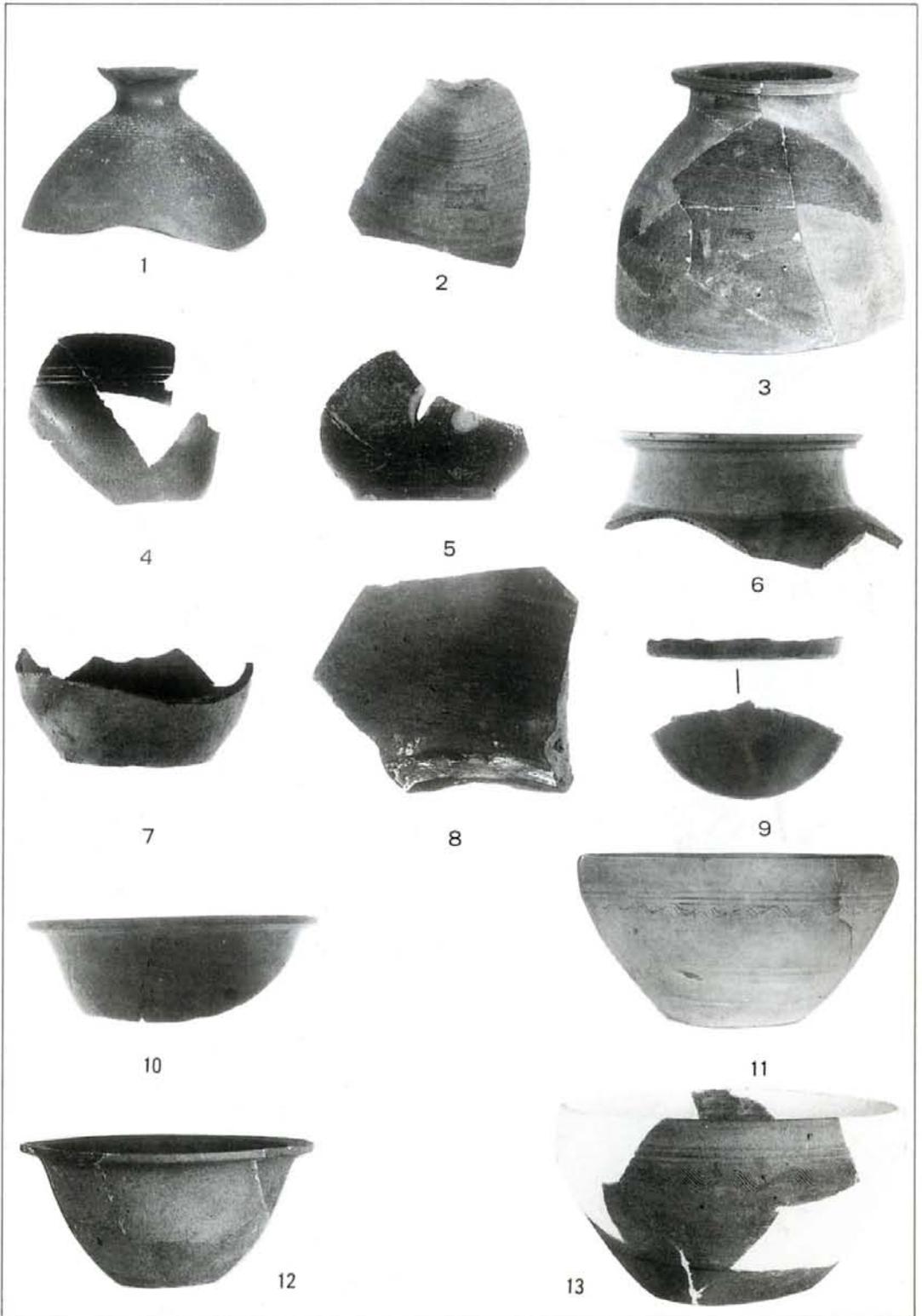
图版31 陶器 (壺・壺蓋・鉢)



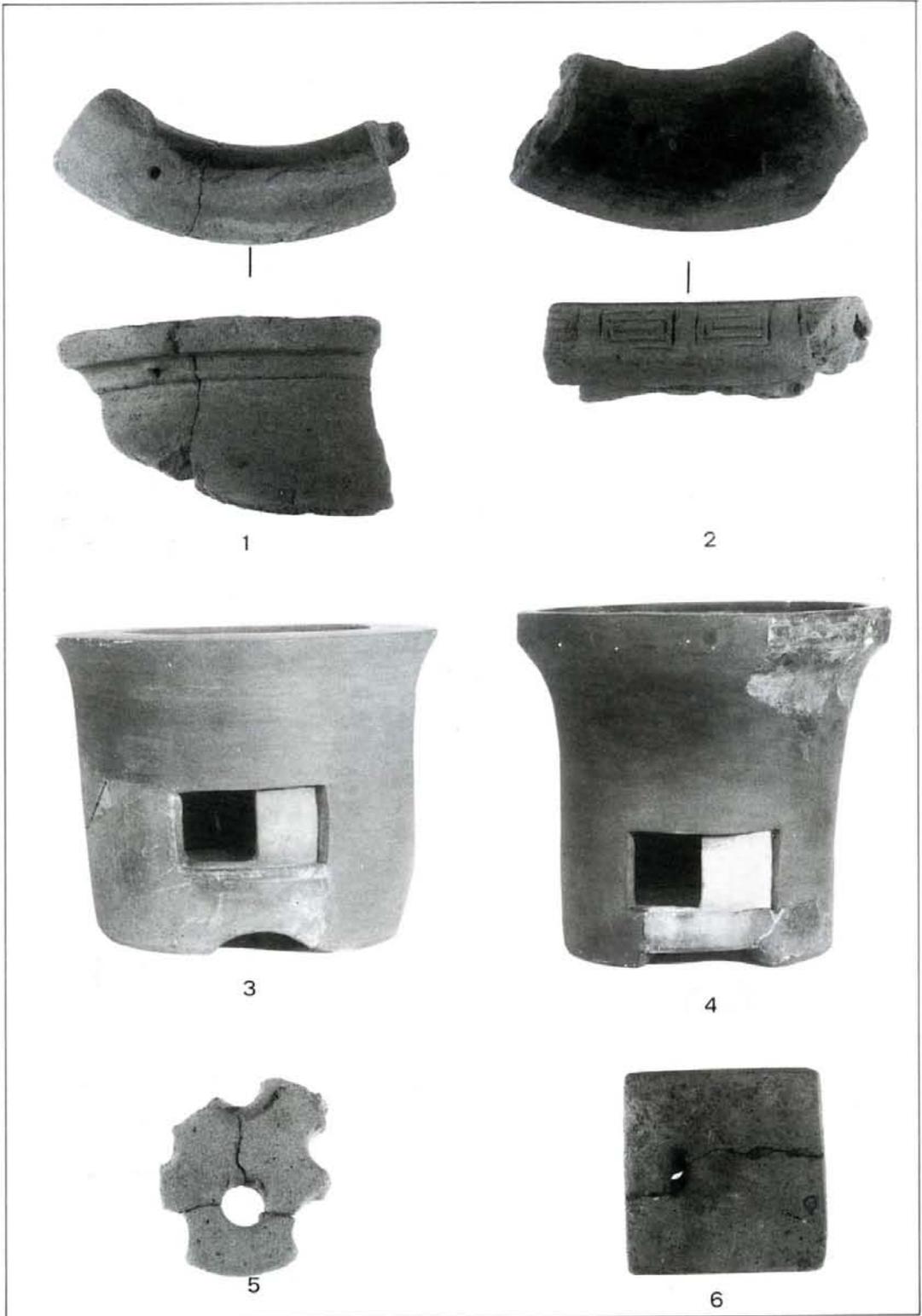
图版32 陶器 (甕・甕底部)



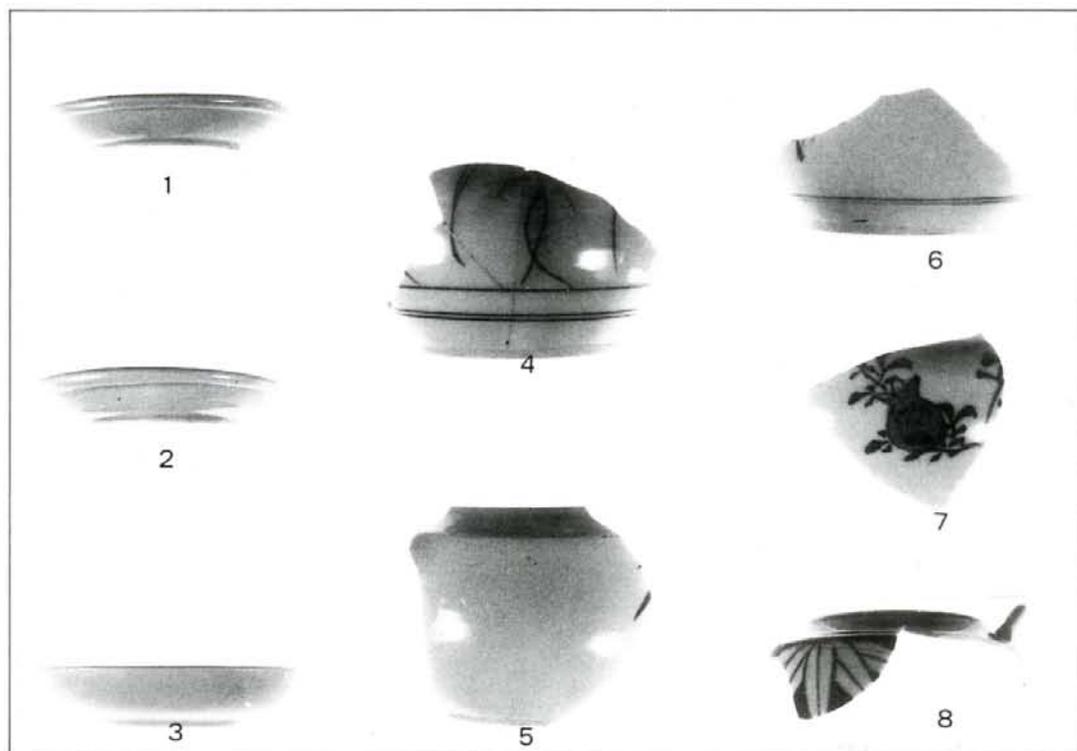
图版33 陶器 (壺・壺底部?)



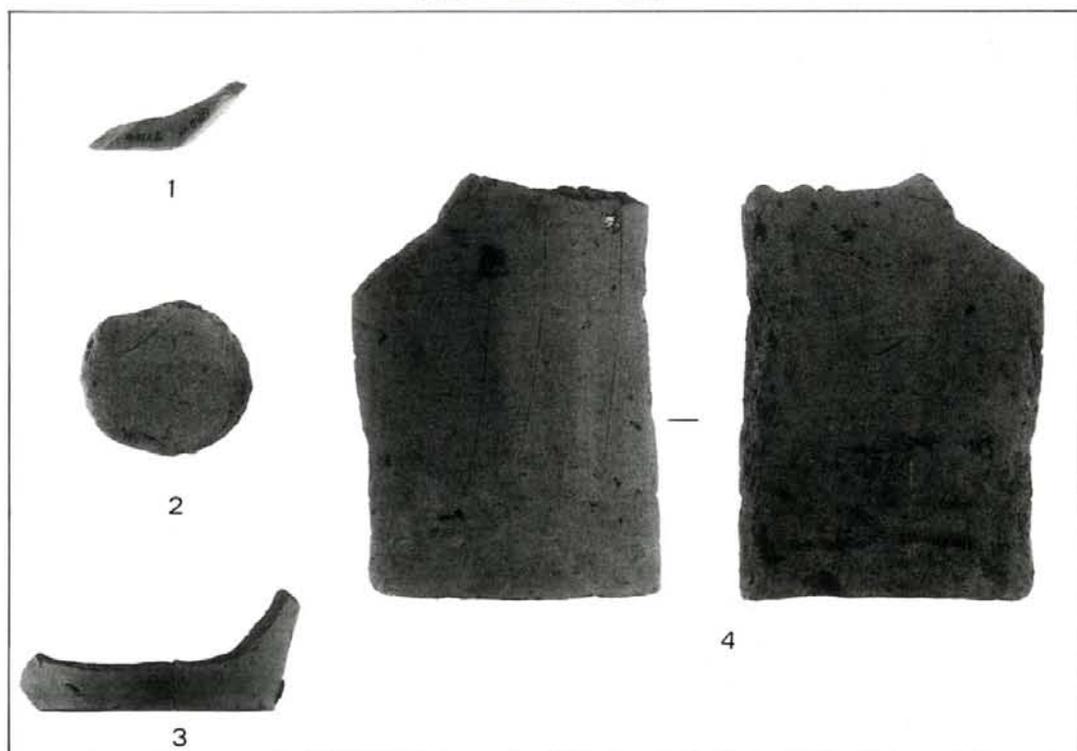
图版34 陶器 (壺・擂鉢・器種不明底部・鉢)



図版35 瓦質土器（シチリン・シチリンに伴うと思われる底敷及び引戸）



図版36 磁器（皿・土瓶）



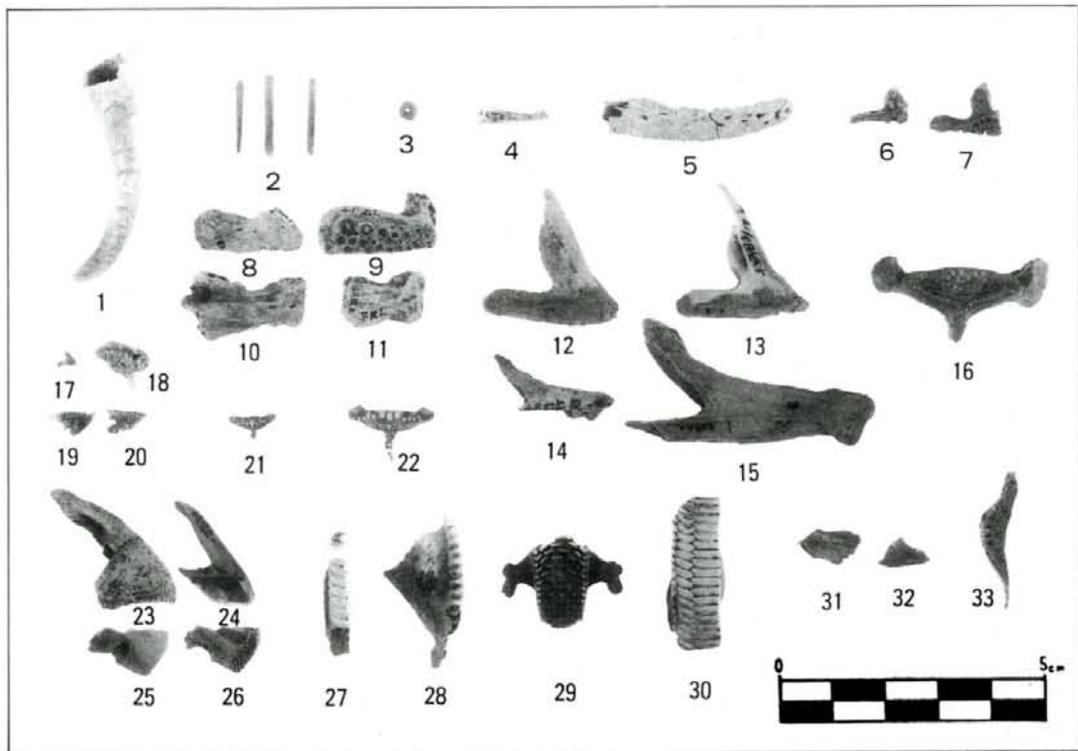
図版37 陶器（底部）・円盤状製品・瓦

図版 38

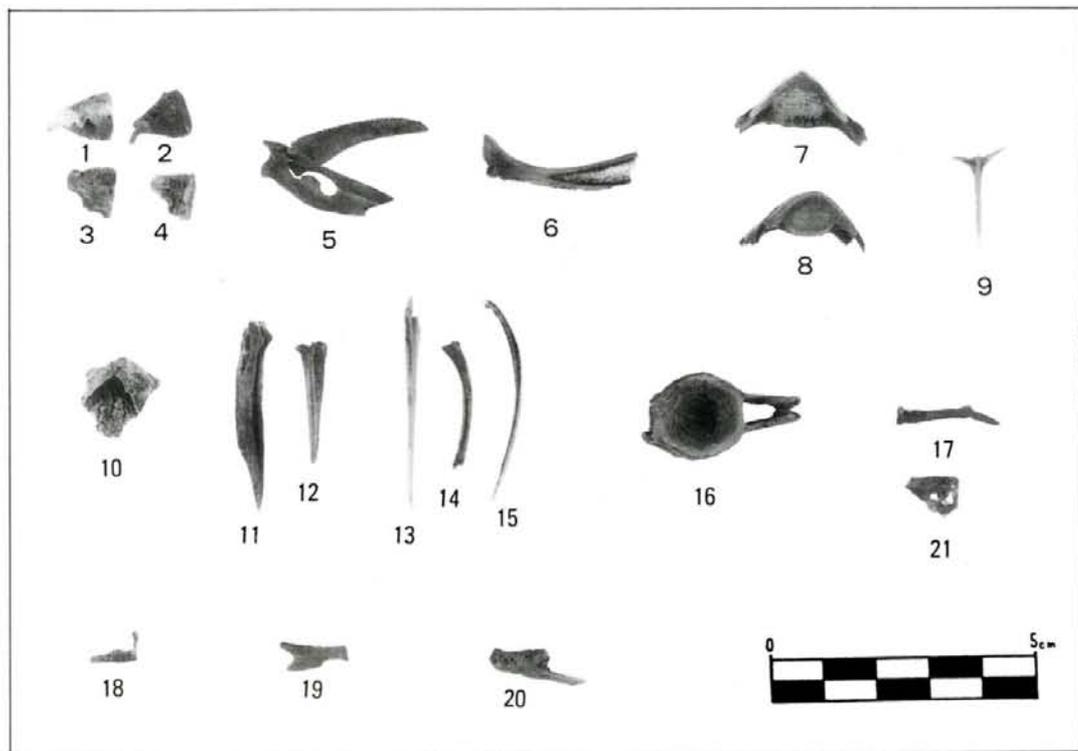
- | | | |
|--------------------|---------------|----------------|
| 1 カニ | 2 バイブウニ | 3 サメ脊椎 |
| 4・5 ウツボ | 6・7 ハタ科 | 8～11 クロダイ上顎歯骨 |
| 12～15 ハマフエフキダイ上顎歯骨 | | 16 ベラ科下咽頭骨 |
| 17～20 ベラ上顎歯骨 | 21・22 ベラ科下咽頭骨 | 23～26 フダイ科上顎歯骨 |
| 27・28 フダイ上咽頭骨 | 29 フダイ科下咽頭骨 | 30 イロフダイ上咽頭骨 |
| 31・32 ニザダイ科ウロコ | 33 ハタ類咽頭骨 | |

図版 39

- | | | |
|--------------|----------------|----------------|
| 1～4 カワハギ上顎歯骨 | 5・6 カワハギ背ビレ第1棘 | 7・8 ハリセンボン上顎歯骨 |
| 9 ハリセンボン棘 | 10 鋤骨 | 11～15 魚骨トゲ類 |
| 16 脊椎 | 17 棘 | 18 不明歯骨 a |
| 19 不明歯骨 b | 20 不明歯骨 b | 21 カワハギ歯骨 |



図版38 出土魚骨(1)



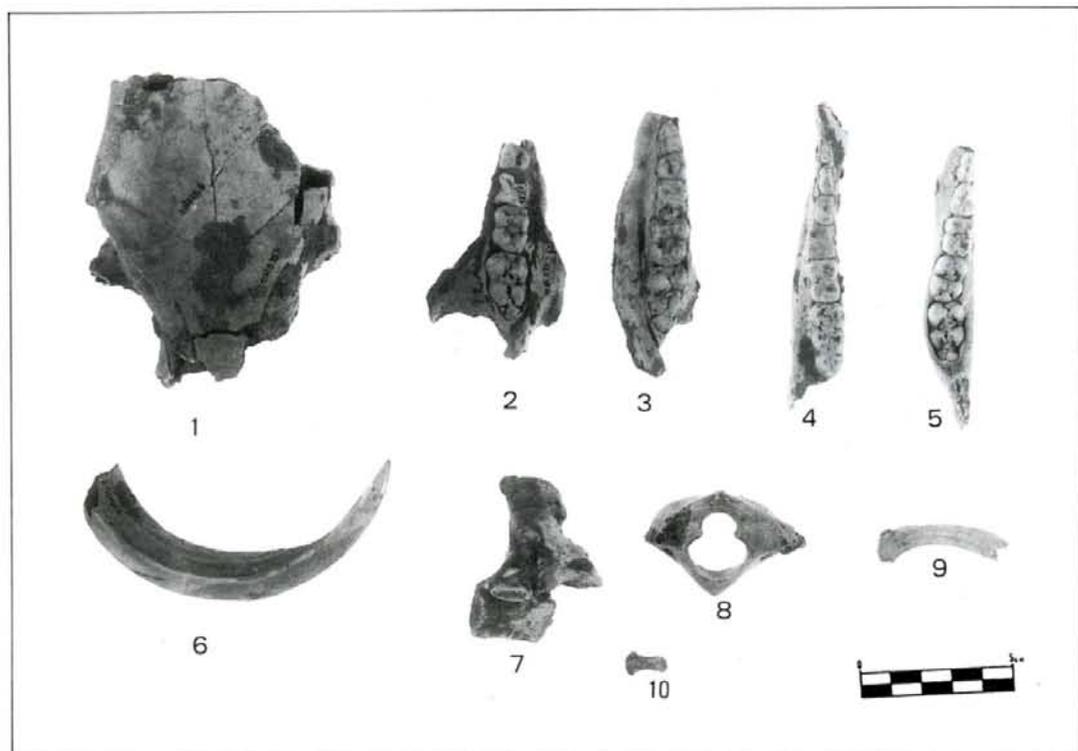
図版39 出土魚骨(2)

図版40 イノシシ骨

- | | |
|--------|---------|
| 1 頭骨 | 2 右上顎骨 |
| 3 左上顎骨 | 4 左下顎骨 |
| 5 右下顎骨 | 6 右下顎犬歯 |
| 7 椎体 | 8 環椎 |
| 9 肋骨 | 10 尾椎 |

図版41 イノシシ(1~12)・大型獣(13・14)

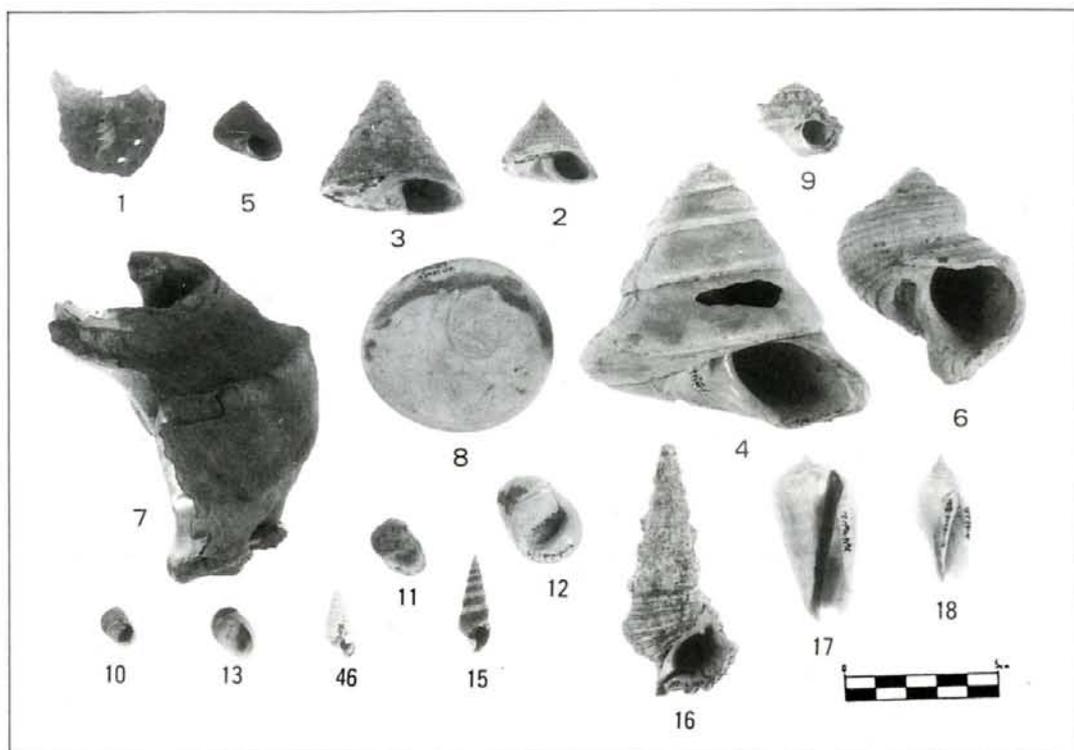
- | | |
|----------|-----------|
| 1 左上腕骨 | 2 右橈骨 |
| 3 寛骨 | 4 大腿骨 |
| 5 脛骨 | 6 右脛骨 |
| 7 右踵骨 | 8 距骨 |
| 9 中心足根 | 10 中手(足)骨 |
| 11 指骨 | 12 腓骨 |
| 13 ウシ中節骨 | 14 ヤギ下顎骨 |



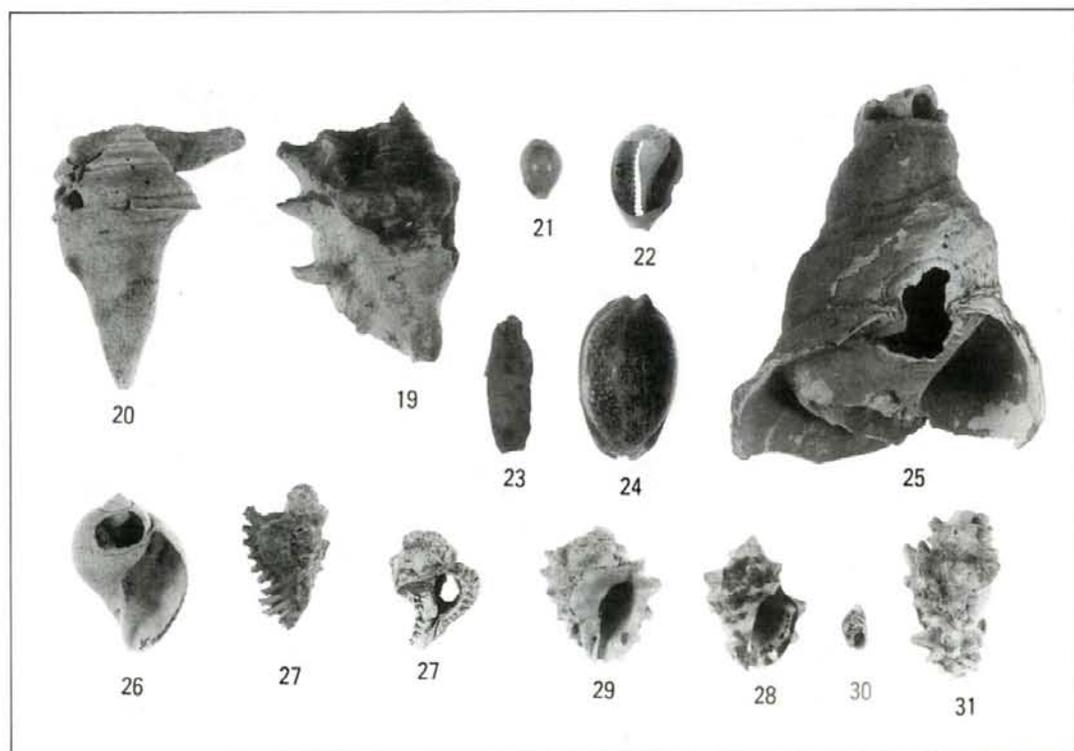
図版40 出土イノシシ骨



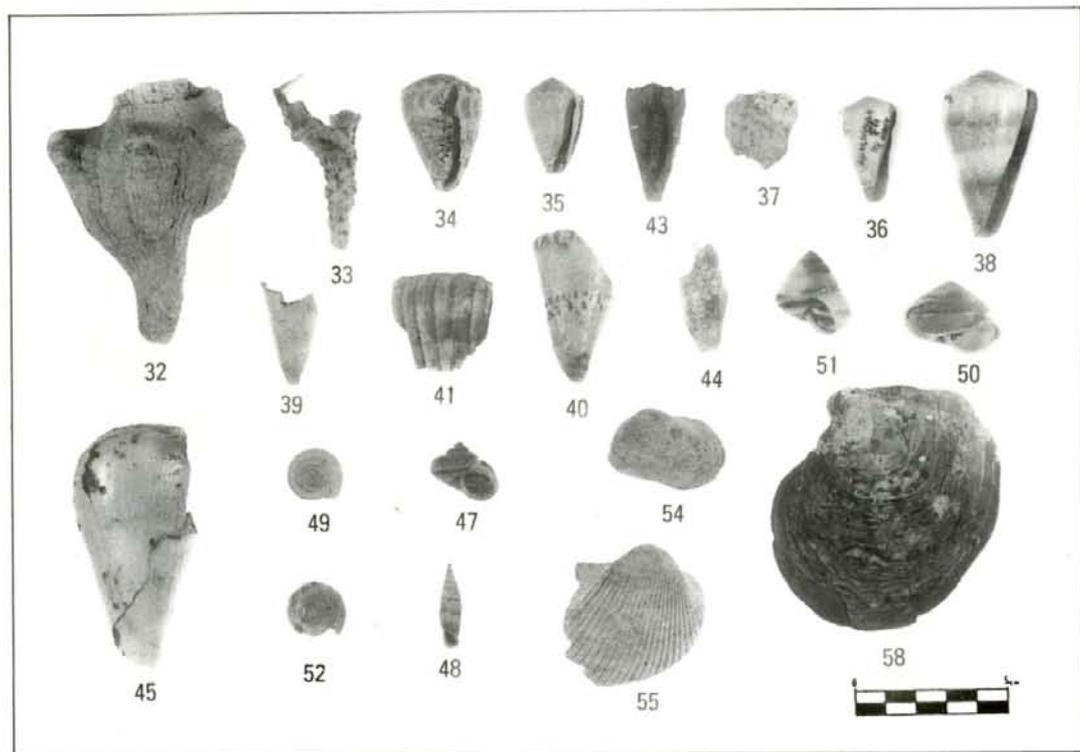
図版41 出土イノシシ骨(1~12)・大型獣(13・14)



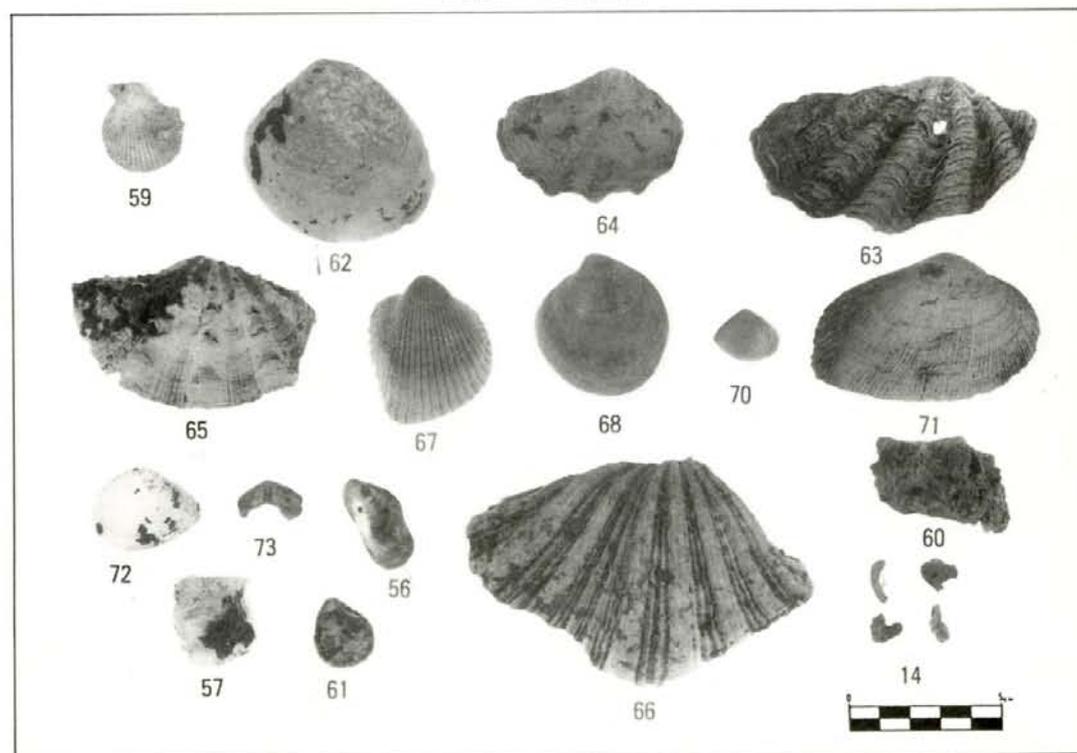
図版42 出土貝類(1)



図版43 出土貝類(2)



図版44 出土貝類(3)



図版45 出土貝類(4)



浦添市民憲章

わたくしたちは、
古い歴史と新しい希望にみちた。
てだこの都市・浦添の市民として、
この憲章を定め誇りをもって
その実践につとめます

1. わたくしたちは、
自然を愛し、みどり豊かなまちをつくります。
1. わたくしたちは、
きまりを守り、住みよいまちをつくります。
1. わたくしたちは、
働く喜びをもち、活気にみちたまちをつくります。
1. わたくしたちは、
平和を愛し、文化の香り高いまちをつくります。
1. わたくしたちは、
心と体をきたえ、明るく健康なまちをつくります。

チヂフチャー - 洞穴遺跡

— 範囲確認調査報告書 —

発行 浦添市教育委員会
浦添市字宮城237番地
電話 098-877-4556
発行年月日 昭和63年3月
印刷 (株) 尚 生 堂
浦添市字沢岨70番地
電話 098-876-2232